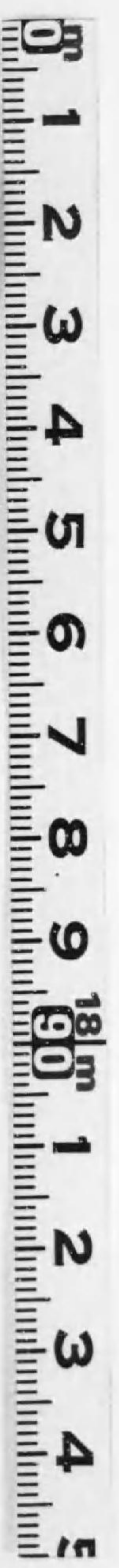
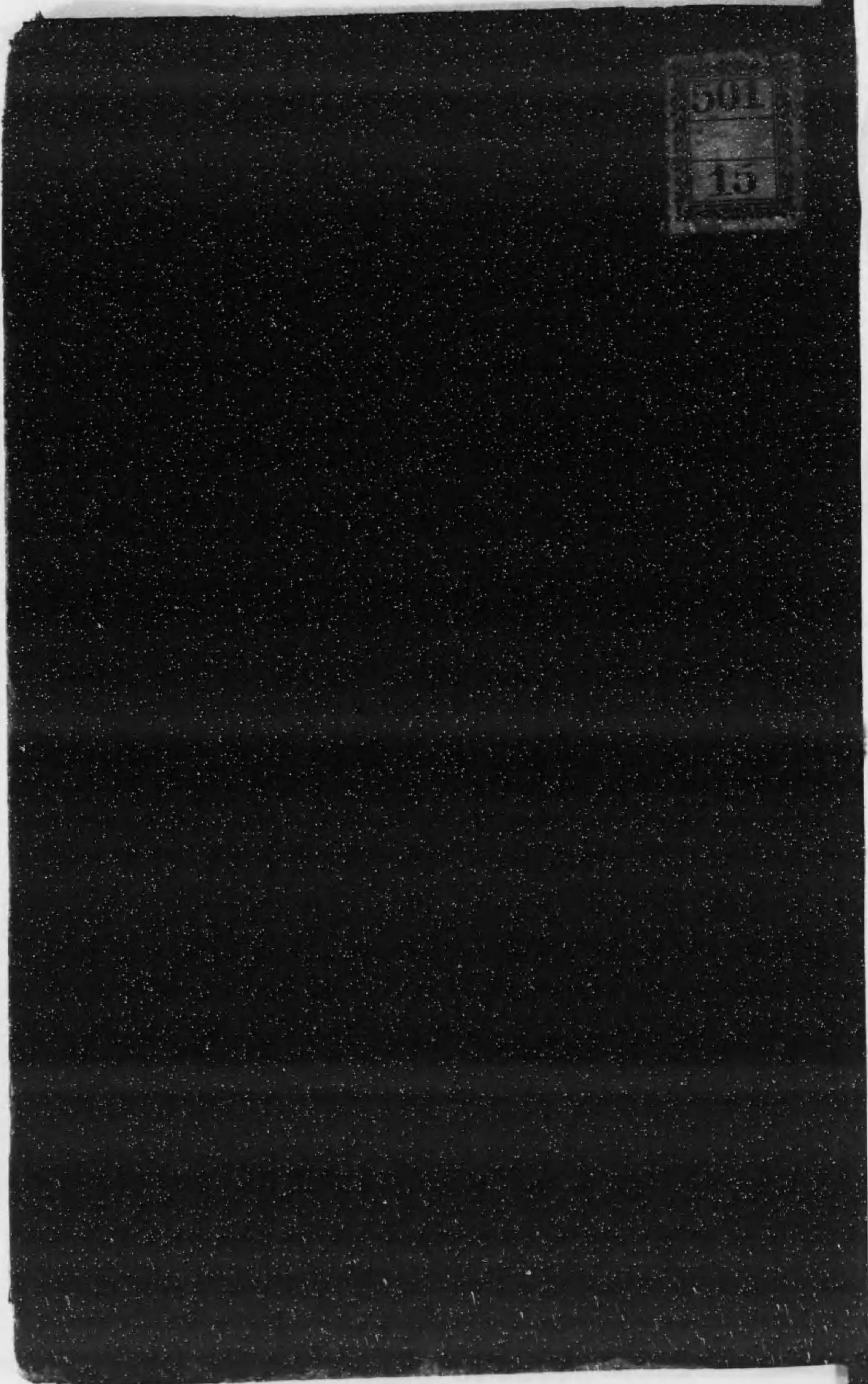


始



501
15



50/-15

るげ於に上史化文

愛戀と性女

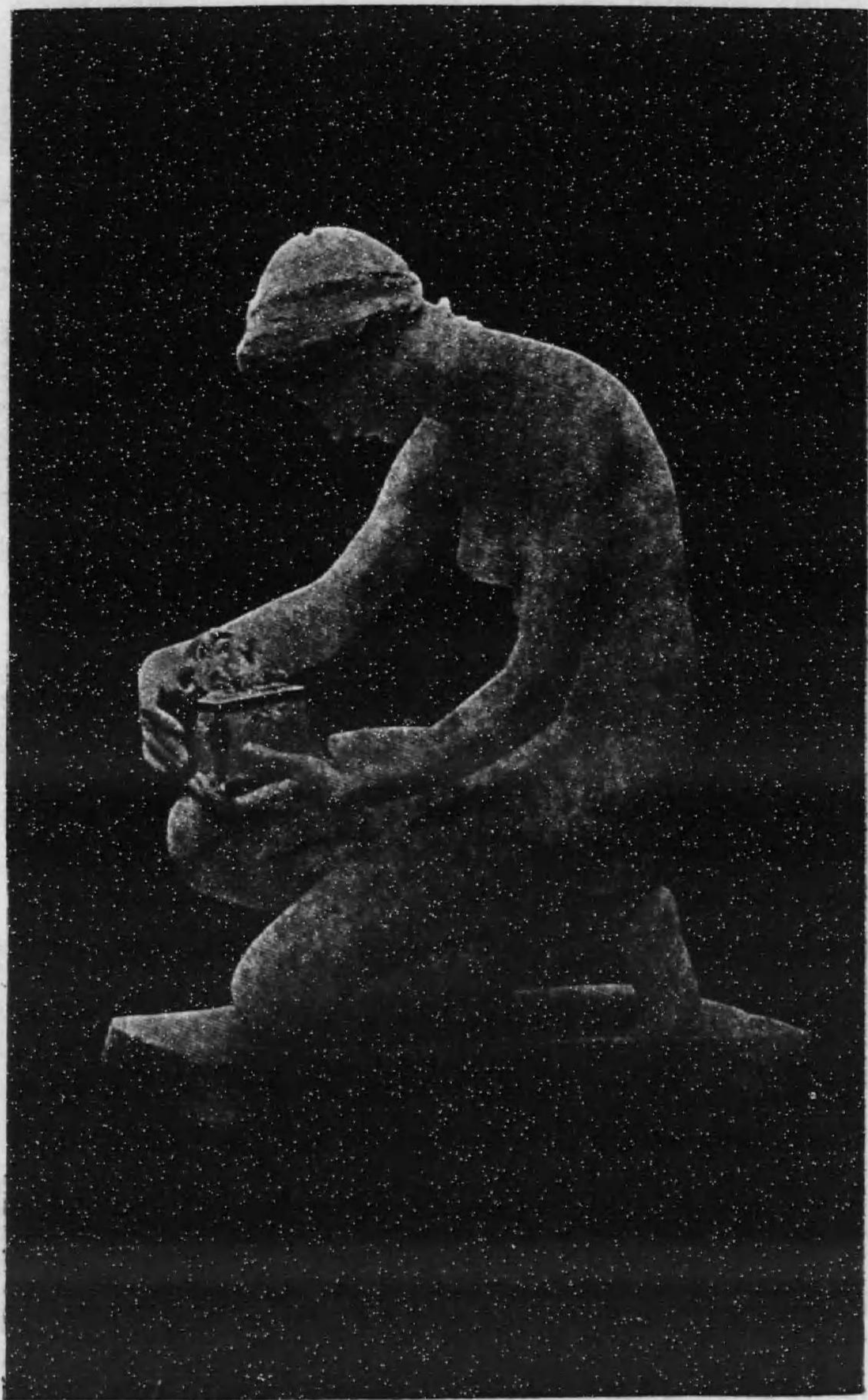


著島孤島中

行

大正 佑天
 社 3.24
 發 10
 内交

天



性 女 の 初 最



はしがき

本書は此の二三年の間に折に觸れて筆を執つたものうちから、主として女性と戀愛に關したものを集めたのである。中には雑誌などに發表したものもあり、まだ何處へも發表しないものもある。其の女性のうちには、正史上の人物もあれば、神話傳説中の人物もあり、又古今の名作中の人物もあるので、表題の如きも、正しくは「歴史、傳説及び文藝上に現はれた女性と戀愛」とでもすべきであるが、餘りに長々しくなるので、便宜上「文化史上に於ける女性と戀愛」として置いた。もとより興味中心の一小著述ではあるが、著者としては、多少の努力を注がない譯ではない。

大正十年正月

著者

目次

最初の女性——エヴとバンドーラ……………	一
歐洲の神話及び傳説に現れた戀愛——ヴェヌスとアドニス——オルフォイスとユー リヂケ——ランスロットとギニワー——トリスタンとイソルド……………	二
希臘神話に於ける異類の女性——魔女メディアの戀……………	三五
肉の戀、靈の愛——アスパシアとマリア・マグダレナ……………	五七
戀の女王——エリザベスとメリー・ステュアート……………	九九
青春の戀と感溺の戀——ジュリエットとクレオパトラ……………	一三九
愛國の女性——ジャンヌ・ダルクとシャーロット・コルデー……………	一九一
戀愛と神祕——アラディーヌとシロワンナ……………	二三七

挿畫

最初の女性 (口畫)

エリザベス女王

二六

シーザーの前に立つたクレオパトラ

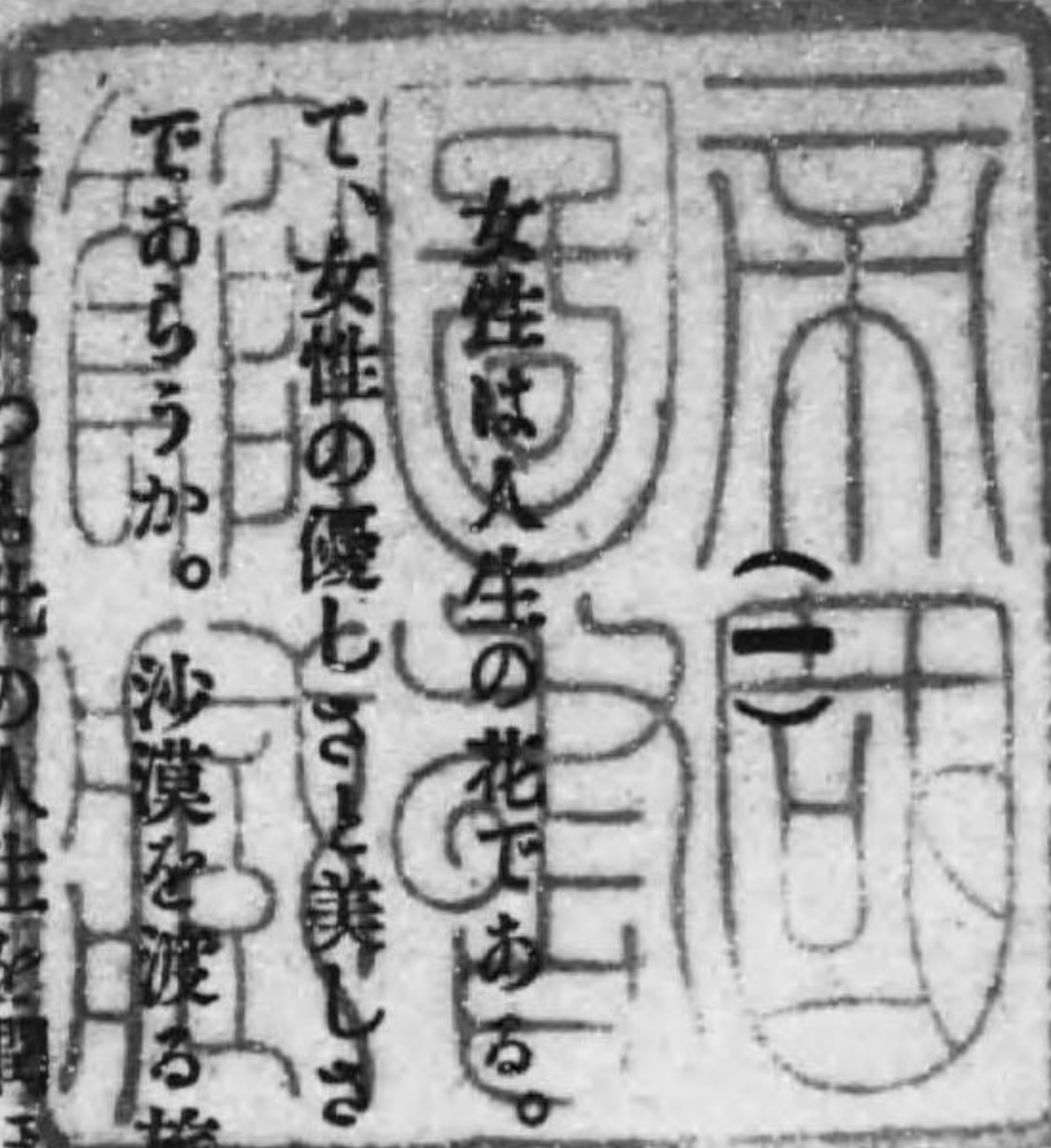
一七

文化史上
に於ける

女性と戀愛

最初の女性

—エヴとバンドーラー—



女性は人生の花である。此の世の光である。無から出て無へ没する此の人生の旅路に於て、女性の優しさと美しさとが與へる慰藉の力がなかつたら、人は果して此の旅に堪へ得たであらうか。沙漠を渡る旅人が、燃えるやうな思ひを寄せるといふオアシスのやうに、女性はいつも此の人生を潤ほす泉であつた。多くの旅人は、女性の美と愛とに、焼けるやうな咽を露ほしつゝ、苦しい旅路を續けて行く。如何に多くの詩人が、女性に對して、女性の美と愛とに對して、高らかな讚美の聲をあげたであらうか。如何に多くの美術家が、女性の優しさと美しさを現はさうとして、其の生涯を獻げたであらうか。それにも拘らず、女性の美は、盡きる期のない泉のやうに、いつも新らしく、若々しく、果てしもなく、人

の心に湧き出で、来る。

併し一面から見ると、かういふ女性の美と愛とは、造化が人間を誘ふための一つの幻影でもあつた。一たび其の蠱惑から醒めて、現實の生に目を注いだ瞬間に於て、曾て女性の魅惑を痛切に感じた多くの人々は、翻つて女性そのものを呪はずにはゐられなかつた。

かういふ所から古代の神話詩人は、人類最初の女性を想像した。彼女は人間に對する慰藉の力であると共に、人生に於ける有らゆる禍の源でもあつた。

猶太の神話に於けるエヴは、かういふ女性であつた。希臘の神話に於けるバンドーラもかういふ女性であつた。

猶太の神話に於て、蛇の巧言に惑はされて、最初に智慧の木の果を味つた者は、エヴであつた。其の時から人間の目は開けて、最早裸體の姿を蔽はずにはゐられなくなつた。樂園の幸福は、彼等の前から消えて、生命の樹は、もう彼等の手の達かないものとなつた。人生に死とあらゆる不幸とを持來したものは、エヴの犯した罪であつた。

希臘神話では、最初の女性の造られたことが、既に人類の罪惡に對する懲罰であつた。

女性の祖バンドーラは、人類の保護者プロメトイスが、天の火を偷んで人間に與へた罰として、天上から送られたものであつた。そして彼女と共に、あらゆる災禍と不幸との種子を入れた美しい手匣を送つて、彼女の手で開かせることになつてゐる。

バンドーラの神話によつて、希臘民族の女性觀を瞥見しよう。

(二)

大神ゼウスはオリムプス山上の玉座から遙かに地上を瞰下すと、彼方此方に紫色の煙が立騰つて居る。腫を凝らして尙ほも煙の立騰る邊を眺めると、煙の底にひら／＼と紅色の舌を翻へすのは、疑ふ方もない、火の燃え盛つて居るのだ。大神の顔には憤怒の色が電光のやうに閃めく。人間のために天上の火を求めたプロメトイスの熱心な言葉が胸に浮ぶ。執着の強いあの巨人の其の時の態度があり／＼と眼に映る。禁制を犯して天上の靈火を盗んだ罪！ 神意を蔑如して人間に火を與へた罪！ 此の大罪を犯した巨人の罪科を定める

ために、神々の會議が召集される。會議の決定は、此の巨人の處分よりも先に、此の罪惡の原因となつた人間に罰を加へようといふことになつた。其の手段として、鍛冶の神ヴルカンに命じて、一個の女を造らせる。

ヴルカンは大神の命を受けると、オリムプスの女神を模型にして、一個の土偶を造り上げる。女神アテーネはこれに白絹の襦衣しなぎを着せ、頭上には花環と黄金の冠を置き、冠の上には長い面帕エーペを掛けた。冠にはヴルカンが得意の手練を揮つて、水と陸との様々の動物を生けるが如くに鑄りつけた。

ヴルカンが心を籠めて造り上げ、アテーネの女神が工夫を凝らして装ひ立てた此の土偶は、今やオリムプスの不死の神々にも相應はしい姿を大神のみ前に現はした。美の女神アフロデターは、真先に其の頬と唇に吻くちを接つて、女性の美を與へる。智慧の女神アテーネは、其の額に手を當て、智慧を與へる。樂神アポローは、其の唇と指に手を觸れて、音樂の能を授ける。使神ヘルメスは、其の目と耳と鼻を摩なで、萬事につけて、見たい、聞きたい、知りたいた願ふ好奇心を與へる。其の他の諸神も、思ひ／＼の贈物をする。神々は最後に此の女性

に「バンドーラ」といふ名を與へた。「凡ての神々から贈物を受けた者」といふ意味である。

かうして造られた最初の女性は、永久に男の心を魅ひくべき一切の性質を賦與されて、永久に人間の運命を呪ふべく、地上に送り下されるのである。

大神ゼウスは、使神ヘルメスに命じて、美しい贈物をプロメトイス兄弟の許へ届けさせる。淡紫色うすむらさきの葡萄を聯つねたやうなバンドーラの眼に遇つて、プロメトイスの心はあやしくゆらめく。けれども次の瞬間には、其の曇りのない眸ひとみの底に、早くも自分の暗黒な影を認めた。彼れは心の中に神の怒りを豫期して居る。神意に背いて、天上の火を人間に與へた大罪が、報復むくひなしには濟まぬことを覺悟して居る。彼れは此の意外の贈物の蔭に、神々の復讐を考へずには居られなかつた。プロメトイスは、英雄の如く、バンドーラの魅力に打勝つた。彼れは徐しかに弟の方へ目を向けた。

「神々の贈物に用心せいで」

けれどもエビメトイスの心は、疾うにバンドーラの眼に吸込まれて居た。彼れはプロメトイスの先見を有たなかつた。前方さへを見ずに、いつも後方うしろを回顧ふりかへる。神の深刻な復讐を考

へる暇もなく、彼れは喜んで此の贈物を受けた。

バンドーラを得て、エビメトイスの生活は急に明るくなつた。花の色を見ても、從來にない光が目映る。鳥の歌を聞いても、曾て覺えない旋律が胸に響く。彼れの目の前には新らしい世界が開かれた。今日の幸福に思ひ比べて、「從來の生活には眞の幸福はなかつた！」と心の中で呟く。何うかした拍子に、「神の贈物に用心せよ！」といった兄の言葉を回想することがあつても、直ぐに打消して、兄の杞憂にしてしまふ。二人の生活には、光が充ちて居た。二人の幸福には、一點の暗影も見えなかつた。

バンドーラは、オリムプスの山を下る時に、ゼウスの大神から象牙の匣を授かつて來た。其の時アテーネの女神は、彼女の耳へ口を寄せて囁いた。

「忘れても此の匣を開くのではありませんよ！」

バンドーラが地へ下つた時、此の世界は歡喜と驚異に充ちて居た。何を見ても、新らしい、不思議な物ばかりであつた。見たい、聞きたい、知りたいた願ふ心は、晝夜の差別なく彼女を苦める。夫の巨人の重い唇から聞く様々の説明で、暫くの間は其の好奇心を満たしても

居たが、日の經つにつれて、夫の説明が次第に新らし味を失つて行く一方に、見たい、聞きたい、知りたいたの心は彌増に募つて行く。彼女は有らゆる新奇な物を獵り盡した後に、不圖天上から携へて來た匣の事が胸に浮んだ。アテーネの女神の誠めを守つて、見てはならぬものと定めて居た匣の事が、其の日から急に氣になつて來る。あの匣の中には何が入つて居るのだらう？ あの美しい象牙の匣、蓋にも、身にも、一面に美しい物の像を彫つたあの手匣の中には、どんな美しい物が入れてあるのだらう？ 寶玉でもあらうか？ 或は何かもつと好いものかも知れない？ 有らゆる好いものを私に下すつた神々が、役にも立たぬものを、こんな美しい匣へ入れて下さる筈がない！ 彼女はアテーネの言葉を疑ひ初めた。先にオリムプスの神々が、兄弟の巨人に命じて、地上の動物に自衛の力を賦與させた時、苦痛、疾病、心配、悔恨、哀愁などいふやうな、此の世界に不幸の種を蒔くものは、態と取除けて、別の匣へ藏つて置いた。バンドーラに授けたのは此の匣であつた。

けれども此の美しい匣に、さうした災の種が入つて居ようとは、神の外に誰が知らう？ バンドーラの好奇心は、日増に募つて行く。匣の事が氣になつて、夜も眠れない程になる。

初めは匣を手に執つて、撫で、見たり、搖つて見たり、目を着けて覗いたり、耳に當て、聞いたりした。何とかして蓋を開けずに、中味を知りたいと、様々に心を碎く。併し彼女は到底此の匣を開かせるために、神々に選ばれた女性であつた。如何に苦心しても、蓋を開かずには、中の寶が見えないと分つた時、彼女はもうどうしても辛抱が出来なくなつた。バンドーラは、震へる手先で、そつと蓋を開ける。と見る間に、匣の中に封じられて居た有らゆる病魔や、嫉妬、怨恨、復讐などの有らゆる悪魔が、羽蟲のやうに、躍り出して、地上へ廣く散つて行つた。バンドーラが慌て、蓋を閉めようとするうちに、恐怖、悲哀、疑惑などの妖魔は、早くも其の身邊に襲ひかゝつた。バンドーラは、蒼青になつて慄へながら、竊と匣の中を覗いて見た。其の時、匣の底には、總ての妖怪の飛去つた後に、只一つ残つて居るものがあつた。それは闇の底に輝く一點の星のやうに、野に咲いた一莖の百合のやうに、人間の破滅の裡に踏止まつた「希望」であつた。此の瞬間に、バンドーラの頬には、幽かに血の色が上つた。胸の中には新らしい勇氣が芽を出して來た。彼女は遠い將來に面を向けて、神々の復讐に堪へ忍ぶ力を得たのである。

歐洲の神話及び傳説に現れた戀愛

- ヴェヌスとアドニス —
- オルフォイスとユーリヂケ —
- ランスロットとギニヴ —
- トリスタンとイソルド —

(一)

神話及び傳説は、戀物語の寶庫である。如何なる民族の神話にも、男神と女神との戀を語らないものはない。そして如何なる國民の傳説でも、それに豊麗な色彩を添へるものは、花のやうな男女の戀物語である。私が今爰に、希臘神話から、「ヴェヌスとアドニス」及び「オルフォイスとユーリヂケ」の戀物語を取り、中世の騎士傳説から「ランスロットとギニヴ」及び「トリスタンとイソルド」の戀物語を選んで、其の大意を語らうとするのは、それが必ずしも神話及び傳説に於ける戀物語を代表するといふ意味ではない。只多くの、そして千態

萬様の戀の物語の中でも、或は畫題として、或は詩材として、一番多く人の耳目に熟したものを取つたのである。若いシェークスピアの處女作といはれる「ヴィナスとアドニス」を初めとして、アドニスの神話は、如何に多くの詩人に、美しい抒情詩の題目を與へたか？ 樂人の王オルフォイスが、妻を慕うて冥界へ下つたあの凄婉な戀物語が、プラウニング、モリス、レイトン、ワッツ、バーン・ジョーンズらの、近代の詩人、畫家によつて、如何に我々の心に多くの親みを加へたか？

數ある中世の傳説中でも、近世の詩人に多くの好題目を與へたものは、アーサー王と圓卓の騎士を中心としたあの一團の説話圈に若くものはない。アーサー傳説の中でも、最も強く人の興味を惹く部分は、稀世の勇士ランスロットと王妃ギニヴーとの道ならぬ戀の物語である。此の一つの戀物語が加はつて、初めてあの雜駁な、しかも亦單調な、一團の説話圈に、一點の眼睛が點せられ、近世的の色彩が描き出されるのである。マローリーがあの有名な「アーサー王物語」を綴つてから以來、如何に多くの詩人が、是等の傳説を歌つたらう？ そして是等の詩の多くが、あのテニソンの有名な長詩を初めとして、如何に多くの同

情と崇敬を、ランスロットの花々しい、しかも悲しい生涯に寄せたらう？ トリスタンとイソルドの傳説が、近代の詩人に與へた感興は、必ずしもランスロットとギニヴーの傳説に譲らない。マシュー・アノルドやスキンバーンの詩を擧げるまでもなく、此の戀物語に不朽の表現を與へたワグネルの有名な歌劇を見落す事は出来まい。

(三)

パフォス王の子のアドニスは、評判の美少年であつた。其の形の整つた、何處に一つ點の打ち處のない立派な體格は、男性美の標準として、希臘全土に知れ渡つた。オリムプス山の神々さへ、自分らの作つた人間中の傑作として、驚嘆の眼を見張る程であつた。けれどもアドニスはオリムプスの神々や、全希臘の人間によつて獻げられる讚美の聲には、耳をも借さなかつた。彼れは其の身に具はつた美と力とを思ひのまゝに享樂する外には、何事も考へる違がなかつた。ミケランジェロの彫刻に不朽の生命を宿したあの鐵のやうな腕の

力、若い牡鹿のやうな敏捷な脚の運び、正確な視力——さういつた天賦の能力が、此の少年を狩獵の方面へ引寄せたのであつた。

今しも獲物を追つて林から現れた此の美少年の姿が、丁度波打際を逍遙して居た愛の女神ヴェヌスの目に觸れた。其の瞬間に、海の沫から生れた此の女神の胸は、言ふに言はれない痛みを覺えて、吸ひ寄せられたやうに、ジツと其の場へ立竦んでしまつた。女神は自分の心が空虚になつたやうに感じた。女神の胸の痛みを癒やすものは、アドニスアドニスの愛より外にはなかつた。

此の時から、女神の姿は、キプロスの島にも、オリムプスの山上にも、滅多に見られないやうになつた。今迄は其の姿の美しさを誇りとして、日の光をも避ける様にして居た此の女神が、今では獵夫の粧ひをして、山林を駆け廻つた。女神は其の愛の前には一切の誇をも捨て、戀人の跡を追つた。アドニスの行く處には、何處へ行つても、獵夫の粧ひをした女神の姿に出會はないことはなかつた。併しかうして附きまゝとつて行くうちにも、女神の心には、此の少年の勇ましい姿が、言ひ知れぬ誇りであると共に、其の踏んで行く道には、

危険の種子が撒き散らされて居るやうに思はずには居られなかつた。

「お前の身體を危険の中へ投げ出して、わたしにはらくさせるやうなことはよしてお呉れ。ね、向見すの勇氣は讃めたものでない。もつと臆病になつた方がいゝ。自然が武装させた獸には、忘れても手をお出してない。此のヴェヌスを迷はしたお前の若さや、美しさも獅子や野猪の心には、何の感じもないだらう。あゝいふ猛獸の怖ろしい牙と怪物のやうな力を考へて御覽なさい。忘れても、お前の大切な身體をさういふ危険に曝して、取返しをつかないやうなことをしてお呉れでない。」

斯う言つて、女神は少年の向見すを誡めた。けれども少年の心はまだ戀を知らなかつた。そして女神がいつも自分の跡ばかりついて來るのを、不思議に思つて居る少年は、女神の誠めを鼻の先であしらつて、斯う答へた。

「明日の獵は今迄手にかけてものゝ中でも、一番大きい、一番年數を経た大野猪です。まあ、見ていらしやい！　デアナの車が、もう一度キプロスの野を通り過ぎるまでに、其の怪物の血だらけな死骸が、林から轉げ出しますから。」

斯う聞いて、女神は顔色を變へた。そして其の夕暮、谷の方へ下つて行く戀人の姿を見送りながらも、心の中では、明日の獵の事が氣になつてたまらなかつた。やがて女神は白鳥に曳かせた車を驅つて、空を翔つて行く間にも、胸は明日の取越苦勞で塞がつて居た。天にも更へ難い大切な戀人の上に、何か不吉な事が降りかゝつて来るやうに思はれてならなかつた。夜の明けるのを待ちかねて、女神は林の方へ車を走らせた。アドニスに會つたら、どうしても今日の獵を止めさせねばならぬと思つた。今日に限つて白鳥の翔り方が遅いやうな氣がして、頻りに心を焦らせて居た。

けれども曉の色が東の空を染めた時には、アドニスはもう其の日の獵を始めて居た。女神は遠方の空から、アドニスの愛犬の聲を聞いて、しまつたと思つた。氣のせいか、其の聲はいつもの勝利の吠聲ではなかつた。悲哀の調子が、長く尾を曳いて、林の底から昇つて來た。

ヴェヌスの車は、疾風のやうに空を横ぎつて、キプロスの野へ降つた。踏みにじられた叢の中には、あちらこちらに、手を負つて倒れた獵犬に交つて、アドニスの美しい體軀が、大理石の彫像のやうに、靜かに草の上に横はつて居た。其の雪のやうな太腿には、怖しい怪物の牙の跡が、牡丹の花のやうに、ぱつと口を開いて、噴き出す血汐は、あたりの草を紅に染めて居た。

其の時アドニスは、目を閉いで、じつとして居る間に、異様な惡寒が、身の周圍へ這ひ寄つて來るのを感じて、死の手が自分の身に觸れてゐることを知つた。其の刹那に、少年の頭には、ヴェヌスの言葉が電光のやうに閃いた。それは此の少年の胸に初めて生れた愛の閃きであつた。生命よりも、時よりも、死そのものよりも強い、不滅の愛の閃きであつた。

女神が身を屈めて、雪のやうな腕を、少年の頸へさし入れた時に、生命の炎はかすかな光をあげて、女神の愛を受入れるかのやうに、少年は其の冷たい唇を動かした。其の冷えて行く唇が、女神の熱い唇に觸れてゐる間に、アドニスの靈魂は、永久に此の世を去つた。戀人の再生の望が、かなはないと知つた時、ヴェヌスは恨めしさうに叫んだ。

「此の悲しい思ひ出は、永久に消えることはない！ アドニスよ、お前の死とわたしの悲みは、年毎に新たになるだらう。お前の血は、花となつて永久に残るだらう。」

かう言つて、女神は熱い涙をはら／＼と落した。其の涙が草の上へ落ちて、少年の血に注いだ時、其處から一叢の花が生えた。それは黄金の莖を有つた純白な花であつた。そしてアドニス^{アドニス}の運命をそのまゝに、風で咲いて、次の風には散つて行くといはれる程、はかない、短命な花であつた。

(III)

詩人の王と呼ばれたオルフォイスは、日神アポローと九人のミューズ（藝術の女神）の一人に數へられるカリオーペの間に生れた子であつた。音樂の才を父から受け、詩歌の才を母から受けた彼れは、生れながらにして音樂の妙境に達した。彼れが豎琴を取つて、彈き出す時、あらゆる野獸は、森の茂みを離れ、山中の洞窟を出て、我れ知らず其の周圍に引き寄せられた。友を呼び交はす鳩の聲も、牙えた雲雀の歌も、耳を裂くやうな鶉の聲も、流れるやうなナイチンゲールの夜の歌も、彼れの音樂の前には、びつたりと音をひそめた。其

の美妙な音律には、風も囁きを止め、林の木も自然にうなづいた。人でも、獸でも、木でも、岩でも、彼れの音樂に魅せられないものはなかつた。子守歌を彈く時には、すべてのものは、たはいもなく眠つてしまつた。愛の曲を奏する時には、諸々の花は一時に開いて野も、山も、彼れの奏でる歌の調子に共鳴するやうに見えた。また彼れが開戦の曲を彈き出すと、多くの猛獸は、忽ち眠りから醒めて、咆吼の聲をあげ、トラキヤの勇士らは、武者振ひして、其の小屋を跳び出すのが例であつた。

オルフォイスは、トラキヤ國中でも最も有力な王の一人として、威と徳とを以て人民から崇められた。併し最愛の妻ユーリヂケとの間にまつはつた宿命の糸は、此の詩王の生涯に盡きる期のない哀愁の帳を掛けた。

オルフォイスとユーリヂケの結婚の日、其の祝宴に列つた婚姻の神ヒメンの手に取つた炬火は、いつものやうな金色の燄を立てずに、たゞ眞黒な煙りを立て、ふす／＼と燻つて居た。新婚の二人は、其の煙りのために目から涙を流した。これが恐ろしい不吉の前兆であつたことは、間もなく事實に現れた。新婚の甘酒のまだ汲み盡されない間に、ユーリ

ヂケは、或日毒蛇に足を噛まれて、あはれにも、はかない最期を遂げた。

ユーリヂケを失つたオルフォイスの悲歎は、殆んど譬へを取るものがない程であつた。其の悲みの曲は、天上の神々にも、地上の人間にも、此の世の一切のものに向つて、心の悶えを訴へたけれども、オルフォイスの心には、何の慰めも來なかつた。オルフォイスは悲みの餘り、豎琴を抱いて、オリムプスの山上へ辿つて行つた。そして大神ゼウスの前に立つて、其の切なる胸の思ひを訴へて、冥府よみの國へ降ることの許可を求めた。オルフォイスの切なる戀は、暗黒な冥路よみちの危険を冒しても、再び其の妻を地上へ運び返さうと決心させた。

オルフォイスは大神の許可を得るや否や、豎琴を抱いて、暗黒の世界へ降つて行つた。地上の光の達しない常闇の世界を、彼れは只愛の力をたよりにして、一筋に進んで行く。終に冥府の門に達した時、地獄の番犬ケルベロスは、三つの頭を振り立てながら、此の闖入者に向つて、恐ろしい吼聲を立てた。其の時オルフォイスは、徐かに其の抱いた豎琴に指を觸れると、猛獸は忽ち聲を止めて、三つの頭を垂れながら、懐しさうに彼れの足元へ寄つて來た。彼れは徐かに門を入つて、プルートの領土へ踏み込んで行つた。

其の時プルートの王國では、絶えて聞かれなかつた美妙的な音樂が、オルフォイスと共に流れて行つた。豎琴の音色は、例へば黒い天鵝絨びろうせの柘衣ひつてかけへ織り込まれた銀の糸のやうに、細く、冴えた一筋の旋律を、闇の領土へ擴げて行つた。風に吹き捲くられた木の葉のやうに、此の闇の世界を往來するすべての靈魂が、一つ／＼立止つて耳を傾けて行く。

斯うしてオルフォイスは冥府の王プルートと女王ベルセフォネが、椅子を列たまべた玉座の前へ來た。其の時ベルセフォネの心は、此の不思議の樂の音色に誘はれて、あの美しいシチリヤの花園を逍遙した遠い昔の楽しい日に返つて行つた。彼女は無言で夫の側に坐つてゐるうちに、目の底にはいつか涙がにじんで來た。

顛へを帯びた歎息の音色を、永く引いて、糸の音はびつたりと止んだ。其時オルフォイスはプルートに向つて、其の心の願ひを訴へたのである。ユーリヂケを返して貰ひたい。彼女は自分の生命である。彼女を伴つて、再び日の光の照らす處へ歸ることを許して貰ひたい。——といふのが彼れの切なる願ひであつた。

氷のやうなプルートの心も、此の熱い願ひに解けずには居なかつた。ユーリヂケは再び

夫の手に戻されることになつた。併しそれには一つの條件が付いて居た。それは日光の中へ出るまでは、後を振り返つてはならないといふ事であつた。オルフォイスは異議なく其の條件に従つた。そしてユーリヂケを呼び出す聲を聞いた時には、嬉しさに胸を躍らせて、いそ／＼と元と來た道を歩き出した。

オルフォイスの後からは、其の愛する妻の、軽い、小さな足音がついて來た。彼れは歩きながら、折々立止まつて、其の足音を聞いた。其の度に、彼れの胸は歡喜の波で脹れ上つた。

「妻は後に居る——直ぐ後からついて來る。二人の幸福の日は終らなかつた。地上に居た間に言ひ残した愛の言葉を、今度こそは残らず言つてしまはう」——斯う思つて、オルフォイスが進んで行く。

後からは、蹠足を引き引き、小さな足音が絶えず續いて來た。彼れは彼女が直ぐ後に居るやうな氣がした。手を伸ばしたら、觸る位に、首を傾げたら、息がかゝる位に。

そのうちに、何かのはづみで、ふと一つの恐ろしい疑ひが起つて來た。ブルトーが若し自分を欺したのであつたら、どうしよう？ 後からついて來る足音が、若しもユーリヂケ

ではなくて、見ず知らずの幽霊だつたら、どうしよう？

やがて急な坂道へかゝつて、かすかに遠くの方に、地上の光が見えはじめた時に、此の疑惑が、恐ろしい力を以て彼れの胸を壓して來た。後の足音が今にも止まりさうな氣がした。そして地上へ出た時に、自分はまた寂寞の中へ取残されるのではないか、といふやうな氣がしてならなかつた。疑ひは一步毎に彼れの心に迫つて來た。

其の時、二人はもう地上への出口へ近づいて居た。二人を包んで居る闇は、最早夜の暗さではなくて、黄昏の色であつた。そしてかすかに前の方からさし込んで來る地上の光は、二人の影を、今來た道の方へ投げて居るやうにさへ想像された。

此の時オルフォイスは最早どうしても待ちきれなくなつた。此處まで來ればもう大丈夫だとさへ思つた。さう思ふと共に、彼れは急に後を振り返つた。そして後について來る姿を見た。

けれどもそれはほんのたゞ一目であつた。二人は腕を伸ばして、互にかき抱かうとしたが、其の手はたゞ空を掴むばかりであつた。其の瞬間に、ユーリヂケは再び闇の中へ引戻

されて行つた。彼女は自分を慕つて、此の怖ろしい下界の闇を辿つて來た夫の切なる心を思ふにつけても、今早まつて後を振り返つた夫を責める氣にはなれなかつた。

「さようなら！」と言つた彼女の聲は、絶望の響きに顫へて居た。

オルフォイスは狂氣のやうに追ひ縋つて、引戻さうとしたが、最早どうすることも出来なかつた。彼れは闇の中を流れるアケロン河の岸まで行つて、今丁度船を出さうとする渡守のカロンに向つて、其の船へ乗せて呉れと哀願した。が、カロンは一言の下にはねつけた。「お前などを乗せる場所はない。此の河を渡つた者は、もう二度と歸ることはない。」

斯う言つて、カロンは、ユーリヂケを乗せたまゝ、アケロン河の黒い流れを横ぎつて、漕いで往つてしまつた。

七日七夜の間、オルフォイスは、若しやカロンの心が解けることもあらうかと思つて、アケロン河の岸に立つて、墨のやうな水を見詰めて居たが、終に絶望して、とぼくとトラキヤの森の奥へ歸つて來た。

トラキヤの國では、木も、岩も、鳥も、獸も、悉くオルフォイスの友であつた。彼れが

豎琴を取つて弾き出した時、是等の舊友は、一齊に身を震はして、其の悲しい糸の音色に感動した。それからは晝となく、夜となく、日の光も通らない森の茂みをさまよひながら、オルフォイスは心の悲しみを、琴の音色に洩らして居た。

其の間に、猛獸は彼れの足元へ忍び寄つて、悲しさうな目付で、そつと彼れの顔を見上げた。樂しさうに囁つてゐたさまじくの鳥は、ぱつたりと歌を止めた。そして林の木の間をそよがせながら、梢をかすめて吹いて通る風の聲は、彼れの曲に調子を合せて、「ユーリヂケー ユーリヂケー」とむせんで行つた。

(四)

古代神話の世界から中世の傳説の世界へ入ると、其處には最早原始的な本能の戀ではななくて、人間的の色彩が、鮮かに染め出だされるのを發見する。個々の神話の意味に就いては、學者の間に種々の解釋が挿まれるであらうが、それが如何なる意味であるにしても、

其處に現れた戀物語の上に、原始的社會の狀態が反映されてゐることは、争ひ難い事實である。降つて種々の騎士傳説を産んだ中世の社會へ來ると、其處にはもう原始的狀態からは遙かに進んだ社會の組織と、其の組織の下に生れた道德觀念とが嚴存する。騎士傳説の戀物語が、此の社會と道德との束縛の下に、複雑な濃厚な人間味を帯びたものとなつたのに不思議はない。

アーサー王の宮廷を飾る圓卓の騎士の中でも、一際優れて、騎士中の騎士と呼ばれるのは、ランスロットであつた。ランスロットは水の神女ヴィギアンウィギアンの保護を受けて、十八歳まで水底の宮殿で人となつた。カメロットの城中で、あの圓卓の周圍に一つの座を得てからは、毎年の試合に、彼れは缺かさず王妃ギニヴーの白い手から、優勝の寶玉を受けた。そのうちに彼れの雄々しく、美しい姿は、いつとなくギニヴーの心に消し難い影を宿した。

ギニヴーは、スコットランドの王女であつたが、アーサー王の妃となつてから、其の美と貞淑とを以て、滿廷の渴仰の中心となつてゐた。けれども一たびランスロットに道ならぬ

思ひを染めてから、ギニヴーは最早世の汚れを知らない昔の王妃ではなかつた。ランスロットの若い心は、王妃の火のやうな情に焼かれて、麻のやうに亂れた。彼れは良心の苛責に追はれて、幾度となくカメロットの城を迷ひ出て、狂人のやうに野山を駆け廻つた。併し斯うして胸の苦しさを消さうと思へば思ふ程、罪深い思ひはいよ／＼募るばかりであつた。斯うした煩悶のうちに幾年かの月日が経つた。併し二人の胸の祕密は、いつまでも人の疑ひを惹かずには居なかつた。やがて二人の身邊を立罩めた疑ひの雲が、寛仁な王の心をも騒がすやうになつた。

外部の敵に對して一たびも屈したことのない王の武威も、終に内部から崩れる時が來た。穩かならぬ王の心が、迫害となつて王妃の上に臨んだ時、ランスロットは王妃を擁護して自分の城へ立籠つた。

「王に刃向はうとは思はぬ、併しか弱い女性を保護するのは騎士の務めである」と彼れは揚言した。

法王の懇ろな仲裁で、ランスロットは素直に王妃をカメロットへ送り返して、ブリタニー

の領地へ退いたけれども、王の怒は納まらなかつた。イングランドの統治とギニブーとを従兄いとこのモルドレッドに托して、一軍を率ゐてブリタニーに向つたが、モルドレッドの叛逆に脅かされて、王は中途から軍を班した。

終に最後の日が來た。王は手づから劔を揮つて、モルドレッドの不義を懲らしたけれども、其の身もまた毒刃に觸れて、永久とこしへにアバロンの國に去つた。

モルドレッド叛逆の報を聞くと、ランスロットは劔を取つて、ブリタニーから驅けつけた。けれども其の時には、もう何事も終つて居た。不可思議な運命の手に弄ばれて、一度は王に楯突いたとはいへ、ランスロットの身は、何處に居ようとも、心は王の側を離れなかつた。彼れは髮の毛を掻き捲つて、王の墓の前に泣いた。

やがて立上つたランスロットは、重い足を引擦つて、ギニブーの籠つた尼寺を訪うた。修道院の水のやうな空氣の中で、王妃の心は日一日と澄んで行つた。過去の一切を夢と観じて、王妃は靜かに其の身の罪の消える時を待つて居た。ランスロットも、同じ心で、楯を棄て、灰色の衣に身を包んだ。終に心の火に焼かれて、美しいギニブーの玉の緒が灰と消えて行つ

た時、ランスロットは其の亡骸を王の側に葬つた後、絶食して靜かに其の跡を追つて逝つた。

(五)

トリスタンはコオンウールの王マークの頼みを受けて、アイルランドの王女イソルドを迎へて、歸航の途に着いた。

トリスタンは、此の以前、マーク王のために、三百磅の白銀と三百人の少女とを求めアイルランド王の貢の使を斥けたことがある。其の時、彼れは敵の刃からかすかな手傷を受けた。傷は一寸しかかすり傷ではあつたが、其の刃に塗つた恐ろしい毒を消すものは、アイルランドの王女イソルドが秘藏の靈藥の外にはなかつたので、トリスタンは樂人に姿を窺して、イソルドの館を訪れた。此の時彼れは始めてイソルドの姿を見て、マーク王の許に歸つて、其の美しさを賞讃した。トリスタンの話を聞いたマーク王は、イソルドを迎へる使として、再び彼れをアイルランドへ送つたのである。

トリスタンはバルメニア領主メリアダスの遺児で、其の母はマーク王の妹であつた。トリスタンがダブリンの町へ上陸すると、折柄其の地には、一頭の毒龍が現れて、人畜に害を加へるので、王は全國に觸れて、悪龍の害を除いた者には、恩賞として王女インルドを與へようといふ布告を出して居た。トリスタンは大に喜んで、大膽にも單身悪龍の棲所に向ひ、美事に退治して、證據のために其の舌を切り取つたが、其の身も龍の毒を受けて、其の場へ氣絶してしまつた。

併しトリスタンは、此の度もまたインルドに救はれて、其の靈藥の方で、毒の惱みは拭ふが如くに去つた。此の時からインルドの心には、此の若い、雄々しい騎士の姿が、深く留まつたのである。

トリスタンは王の前へ進んで、切り取つた龍の舌を證據に、約束の恩賞を所望した。王の口から王女インルドを勇敢な騎士に與へるといふ許可を聞いた時、インルドは思はず顔を赤らめたが、トリスタンが重ねて、王女を申請けるものは、自分ではなくて、コオンウォールの主マーク王だと言つた時、王女ははつと顔色を變へた。

やがて出發の準備は萬端整つて、インルドは其の戀人に護られながら、アイerlandの港を立つた。王女の心の底を知つた母の妃は、出發に臨んで、一人の侍女に黄金の酒盃を渡した。その酒盃に盛つたのは、或る藥草の汁を注いだ不思議の酒であつた。それを口にしたら、男女の胸に、愛の思ひを湧き立たせるのが、此の靈酒の奇特である。妃は侍女に向つて、此の酒盃を深く秘めて、コオンウォールに着いてから、王と王女とに飲ませよと命じた。

單調な海上の旅に、トリスタンは豎琴を掻き鳴らして、インルドの鬱を慰めた。一曲が終つた時、樂人は喉の渴きを露すものと望んだ。インルドが見廻した目に、不圖入つたのは藥酒を盛つた黄金の酒盃であつた。王女は先づ己れの唇を酒盃に觸れて、徐かにトリスタンの手に廻した。藥酒の力が身に泌み渡るや否や、全身の血はあやしく湧つて、今迄に覺えのなかつた生の悦びは、巨浪のやうに二人の胸に擴がつて行つた。二人は只息をはずませながら、恍惚として火のやうな眼を見合せて居た。

併し此の瞬間にも、二人の心には、道義の羈は斷たれなかつた。けれども此の時からトリスタンの胸にも、インルドの面影は消し難い影を留めた。愈々

イソルドを無事にマーク王の館へ送り届けてはつと息をつくと共に、彼れは鉛のやうな重い心を抱いて、物狂ほしくマーク王の館を迷ひ出でた。消し難い胸の悶えに、果てもなく異境の空にさすらふうちに、トリスタンは重い矢疵を負うて、ブリタニーの曠野を夢のやうにさまよつて居た。其處で一人の處女に救はれて、處女の戀ろな介抱の下に、死すべき玉の緒を繋いだ。處女の名は戀人と同名のイソルドであつた。

トリスタンは、病癒えた時、處女の心盡しに酬るために、心にもない結婚を承諾した。けれども彼れの心に宿る姿は、ブリタニーのイソルドではなくて、アイルランドのイソルドであつた。

そのうちにトリスタンは、或る日試合の場から創を負うて歸つて來た。創は日増しに重つて行く。トリスタンは忠實な老騎士カルベナルをコオンウォールに送つて、イソルドの手から靈藥を求めさせる。「靈藥を得て歸るなら白い帆を揚げよう、黒い帆を張つたら望絶と知れ」とカルベナルは約束して海へ出た。

トリスタンは病床に身を横へて、カルベナルのたよりを待つて居る。「船は？」と問はれる毎に、若い妻は窓に倚つて海を眺める。船のたよりは、戀人のたよりである。「船は？」と問はれる度に、若い妻の胸は嫉まじさに燃える。

終にカルベナルの船が、遙かの海上に姿を現した時、女の眼には、明かに白い帆が見えた。「船が？」と思はず叫んだ時、トリスタンは病み疲れた身を起して、

「黒か白か！」と尋ねる。

妻の答へのないのをもどかしさうに、トリスタンは再び尋ねる。

「黒い帆が！」と答へるイソルドの聲が、幽かに顫へた時、トリスタンは、がつくりと頭を落して、其のまゝ最期の息を引いた。

戀人の危急を聞いて、船の進みももどかしとばかりに、氣を焦らせて來たイソルドは、トリスタンの返らぬ姿を見ると共に、心が潰れて、ばつたりと床に倒れたが、玉の緒はそのまま絶えてしまつた。

二人の遺骸は、コオンウォールへ運ばれて、別々に葬られたが、暫くすると、トリスタンの墓から一本の蔦が生えて、一夜のうちにイソルドの墓へ這ひ絡はつた。マーク王は臣下

に命じて、二回までは切らせなければ、三回目になつて、終に斷念して、這ひ絡はるにまかせて置いた。

希臘神話に於ける異類の一女性

— 魔女メデアの戀 —

(一)

金色の霧こんじきに包まれた希臘神話の戀物語の中で、毛色の變つた一つの戀物語がある。それはアルゴ―艦の勇士ヤソンを助けて、其の遠征の目的を遂げさせた、コルキスの王女メデアの物語である。

此のヤソンとメデアの傳説は、神話學者の間に、大擴布説話と呼ばれるものゝ一つで、我が邦の神話にも大國主おほくにぬし神と須勢理毘賣すせりひめの説話など、これと同じ形式のものが發見される。我が神話の須勢理毘賣が、大國主おほくにぬし神を助けて、其の父須佐能男すさのおとこ命の提出した色々な難題を、無事に通過させ、最後に生大刀いくた、生弓矢いくゆみや及び天あめ詔琴のりことの三つの寶を奪つて、共々に根ね堅洲國かたすくにを逃出して來るやうに、メデアも矢張、希臘の勇士ヤソンに力を借して、父のアイエ

テスが試みる様々の困難な仕事を仕遂げさせ、最後に此の一行の遠征の目的となつた金毛の羊皮をも獲させて、ヤソンと一しよにコルクスの國を出奔する。こんな風に東西幾千里を隔てながら、殆んど同じ根元から出たのではないかと疑はれる位に類似した説話が、諸民族の間に擴布されてゐる。これが大擴布説話と呼ばれる理由であるが、併し細かに其の説話を調べて見ると、互に類似したのは、單に外形だけで、それに盛つた内容なかにになると、民族の異なるに従つて、それづくに違つてゐる。右に擧げた二つの神話に於ても、一人の王女が、戀のために、異國の勇士を助けて、其の遠征の目的を遂げさせるといふ點までは、同一であるが、それ以外に於ては、須勢理毘賣は最早メデアではない。其處に盛られた感情も違へば、其の人物の性質も全く別なものである。其處に創作の個人性にも匹敵する、神話の民族性が認められる。

メデアは實際希臘神話の中でも、一種無類の女性であつた。碧眼金髮の晴れやかな希臘の女神らの間に在つて、メデアは漆のやうな髪と深淵のやうな瞳を有つた、暗い感じのする女性であつた。彼女は確かに希臘民族の間から生れた女性ではなかつた。其の傳説を見て

も、彼女は日神の子アイエテスを父とし、西海の果てに住む魔女キルケを叔母として、自分でも父や姉に劣らない程の魔術使ひであつた。シェークスピアの「マクスベ」中の有名な魔女のモデルになつたものは、羅馬の詩人オヴィヂウスが、其の名篇「メタモルフォーセス」の中に描いたメデアの面影であつたと言はれてゐる。彼女の容貌は、日のやうに輝いてゐたが、其の血管には、東方の女性に特有な、烈しい熱情と、怖しい執念しうねんの火が燃えてゐた。

アルゴ艦の一行は、イオルコスの入江を船出して、東の海に別け入つた後、其の時分の未熟な航海術で、凌ぎ得る限りの有らゆる海路の危険を冒して、辛うじてボスポロスの海峡へ入り、其の頃の世界に怖ろしい難場として知られてゐたシムブレガデス（打つかり島）の險難をも無事に越えて、昔から一人の希臘人も足を入れたことがないといはれるユウクシネ（黒海）の神祕の海へ潜ぎ入つたのは、彼等の一同が心の底で疑はなかつたやうに、全くヘラの女神の冥助であつた。併し其の名のやうな黒い水が、世界の北の果まで擴がつてゐるとか、到る所に暗礁や、洲があつて、黒い霧が水面を立籠めてゐるとか、氷のやうな風が、北に續いた常夜とこよの國から絶えず吹き寄せて來るとか、其の先は直に冥土めいどに續いて

あるとかいふやうな様々の怖ろしい傳説に包まれたユークシネの海を、目のあたりに眺めた時には、死を恐れない勇士らの胸も、波打たずにはあなかつた。

一行は其處から亞細亞の岸に沿うて、長い航海を續け、名も知らぬ蠻族の國を通り、女人の國として有名なアマゾン族の港も過ぎ、やがて世界の東の果だと言はれるコウカンスの山——世界の山々のうちで一番高い、そして東方のすべての河の父と呼ばれるコウカンスの山を雲の間に眺める所まで來た。神祕なコルキスの國は、此の山の裾に、眞黒な林に包まれて、靜かに眠つてゐるのであつた。船の進むにつれて、コウカンスの峰は、刻々に高まつて行つた。そして終にファシス河の黒い流れが、葛地に海に向つて突進む所まで來た。此の河を遡ると、其處にコルキスの都があつて、アイエテスの王宮の黄金の家根が、さら／＼と日に輝くのが見えた。

其の日アイエテスは、假睡の夢から覺めて、俄かにメデアを呼んで、夢の中の不思議を語つてゐた。燦爛と輝いた一つの星が、空を流れて、王女の膝へ落ちた。メデアは嬉しさうにそれを拾つて、河邊へ持つて行つて、流れる水の眞中へ投込んだ。すると渦を巻いて流

れて行く大河の水は、見る／＼其の星を運んで、ユウクシネの海へ押出して行つた——といふのが、王の見た夢であつた。王は斯う語つて、メデアの顔をつく／＼と眺めながら、色々と夢の意味を考へてゐた。

此の時である、數十人の勇士を載せた不思議の船が、徐々とファシス河の流れを遡つて來たのは！

王は此の報告を聞くや否や、王女と共に黄金の馬車を驅つて、河の岸へ下つて行つた。

王は葦の生え茂つた岸に沿うて、馬車を走らせて來ると、一群の勇士を載せた異様の船は、生きたやうな女神の像を船首に立て、白鳥のやうに河の中流を上つて來た。船の上には、勇士らの武器が、麗らかな朝日の光を受けて、白い河霧の中からさら／＼と輝いてゐた。

之を見たアイエテスの眼は異様に輝いて、側に立つたメデアの横顔をちらと眺めたが、其の時メデアの黒い瞳は、何物にか吸ひ寄せられたやうに、じつと船の上に注がれてゐた。其の瞬間に、アイエテスの目は、メデアの瞳の底に映つてゐる一人の勇士の姿を見落さな

かつた。それは五十人の勇士の中でも、際立つて雄々しく、際立つて美しく王女の眼に映つたヤソンの姿であつた。エロスの矢は、知らぬ間に、火のやうなメデアの胸に、優しい傷を與へてゐたのである。

コルキスの王とアルゴ艦の勇士らとの最初の會見で、王の提出した條件は、一行の中から一人の代表者を出して、自分の要求する仕事を仕了せたら、其の褒美として金毛の羊皮を渡さうといふことであつた。そして王は二つの難題を出した。第一は黄銅の蹄と黄銅の肺を有つて、口と鼻孔から焔の息を吐く、二頭の牡牛を馴らすこと、第二は其の牡牛に犁を着けて、アレスの野を犁き返して、其の畝の間へ龍の齒を蒔くことであつた。龍の齒から一つ一つに鎧武者が生えて、蒔いた者の方へ殺到して来るから、蒔いた者は手早く刈取つてしまはなくてはならない。二つながら人間業では、及びもつかない難題であつた。

そればかりではない、此の二つの難題を仕了せたとしても、目的の羊皮は、高い城壁と三重の黄銅の門で圍まれ、松の老木よりも太い毒龍に守護されて、アレスの森の山毛櫨の木に掛かつてゐる。其の鐵壁を破り、毒龍を退治した上でなければ、目的の羊皮に近づく

ことは出来なかつた。

かういふ幾つかの難事業を遂行せるには、どうしてもメデアの魔術の力を借りるより外はなかつた。そして又メデアの戀は、假令父に背いても、勇士らを助けずにはゐられなかつた。ヤソンはメデアの手から人知れず與へられた靈膏の奇特によつて、美事に二箇條の難題を仕了せた上、其の夜のうちに、メデアの案内で、アレスの森へ踏込んで、目的の羊皮を手に入れることが出来た。

其の時ヤソンはメデアの手を執つて言つた。

「此の悦びは、全くあなたのお蔭です。さア、あなたも我々と一しよに此の國を逃げて下さい！　そして私の妻になつて、イオルコスへ来て下さい！　私は同時に二つの寶を持歸つて故郷の人々を羨ましてやりたい。」

アルゴ艦の勇士らも、メデアの周圍へ集つて、口々に誓つた。

「あなたの身は、我々が屹度守護します。あなたは我々の女王です。」

これを聞いたメデアは、泣いて、身ふるひして、兩手で顔を掩つたが、それでも此の嬉

しい願ひを拒むだけの力はなかつた。

「わたしは家をも友達をも捨て、海を渡つて、知らぬ他郷へ行かなければならないのでせうか？ あゝ、これも運命です。耐へませう。どうぞ一しよに連れて行つて下さい！」
かうしてメデアは、ヤソンに引かれるまゝに、船へ乗つた。

(II)

アルゴ艦の勇士らは、其の嚴肅な誓ひの前に、メデアに對しては、頭があがらなかつた。彼女から受けた助力の恩義に對して、勇士らはどんな苦しみをも忍ばなくてはならなかつた。

實際此の一行の歸りの旅は、怖ろしい漂泊の旅であつた。其の漂泊の間に、一行の危難を救つたものも、彼女なれば、一行の運命を、暗黒の道へ投込んだものも、彼女であつた。

金毛の羊皮と王女メデアを載せて、コルキスの岸を離れたアルゴ艦は、暫くして船尾

の見張番からの警報に驚かされた。

「幾百艘の兵船が、海鬪のやうに、海を掩うて追つて来るぞ！」

かう聞いた一同は、撓も折れよと、力限りに漕いだけれども、敵船は刻々に追ひ迫つて、程なく船中の人々の顔さへ見分けられる位になつた。

此の時まで、甲板に立つて水夫等を勵ましてゐたメデアは、いよいよ危急の迫つたのを見ると、船の中までも、姉を慕つて、ついて來た、弟のアプシルトスの方へ、火のやうな瞳を注いだ。此の突嗟の場合に、彼女は夜叉のやうな心の底を現して、機敏な、併し怖ろしい一つの計略を思ひついた。彼女はいきなり弟のアプシルトスをつかまへて、海の中へ投込んで置いて、勇士らに向つて言つた。

「さア、父があの子の死骸を捜してゐる間に、早く逃げて下さい！」

ある傳説によると、メデアは、此の時、弟の手足をばらばらにちぎつて、波の上へ蒔き散らして、父が其の死骸を拾ひ集めるのに暇がかゝるやうにしたと言ひ傳へらる。

船中の勇士らは、これを見て、思はず身を震はせて、怖ろしさうに顔を見合せた。目的

のためには手段を選ばない此の暗黒な魔女の心が、名譽を重んずる勇士らの胸を顫はせたのであつた。けれどもその時はもう遅かつた。善かれ悪かれ、彼等は最早其の運命を此の魔女の手に任せるより外はなかつた。

斯うして一旦の危難を脱れた勇士らは、更に此の神聖な船の上に注がれた少年の血が、洗ひ淨められるまで、幾年かの暗黒な航海と死ぬやうな苦しみを重ねなければならなかつた。

勿論勇士らは、心の中で、此の黒い魔女の罪を呪つたが、一方では、これまでに受けた恩義を思ひ、又これから先の海路の案内も、彼女の魔力によらなければならぬことを知つてゐた。更にそれよりも此の魔女の呪咀のろみが、どれ程怖ろしいかと思ふと、流石の勇士らも、口へ出して、彼女を責める勇氣はなかつた。

此の時から、アルゴ艦の案内者は、ヘラの女神でも、船首かぶせに掲げたアテーネの神像でもなくて、黒い魔女のメデアであつた。勇士らは彼女の指揮に従つて、名も知らない海の上を、當あてもなく漕ぎ分けて行つた。幾度となく死ぬやうな苦しみを重ねた。或る時は九日の

間、船を曳いて、陸の上を歩いたこともあつた。又或る時は十二日間、果ても知れない西海の波の上を、泡に包まれたり、大波に揉まれたりして流されてゐたこともあつた。

アルゴ艦が、コルキスからの歸路に、さまよつた海路については、傳説は何一つはつきりしたことは語つてゐない。それらの臆ろげな傳説から推測して、或はファシス河を東北へ溯つて、紅海へ出で、それから南へ進み、また西に折れて、最後にリビヤの砂漠まで来て、船を曳いて、火のやうな砂の上を越え、それから丘を越えて、富裕なキレーネの國とロトファギー族の國の間に、淺瀬と流砂との幾哩となく續いてゐるサアチスの灣へ出たのであらうといひ、或は西北に進んで、イステル河(今のドナウ河)を遡り、船を曳いてアルプス山の雪路を越えて、アドリヤ海へ出たのであらうといひ、又或は、北へ進んで、アルプ海からタナイス河(今のドン河)へ入り、様々な蠻族の國を過ぎて、北極星の下で羊を牧つてゐる遊牧のヒバーボレ族の地を過ぎて、北の極なるクロニヤ海(今のバルト海)へ出て、其處で船を曳いて、氷の上を渡つて、大西洋へ出たのであらうなぞとも言ふが、何れも夢のやうな想像説に過ぎない。

兎に角一行は、あらゆる艱難辛苦を嘗め盡した擧句に、やう／＼のことで地中海へ出て再びなつかしい希臘の山々を眺めた時には、勇士らの姿は、長い年月と幾多の辛酸に、見る影もなくやつれ果てゝゐた。

かうして懐かしいイオルコスイオルコスの岸へ船を着けた彼等は、丁度龍宮から歸つた浦島のやうに、誰一人として、昔のアルゴ―艦の勇士らと見分けのつく者はなかつた。イオルコスの人々はもう幾年か以前に、此の一行の運命を見限つて、再び歸らないものと諦めてゐた。併しヤソンの父のアイソンも、叔父のペリヤスも、老衰して見る影もなくなつては居たが、まだ幸ひに死なずにゐたので、ヤソンは約束通り、金毛の羊皮をペリヤスに渡して、イオルコスの王位を要求すると共に、アルゴ―艦を獻物として、海神ポセイドンに感謝の意を示した。

(III)

メデアはヤソンを助けて、金毛の羊皮を取らせた後、アルゴ―艦の一行と千辛萬苦を共にして、やう／＼希臘へ歸つて來た。其の時老獪な叔父のペリヤスは、ヤソンに對する堅い約束をも忘れたやうな顔をして、快く王位を譲らうとはしなかつた。メデアの血管に漲つた火のやうな性質は、此の時にも其の正體を現さすにはゐなかつた。彼女は其の熱愛を傾けた夫の耻辱を憤る餘り、老王に對して、怖ろしい復讐を思ひ立つた。

メデアは先づ其の夫の心を慰めるために、ヤソンの父のアイソンを魔術の力で若返らせることを承諾した。其處で或る満月の夜に、萬物の音をひそめた眞夜中時を選んで、彼女は人知れず館を抜け出した。彼女は先づ空を仰いで、満天の星と月とに向つて呪文を唱へ、次に下界の女神ヘカテーと地の女神テロスに向つて呪文を唱へた。次にまた森の神、洞窟の神、山の神、谷の神、湖の神、河の神、風の神、霧の神に向つて、一々に祈を籠めた。かうして居る間に、星の光は次第に加はつて、翼のある龍に曳かれた一輛の車が、彼女の前へ降つて來た。彼女は其の車に飛乗ると、そのまゝ、空を走つて、何處ともなく運ばれて行つた。此の時から數へて九日九夜の間は、全く人間との交渉を斷つて、メデアは遠い國々

を駆け廻つて、様々な藥草を摘み集めた。そして十日目になつて、風のやうに歸つて來た彼女は、館の庭に二個の祭壇を築き、一頭の黒い羊を犠牲とし、牛乳と葡萄酒をそれに注いで、下界の女神ヘカテーと青春の女神ヘーベを祀つた。彼女はまた冥府の王プルトーと女王ベルセフォネに向つて、暫く老人の命を延ばすことを願つた。

是等の支度がすむと、彼女はアイソンを祭壇の前へ運ばせて、魔術の力で眠らせたまゝ、そつと藥草の上へ横へた。そして一切の人を遠ざけて、不淨な人間の目が、此の神祕に觸れるのを防いだ。彼女は髪を振り亂して、祭壇の周圍を三度廻りながら、火のついた小枝を血に浸して、祭壇の上へ置いた。それからかねて用意して置いた大鑊の中へ、さまざまの藥草、東の國から拾つて來た石、世界を取巻いてゐる大河の岸から持つて來た砂、月光の中で集めた霜、夜の闇に叫ぶ梟の頭、狼の臟腑、といつたやうなものを投込んだ上に、龜の甲羅をつぶした粉末、牡鹿の肝臓、人間の九代の間生きて居た鴉の頭と嘴、といつたやうな、すべて壽命の長いものを加へて、オレーフの枯枝でかきまわしながら、煮立たせて行つた。

やがて鑊の中からオレーフの枝を引き出して見ると、枯枝は、いつの間にか、緑色の葉と、若いオレーフの實で被はれてゐた。其の間に、鑊の中の汁は、もうぐらくと煮立つて時々吹きこぼれる飛沫のかゝつた處は、草の色がまるで目のさめるやうに青くなつた。

其の時メデアは、死んだやうに眠つてゐる老人の咽を切つて、身體中の血を残らず絞り出して、其の後へ鑊の中の煮汁を注ぎ込んだ。老人の身體が、其の汁を吸つたと思ふうちに、髪や鬚の色が見る／＼變つて、今迄眞白であつたのが、漆のやうに黒くなり、顔の色澤も急に若々しくなつた。血管には若い血が漲り、手足には力と活氣が満ちて來た。やがてアイソンが目を覺ました時には、自分の身體が、再び四十年前の血氣の時代に復つたのを見て、まだ夢を見てゐるのではないかと異しむ程であつた。

アイソンの若返つたのを見た時のヤソンの喜びはどんなであつたらう、併しそれにもまして、メデアの魔術の成功に好奇の目を輝かしたのは、ペリヤスの二人の娘であつた。二人はアイソンの若返つた姿を見ると、急に羨ましくなつて、自分達の父にも、同じ手術を施して貰ひたいといつて、メデアにせがみ出した。

メデアは快く承諾したやうな風をして、新しい鑊かまを用意させ、二人の娘に指圖さしづして、一頭の年寄つた羊を曳いて來させた。そして先づ其の羊を殺して、藥草と一しよに鑊の中へ投げ込んで、口の中で何か呪文を唱へてゐると、羊はもう若い小羊に變つて、鑊の中から跳び出して來た。

其の時メデアは娘らに向つて言つた。

「わたしは此の羊にした通りのことを、あなた方のお父さんにしてごらんなさい。お父さんを若返らせようと思ふなら、試しにやつてごらんなさい。」

かうは言つたが、メデアは故意と呪文を半分しか教へなかつたので、其の夜二人の娘が父のペリヤスを殺して、鑊の中へ投げ込んだ時には、美事に失敗して、ペリヤスは其のまま鑊の中で死んでしまつた。

其處で、イオルコスイオルコスの市では、死んだ王のために立派な葬儀が行はれ、其の紀念として型の如く種々の競枝が催された。けれどもペリヤスの葬儀が終ると、メデアは市民の非難と攻撃を受けて、最早イオルコスに足を留めることが出来なくなつた。メデアからいふと、

みんな最愛の夫を思ふ赤心せきしんから出たことであつたが、今となつては、其の赤心が仇となつた。彼女は夫のヤンソンと共に、イオルコスを去つて、再び放浪の旅路に上つた。

此の時になつて、流石まさかのヤンソンも、此の魔女の底の知れない殘忍な心が、ほとく怖ろしくなつた。そしてコリントの王宮へ暫く足をとめてゐるうちに、ヤンソンは其の國の王女クラサとの間に新しい戀が成立つて、密かに此の怖ろしい魔女の竊ひそを絶ち切らうと思つてゐた。抜目のないメデアは、夫の祕密を覺らすにはゐなかつた。そして夫と王女との間に結婚の相談が進んでゐるのを知るや否や、人知れず、婚禮の祝物だといつて、毒に浸した美しい肌衣はだかを、クラサに贈つた。其の贈物を受けた王女は、何の氣なしに其の肌衣を美しい肌に着けるや否や、恐ろしい毒は全身に沁み込んで、形容も出来ない程の苦しみをして、狂くるひ死じに死んでしまつた。それでもまだ慊あきららずに、嫉妬に心の狂つた魔女は、夫の目の前で、自分の生んだ二人の子を殺して、王宮へ火をかけるや否や、龍の車へ飛び乗つて、アツチガの方をさして逃げて行つた。

ヤンソンは其の後再び故郷へ立歸つて、日毎に海岸へ出ては、雨風に晒されて、砂の上で

朽ちて行くアルゴ―艦の下へ坐りながら、華やかな過去の思ひ出に耽つてゐたが、或る日船首に飾つて女神の像が、不意に落ちて、彼れの頭を碎いた。

(四)

コリントの王宮を逃れた後、メデアは暫く行方を昏ましてゐたが、其の次に現れた時には、アテーネの王宮で、其の妖術を揮つて、老王アイゲウスを惑はしてゐた。それは丁度あの勇士テセウスが、父を慕つて、遙にトロイゼンから尋ねて来た時であつた。彼れは其の頃様々の怪賊の棲所として知られたコリントの地峽を廻つて、到る所でそれらの怪賊を退治しながら、飄然としてアツチカの平原へ、其の偉大な體軀を現はした。

テセウスがアテーネの城門を入つて、アクロポリスを指して、眞直に進んで行くと、市民はもう此の勇士の功名を聞き傳へて、ぞろ／＼と後からついて行つた。

トロイゼンのテセウスが来たと聞いた時に、老王アイゲウスの胸はあやしく躍つた。ト

ロイゼンといふ名は、王に取つては懐かしい思ひ出の一つであつた。王がまだ若くつて諸方を遊歴してゐた時分、一年トロイゼンの王宮に客となつて、王女アイトラと淺からぬ契りを結んだ。アイゲウスが王女に別れて、本國へ歸る際であつた。二人はトロイゼンの背後の山上に祀つたポセイドンの祠堂に詣で、眼の下に廣がつた緑の入江を眺め、紫色に霞むアイギナの島を越えて、遙かにアツチカの岸を指さしながら、後々の事を語り合つた。此の時王女は戀人の胤を宿してゐた。アイゲウスは祠堂の側に茂つた一つの大木の根方へ、自分の佩びた劍と黄金の脊を埋め、其の上へ一個の平石を据ゑて、王女に向つて、斯う言つた。

「生れた兒が男であつたら、そして此の石を起せる位になつたら、此の二品を證據にわしの所へよこして下さい。」

それ以來王は功名に心を奪はれて、トロイゼンの事も、王女の事も、忘れるともなく忘れてゐた。それが今「トロイゼンのテセウス」と聞いて、不思議に胸に浮んだのであつた。王の側でじつと其の顔色を窺つてゐたメデアの蛇のやうな眼は、王の胸の底を讀まずに

はゐなかつた。やがてテセウスが王の面前に立つた時に、彼女の鋭敏な直覺力は、直に自分の強敵が現れたことを覺つた。二人の血管には、同じ血が流れてゐた。胸と胸とで鼓動を合せる血の前には、彼女の魔力も何等の力を持たないことを知つた。

メデアはそつと席を外して、自分の部屋へ立つて行つた。そして再び現れた時には、色色な寶石と東洋風の立派な織模様のある上衣に身を飾つた姿が、輝くばかりに美しかつた。彼女は右の手に黄金の盃を執り、左の手には黄金の酒瓶を持つて、しとやかにテセウスの前へ進んだ。そして其の前に跪いて、黄金の盃を獻げると、美しい、優しい、力のあつた聲で言つた。

「勇士よ、征服者よ、此の酒盃を受けて下さい。どんな疲労をも息め、どんな傷をも癒やし、脈管の中へ新しい生命を注ぎ込む此の靈酒をお酌みなさい。」

言ひながら黄金の液をなみ／＼と酒盃へ注いだ。

其の時酒の香りは、麝香薔薇の香りのやうに、廣間の中へ一面に擴がつて行つた。

テセウスは美しい眼をあげて、彼女の黒い、淵のやうな眼を見詰めた。其の眼は異様な輝

きを有つてゐたが、其の底はまるで蛇の眼のやうに乾いてゐた。彼れはいきなり立上つて言つた。

「酒は色が濃くて、香が高く、酌んで呉れる人は、女神のやうに美しい。けれどもまア一つ此の酒盃を乾してもらひたい。其の美しい唇を觸れたら、酒の味は一層よくなるだらう。」

これを聞くと、メデアはさつと顔色を變へて、吃りながら言つた。

「そればかりは御免下さい。わたくしは少し不加減で、お毒味が出来ないのでですから。」

テセウスは再び彼女の眼の底をじつと見つめながら叫んだ。

「酒盃を乾すか、それとも此の棒を食はさうか？」

言ひながら、テセウスは黄銅の棒を取りあげた。

其の時メデアは恐ろしい叫聲を立て、いきなり酒盃を床へ投げつけると、身を翻へして窓の側へ駈けて行つた。酒は大理石の敷石の上へ流れたと見る間に、石は其の恐ろしい毒のためによく／＼と泡立つて、ばろ／＼と崩れて行つた。

其の間にメデアは、龍の車を呼んで、ひらりと飛び乗るや否や、空を翔つて、海山を越えて、東の方へ逃げて行つた。そしてこれからは再び此の半島へ其の美しい姿を現はさなかつた。

肉の戀、靈の愛

—アスバシアとマリア・マグダレナ—

(一)

我が古代の貴族文明が白拍子の一階級を生んだのと同じの事情は、歐洲古代の文明社會に於ても、早くから職業的女性の一階級を生んだ。古代の希臘人の間に「ヘタイラ」と呼ばれたのは、斯ういふ階級的女性であつた。彼等は社交の興を幫けるために、殖民地などから本國の諸市へ入込んで來た女性で、其の大部分は歌舞音樂を以て、酒間の興を添へ、容色を以て男子の歡を買ふ妓女であつたが、併し第一流のものになると、音樂舞蹈の躰はいふまでもなく、當代に必要な學藝にも一通りは通じて、學者や政治家の間に立交はつて議論の出来る程の見識をも具へ、交際界の女王と仰がれた者も少くはなかつた。あの大政治家ペリクレスを掌上に翻弄して、一時アテーネの政治に潛勢力を揮つたアスバシアなど

は、中でも有名なものであつた。

アスパシアは小亞細亞のミレトスの相當な良家に生れて、早くから才色雙美の名を歌はれたが、長ずるに従つて、其の異常な虛榮心は、平凡な家庭の生活に満足させず、當時ミレトスで名を知られた「ヘタイラ」の全盛な生活に心を煽られて、進んで此の社會に身を投じた。アスパシアが故郷ミレトスから、海を渡つて、アッチカの都へ出たのは、アテーネ民主政治の黄金時代と歌はれた、ペリクレスの執政時代であつた。

此の時ペリクレスは其の妻との間に二人の男子まであつたが、アスパシアの輝くやうな美貌と、才氣とは、忽ち此の政治家の心を虜として、終には其の妻と別居させるやうになつた。

其の時からアスパシアは公然ペリクレスの邸宅に出入して、賓客の接待に當り、又其の邸は、アテーネ社交界の中心として、多くの哲學文藝の名士を引寄せた。大哲學者アナクサゴラスも、大彫刻家フィディアスも、哲人ソクラテスも、其の連中の一人であつたと傳へられる。

アスパシヤは一躍してアテーネ交際界の女王となつた。外國人との結婚を拒否するアテーネの國法に妨げられて、彼女は終生ペリクレスの正妻と認められることは出来なかつたが、彼女の一言一行は、ペリクレスの政治上の行動を支配する力を有つてゐた。アスパシアの助言が、裏面から此の政治家の經綸を左右した數々の場合のうちでも、彼女の故郷ミレトス市のために、アテーネの兵を動かして、サモス島を攻伐したことなどは、其の最も著名な一例であつた。

ペリクレスのアスパシアに對する是等の弱點は、程なく反對黨がペリクレスを攻撃する恰好の材料となつた。彼等は喜劇作者ヘルミポスを使喚して、盛んにペリクレスの内行を諷刺した喜劇を作らせて、市民の心を煽動したばかりか、終にはヘルミポスをして、神に對する冒瀆の罪を以てアスパシヤを告發させた。此の時ペリクレスは自ら法廷に立つて、アスパシアのために辯護し、情極まつて涙を流すに至つたと傳へられる。

かういふ階級にある女性の勢力が、希臘の盛時に於て、既に一代の政治家を支配し、其の運命にも影響を及ぼさうとするまでになつたことは、著しい事實であるが、これとは又

別な意味に於て、古代の傳説に特殊な地位を占めてゐる一人の女性がある。それは基督傳中に、異様な色彩を添へたマгдаラのマリヤである。此の女性の挿話が、中世以來如何に多くの宗教畫家の畫題に選ばれたか、そして更に近世になつて、二三の劇詩人が此の女性の生涯に興味を感じて、此の女性によつて、側面からクリストを描かうとしたか？ 彼女は確かにクリストを取巻いた多くの女性の中で、最も特色のある女性であつた。

彼女もまたアスバシヤと同じ階級の女性であつたと傳へられる。併し彼女は、クリストと同じやうに、嚴密にいふ正史上の人物ではない。と同時に、其の傳説もまた餘りに簡單で、又屢々他の同名の女性とも混同された。従つて彼女の生涯には、他の多くの傳説中の人物と同じく、詩人や畫家の空想を容れる豊富な餘地が残されてゐた。これらの點が古來の畫家や詩人が、好んで此の女性を畫題や詩材に選んだ理由であつたらう。私は爰で此の奇異な女性の傳記を語らうとは思はない。爰にはベルギーの詩人マアテルリンクの有名な戯曲の筋を辿つて、此の詩人の想像の裡に宿つた此の女性の戀を寫して見たい。

(二)

ユダヤの全土は今ナザレ人の噂によつて動搖して居る。彼れは影の如く此處に彼處に姿を現した。彼れの現れる所には、群集が先を争つて狂奔して行く。忽ちにしてユダヤの荒野の石といふ石が、悉く人に化したかと異まれる程に、彼れの周圍は多數の人を以て埋められる。盲者は眼ある者に助けられて走つた。蹇者は人に負はれてこれに赴いた。又多くの重病者は人に昇れて來た。彼れの周圍に集まる者は、多くは無宿者、乞食、癩病者、奴隸、勞働者の類であつた。群集は口々に「豫言者よ」「救世主よ」「ダヴィデの子よ」「ユダヤ人の王よ」と呼んだ。彼れは是等の群集に向つて天國の福音を説いた。彼れは又其の不思議な力によつて、多くの病者を癒やした。彼れの手の觸れるや否や、盲者は眼を開いた。蹇者は立つて走つた。癩病の瘻れも忽ちに清められた。人々は此の奇蹟を聞き傳へて、四方から集まつて來るのである。そして群集は耳に其の教へを聞き、眼に其の奇特を見て、感激

して狂ひ廻るのである。或る者は足踏して躍つた。或る者は石を取つて地に投げた。或る者は聲を擧げて叫んだ。彼れの現れる所には、到る所さういふ擾亂の有様が出現された。

此の一團の行動は、言ふまでもなく、其の頃のユダヤ教の學者達の心を脅かした。のみならず、當時のユダヤの治者であつたローマ人の注意をも引いた。ユダヤの太守ポンテウス・ピラテも、私かに其の不穩を恐れた。是等の人々の眼は、言ふまでもなく、此の一團の指導者たるナザレ人ナザレの上に注がれたのである。

此の戯曲の作者は、斯ういふ傳說的背景の前に、先づ二三の架空の人物を描き出した。それはローマの學者アンネウス・シラヌス、シラヌスの弟子で、ローマの駐屯軍の指揮官として、此の地へ來てゐるルキウス・ヴェルス、その他二三のローマ人である。

シラヌスは久しくイタリアのブレネスタに塾を開いて、子弟の教育に従つたが、年を取るにつれて、次第に人間の知識に疑ひを懐くやうになり、同時に、以前何かの機會で讀んだことのある、ユダヤ人の聖書の神祕的な色彩に心を惹かれるやうになつた。シラヌスがユダヤ研究のために、此の地に移住してから、六年あまりになる。彼れは荒涼たるユダヤの曠野の

中に、ローマ風の庭園を營み、土壇を造り、前廊には神々の大理石像を飾つた。そしてこの醜惡な、野卑な、狡猾な、不潔な、陰險な、野獸のやうなユダヤ人の間に、全く違つたローマの生活をして、又或る度までは其の周圍の人々にも同情して、ユダヤ古典の研究の中に、靜かに其の老年を樂んで居る。

併し年少氣銳のローマ武士なるヴェルスには、勿論シラヌスの現在の心境は解る筈はない。ヴェルスの眼中には、ユダヤ一帶の風光が、地も人も、たゞ穢きたせく、醜みにくく、荒れすさんだ、限りなく淋しいものに見えた。そして此の木もない、草もない、磊々たるユダヤの石原の中にシラヌスの庭園のあるのを不思議なものゝやうに考へた。けれども二人の話の中で、マダダラのマリアが、此の家の土壇から見渡される谷間の別荘に居ると聞いた時には、ヴェルスは驚きと喜びとに胸を躍らした。

ヴェルスは、マリアにアンチオケで始めて逢つて、早くも其の美と才とに魂を奪はれた。併しマリアは突然アンチオケから姿を消した。そしてヴェルスの心に癒やし難い戀の重傷いたでを残して、行方をくらましてしまつた。

マリヤはヴェルスに取つては何處までも謎の女であつた。彼女は單に媚を賣る種類の女性とは違つて居た。彼女には多く類の無い才氣と魅力とがあつた。男の心の底までも奪はねばやまないといふやうな所があつた。彼女は自分の國を嫌つて、ユダヤの男などは、振向いて見ようともしなかつたが、ローマ人には、決して靡かぬではなかつた。ヴェルスが彼女の手を執らうとした時にも、彼女は決して荒々しく振拂ひはしなかつた。彼女は竊と其の手を引いた。併し其の素振には充分の溫味が籠つて居た。たゞローマ人の心では、如何にしても解き難い何かの恐怖を、心の底に抱いて居るやうであつた。彼女の心は、新しい或る悲みに、深くも惱まされて居るやうに見えた。

彼女はよく眞珠と露を織り交せたかと思はれるやうな美しくい下着に身を包んで、青玉の飾をつけたツリアの紫絹の上着を纏つて居た。そして其のきらびやかな粧は、更に様々の寶石を以て重味をつけられた。彼女の髪も亦美しくいものであつた。解かば殆んど地に引いて、斑入りの瓶の面を、黄金のヴェールで包んだであらう。其の美しくしさは、シラスのやうな老人の眼にさへ、從來見た婦人の中の最も愛らしい者であつた。

彼女には、自分の國の風俗習慣が、此の上もなく卑しい、忌はしいものに見えた。特にも踰越節の近づくに連れて、イエルサレムの全都に漲る、物狂ほしい宗教的の空氣が、恐ろしかつた。彼女が此のベタニアの谷間に隠れた一つの理由は、此の忌はしい狂亂の狀態から逃れようといふことであつた。

此のベタニアの谷間は、曾て土木狂と言はれたヘロド大王が、大に土木を起して、ローマ其の物よりも莊麗な、ローマ風の宮殿を築いた所であつた。其の多くの宮殿の屋根、神殿の破風、圓柱等が、其處此處に木立の間に散らばつて、此の砂原の中央にローマ風の一廓を形造つて居る。マリヤの別荘も此の一廓の中に包まれて、此の土壇から見下される所にあつた。白色の幅廣の大理石の階段が、なぞへに半圓形の柱廊に連なつて、其の柱廊には、諸所に大理石の彫像が飾られてある——其の優美な大理石造の別荘の中に、彼女は女王の如く多くの奴隸に侍かれて、ローマ風の華美な生活を送つて居た。

詐りの多い、劣等な、貪婪な、性惡な自國の人民に對する憎惡の念は、彼女をしてユダヤに於ける一切の物を咀はしめた。彼女は自國の聖典をさへも厭はしく感じた。其の反動

として、彼女は一切のローマの文明に對して渴仰の眼をあげた。彼女は只管にローマ風の生活を慕つた。其の別荘には、アンチオケの總督の邸にも見ないやうな、ローマ最新の流行が集められて居た。

併し又此の華美な生活の中に包まれた彼女の心の底には、人に知られぬ奥深い煩悶が秘められて居た。彼女はアンチオケやイエルサレムに居る間も、時々自分の生活に思ひをやつた。其の刹那に、彼女の心の中にはいつも言ひ知れぬ悩みを感じた。それは彼女に取つては恐ろしいものであつた。彼女はいつも眼を閉いで、そつと其の悩みを抑へて居た。とうとう抑へても抑へきれぬ程になつて、彼女は逐はれるやうに此の谷間へ遁れて來た。

物靜かな別荘の中で、此の六ヶ月の間、彼女は靜かに過去の生活を心の中に繰返して見た。彼女の半生の歴史が、繪巻物のやうに彼女の眼の前に現れた時に、彼女は初めて眞實の自己を見るやうな心持がした。過去の生活は悉く虚偽いつはりであつた。自分は虚偽の中に生活し、虚偽の中に戀して來た。虚偽の生活は、他人には多くの利益を與へたであらうが、自己に取つては何物をも持來さなかつた。此の六ヶ月の間に味つた生活こそ眞の生活であつた。

眞の生活によつて、彼女は初めて何物をか得たやうに感じた。

「自分は愚おろかだつた。今こそ眼が覺めた。私はもつと上手に、もつと高價に、自分を賣らなくてはならなかつたのだ。」——彼女はこんなことも考へた。

ベタニアなるシラヌスの邸宅には、ヴェルスを始め、二三の舊友が集つて、土壇へ席を設けて、話してゐる。其處へマリアも來て、話が愈々賑やかになつた。マリアは昨夜ゆうべ盜難にあつて、多額の寶石を失つたことを話す。そればかりか、大事にかけて育て、居たパピロニアの孔雀も盜まれ、池の魚類までも荒された。どうもそれが、此の頃此の邊をうろついで居る、あのナザレ人の仲間の仕業ではないかと思はれる、といふのが端緒いとぐちになつて、話は其のナザレ人の上に移つて行つた。

「何でもあの仲間の首領といふのは、不潔な無宿者やぶせしの一人で、何かお粗末な魔術で人々を惑はして、新しい教へを傳へるのだと言觸らしては、盗みをして生活をして居るのだといふ噂なのです」とマリアが言つた。そしてつひ二三日前も、自分が庭を散歩して居る所へ、

其の仲間が十二三人通りかゝつて、外から様々な悪口を言ひながら、石まで投げて行つたといふことを附加へた。

「それは何かの誤解に違ひない。」とシラヌスは彼女の話を打消した。そして自分が現に目撃した所を語り出した。自分の見た時には、首領は塵埃と襪襪に纏はれた群集の中に立つて話して居た。其の群衆の中には、醜い蹇者や病人が澤山に居た。群衆は何れも貧しい穢らしい人々ではあつたが、決して悪いことをするやうな者ではない。せいゝ一杯の水か、麥の穂の一つ位しか盗めない人達らしかつた。斯ういつたシラヌスは、更に考へ深い眼つきをして、附加へて言つた。「併し其のガリラア人とか、ナザレ人とかいふ男には、實際不思議な所がある。其の聲には人の心に沁み入るやうな、一種の調子があつた。」

これを聞いた客人は、今此處へ来る途中で、ナザレ人が眼をあけたといふ盲人を見て來たことを話した。其の尾について、シラヌスも亦た、此の隣家に住むシモンといふ男が、癩病から癒やされた話をする。

然ういふ話の間に、何處からともなく多數の人の叫聲や足音が聞えて來た。其の響きが次第に近くなつて、群集の足音、子供の泣聲、犬の吠える聲等に混つて、人の叫ぶ聲が明瞭に分けられるやうになる。突如として多數の人が、土壇から見下される道を、押合つて、狂氣のやうに走つて來る。「此方だ！ 此方だ！……早く！ 早く！……彼處だ！ シモンの果樹園だ！ 病人を早く！……盲人を連れて行け！……」といふやうな叫聲が、きれゝに聞える。

「彼等はナザレ人を見つけたのです。」とシラヌスが説明する。

「ナザレ人？」とマリヤが言つた。「何處に居りますか？」

「多分今シモンの家から出たのでせう。彼等は彼れの一舉一動を注意して居ます。彼れが見えさへすれば、直に病人を連れて行くのです。そして狂信的が群がつて來る。彼れは隣家の果樹園を歩いて居るに違ひない。然うだ、群衆が蜂のやうに呻るのが聞えるでせう。あのローレルの生垣の直ぐ向ふです。」

シラヌスの庭を圍む生垣の背後から、多數の叫聲が聞えて來た。「ホザンナ！ ホザンナ！……人の子よ！……主よ、主よ、憐め！ 主よ、ダヴィデの子よ、病者を癒やしたま

へ！……主よ！ 主よ！……ナザレのイエスよ、我を憐め！……」といふやうな聲が互に入混つて聞える。忽ち「靜かに、靜かに！……説教が初まるぞ！」と言ふ聲がする。と思ふ中に、今迄の騒ぎがバツタリと歇む。何とも形容の出来ぬ程の静けさが、其のあたりを包む。鳥も、木の葉も、空氣さへも、氣息を凝らしてゐるかと思はれる程の静けさである。其の中から突如として力の籠つた音聲が聞えて来る。其の聲は軟かではあるが、熱と光と愛とに充ちた、權威のある聲である。直ちに人の肺腑に迫つて、其の魂の底まで滲込むやうな力のある聲である。

「心の貧しきものは幸福である、天國は其の人の有であらう！……哀むものは幸福である、其の人は慰安を得るであらう！……柔和いものは幸福である、其の人は地を嗣ぐであらう！……餓ゑ渴くが如くに義を慕ふものは幸福である、其の人は充たされるであらう！……慈悲の心あるものは幸福である、其の人は慈悲を得るであらう！……」

聲は靜かな空氣を震はして、此の土壇の上までも響いて來た。シラヌスは默然として傾聽した。他のローマ人には、言葉の意味は解らなかつたが、たゞ此の場の光景に、何とい

ふこともなく胸を動かされた。併し最初から其の聲に打たれたやうになつて、無言で聞き入つて居たマリアは、やがて夢のやうに立上つた。そして引寄せられるやうに、階段の方へ進んで、庭へ下りかけた。

シラヌスは小聲で引留めようとした。

「行かない方がいゝ！」

其の時下の聲は再び續いた。

「心の清きものは幸福である、其の人は神を見るであらう！」

「いゝえ、まゐります！」とマリアは決然として言つた。

ヴェルスが後から續かうとするうちに、マリアはもう生垣の方へ下りて行つた。そして庭の木戸を開けて、隣家の果樹園の中へ姿を消してしまふ。

暫くすると、生垣の向ふの群衆の間から、何事か起つたやうな叫聲が聞え出した。其の中から切々に、「ローマ人の女！……姦婦！……耻辱！……マダダレン！……娼婦！……」といふやうな言葉が聞える。かと思ふ中に、群衆は沸へ返るやうになつて、口々に絶叫する

悪口のために、一つ／＼の聲は聞分けられぬ程になる。其のツヤ／＼いふ騒ぎの中から「耻辱！ 耻辱！……石打て！……石打て！……殺せ！……石打て！……」といふ聲が、辛うじて反響を打つて浮上つて来る。それと同時に、人の逃げる音、追ひかける足音、棒や小石の物に當る響、木の枝を折る音などが、一緒になつて聞えて来る。

「何事が起つたのです？」ヴェルスはシラヌスを見て言つた。「追はれてゐるのは彼女か？」
「見つかつたんだ！ だから言はぬことではない、氣を注げなくてはいかんと言つたのだ。」
シラヌスの言葉の終らぬ中に、ヴェルスはもう庭の方へ驅け下りて行つた。他の二人も後から續いて行く。

其の時ローレルの生垣を破つた群衆は、諸方から庭の中へ突進して、聲を放ち、手を振つて、マリアの周圍へ迫つて来た。マリアは夢中になつて土壇の方へ逃げようとして居た。

ヴェルス等三人は、劍を抜きつれて、霧地に群衆の方へ進んで行つた。石が飛ぶ。最先に立つたヴェルスは、劍を揮つて群衆の中へ突進しようとした。群衆は枝を折り、彫像を打倒した。既に戦闘が初まらうとした刹那に、オレーフの樹下から、突如として此の世のもので

ないやうな、權威のある聲が、響いて来た。群衆は忽ち感覺を失つたやうに立ちすくんでしまつた。口から口に命令が傳はつた。「静かに！ 静かに！……聞け！ 聞け！……彼れが言ふ！……彼れが言ふ！」

其の時此の俄かの沈黙の中から、平和な、莊嚴な、深い、力のある聲が響いて来た。

「汝らの中の罪なきもの、先づ彼女に石を投げよ！」

静まり返つた群衆の間から、地に落つる石の音が聞えた。群衆は彼方此方に動き出した。そして首を垂れて、無言のまゝで、こそ／＼と生垣の外へ消えて行つた。

ヴェルスが駈寄つた時には、マリアは、歩道の真中へ、石像のやうに立つてゐた。そして次の瞬間には、助けを與へようとしたヴェルスの手を振拂つて、まるで感覺を失つた人のやうに、三人のローマ人には側目も觸らずに、真直に自分の前を凝視めながら、こそ／＼と土壇の方へ歩き出した。

(III)

ナザレ人を見た刹那から、マリアの心には革命が起つた。彼女は此の三日間、別荘の中に閉籠つて、自分の心を視詰めて居た。

從來多くの人々から許された美の誇りも、一朝にして微塵になつた。眞の幸福の前に、美は殆んど何の力もなかつた。今迄無上の誇りと感じて居た美の勝利は、たゞ淺ましい耻辱と心に喰入る深い悔恨とを残すに過ぎなかつた。

彼れを見た刹那に、彼女の心は、ぱつと新しい光に射られたやうな感がした。其の時から彼女は殆んど狂人のやうな有様であつた。物を考へる力も無く、物を見る力もなく、物を聞く力もなく、昏々として、日夜に恐ろしい夢路を辿つて居た。今もまだ本當に覺めさつては居ない。折々は、まだあのシモンの果樹園に集つた群衆の中で、身を跪いて居るやうな心持がする。あの時自分を救つたのは、彼れの一語であつた。其の時たゞ一瞥。オ

レーフの樹下に、其の人の姿を仰いだのであつたが、其の刹那に、彼女の中には、今迄に覺えぬ喜びが光のやうに湧き上つた。彼れはたゞ一瞬間彼女に眼を注いだ。併し其の眼の中には、確かに彼女を承認したしるしがあつた。彼女は眞實に、永久に、自分が選ばれたやうに感じた。

彼女はどうしてももう一度彼れに逢はねばならぬやうな心持がして居た。併し其の日から、彼れの行方は、かいくれ分らなかつた。人を出して捜させても見た。様々な人に聞いても見たが、誰も知つた者は無かつた。マリアの心は此の三日の間、徒らに彼れの後を追つて居た。

彼女の心には、他の一方に於てヴェルスがあつた。あの日シラヌスの家で、マリアは再びヴェルスの熱心な言葉を情なく拒絶して、傷を負つた猛獸のやうに、自分の家へ逃げ込んで來た。併し此の三日の間彼女の心を襲つた耻辱と悔恨とたよりなさとは、一切の虚榮心と外見とを打ち破つて、其の奥底から眞實の感情を流れ出させた。其の時ヴェルスの熱心な言葉は、一つ／＼彼女の心の底から浮上つて來た。

彼女はアンチオケに居た時にも、ヴェルスから遠ざからう遠ざからうとして居た。他の人達には、故意と自分の方から近づいて行つたにも拘はらず、ひとりあの姿にも、心意氣にも、點の打ちどころの無いヴェルスには、故ら冷淡な風を見せ、心にもかけないやうな風を粧つて、丁度憶病な、疑深い獸類が、巢の中へ隠れるやうに、其の姿が見えると、逃げ隠れた。自分にもそれが何故か分らなかつた。つひ此の間シラヌスの家でも、いつもの癖が出て、心にも無い強いことを口に出して、又しても此の巢の中へ逃込んで來た。今迄は自分で自分の心持が分らなかつた。その今迄知らずに居た自分の本當の感情が、今心の破れた刹那に、初めて分つた。今迄は自分の感情を偽つて居たのだ。自分の本心は、もう疾うに降服して居たのを、然うで無いやうに粧つて居たのである。其の偽りから出た、心にも無い恐ろしい言葉が、遂にヴェルスを失つたかと考へた時に、彼女は凡ての世界から見棄てられたやうな心持がした。

此の三日の間、マリアは一方でナザレ人を戀ひ慕ひながら、同時に其の心の一隅では、ヴェルスの來るのを、絶えず待設けて居た。

其の三日目になつて、待設けたヴェルスの姿が、此の別荘に現れた時、彼女は日頃の誇りも虚榮も棄て、彼れの腕の中に身を投出した。

「ヴェルスさん！」とマリアは叫んだ。「とうとう、私は負けた。もう疾うに、自分でも知らなかつたが、負けて居たのです。」

「マグダラ！」とヴェルスが言つた。「私は貴方を自分で言ふやうな女だとは思つて居なかつたが、……併し今日の前に其の幸福が近づいて來るといふことは、殆んど信じられない。私は目が眩んでゐる。疑つてゐる。闇の中を摸つて居る。私はあんなに幾度か、あんなに手強く、跳ねつけた其の聲を信じられない。」

「それは同じ聲ではない。」とマリアが答へた。「同じ靈魂ではない。わたしは無益に自分の心を探して居た。そして此の苦しい日が來るまで、全く自分の感情を知らずに居た。わたしは今迄自分といふものを知らずに居た。そして幸福がこんな思ひも寄らない物だといふことを知らなかつた。……わたしは一番不幸な、難澁な時には、涙も零さなかつたが、今日幸福が見えて居るといふ時になつて、不思議に涙がとまらない。わたしは嬉しくつて嬉し

くつてたまらないのだが、それで居て、空中に徘徊つてゐるあらゆる災難が、一時に此の頭の上で破裂でもしきうな氣がして、恐ろしくてたまらない。」と言つて烈しくヴェルスに縋りついた。「助けて、助けて、ヴェルスさん、私を助けて下さい。貴方には恐ろしいものがない、何も恐れるものがないのだから……もう貴方より外にたよりになるものはないのだから……貴方に棄てられたらもうそれぎりです。私を救ふのは貴方だけです。」

ヴェルスは其の久しく憧れた戀の成功を、殆んど夢心地に味つて居た。彼れはあの翌日太守からイェリコ附近の叛亂を鎮壓せよとの命令を受けて、一隊を率ゐてイェルサレムを發した。其の前にベタニアへ來て、マリアに其の事を告げようとしたが、門番の奴隸が拒んで入れなかつた。そしてイェリコから歸ると、太守から更に他の命令を受けた。それは今宵を去らすかのナザレ人の一團を逮捕せよといふ命令であつた。

「併し此の命令の本はよく分つて居る。自分はユダヤの祭司らの惡意の道具になり、此の騒々しい、不信の國民の手先になつて、名譽ある軍隊を汚すのを好まない。まして自分が護民官の職にあつて、あの多數の病人や無宿者の望に反してまで、兵力を用ふるに忍びない。それにもう此のやうな無意味な生活には倦き／＼した。何とか口實を設けて、此の無法な役目を通れ度いと思つて居る。」とヴェルスは言つた。「一刻も早く、此の忌はしい土地を離れて、新しく咲き出した二人の戀を楽しみたい。此の永い間待つて居た歡喜が、かういふ死と狂氣の臭氣の漲つた不吉な岩の中に生れてはならない。」とも言つた。

マリアは此の話を聞いて、少からず驚いた。

「そんなことはない。貴方が彼の人の敵の道具になるなんてことはない。貴方はわたしの生命を彼の人から得てゐる。そして二人の幸福も彼の人から得てゐるのです。」

「だから、そんな事は起らないで済むだらう。だが、その事はもうよさう。」

「でも、あの人には罪は無い」とマリアはなほも熱心に主張した。「それは一目見れば誰にでも分る。あの方は今迄に知らない幸福を授けて呉れる。そしてあの方のまわりに居る人は、丁度眼の覺めた小兒のやうに幸福です。」

「あなたはあの後彼れを見たのか？」とヴェルスは氣遣はしきうに尋ねた。「私の聞く所では、彼れは何でもやりかねない權謀家だと言ふのだ。だが私は彼れにそんなことが出來よ

うとは思はない。」

「あの人が何をするでせう。」とマリアは言つた。「わたしはあの後逢はなかつた。又此の後二度と逢ふことは無いでせう。私達は今凡ての物を棄て、二人ぎりになるのだから。」

「マダダレン」といつて、ヴェルスは更に強くマリアを抱きしめた。「二人ぎりで、もつと幸福な國へ行かう。凡ての物が幸福の刺戟になつて、戀人の上に微笑^{はくま}み、美を祝福するやうな國へ。」

マリアはヴェルスの胸へ顔を埋めてわつと泣き出した。此の折しもあわたししく入つて來たのは、シラヌスと其の友人のアビウスであつた。二人はいつになく興奮して、今日擊して來た不思議な出來事を語り出した。

其の話によると、ナザレ人は、今朝再び此の町に現れて、シモンの家へ入つた。シモンの家では、丁度シモンの義弟のラザルスが死んで、野邊の送りをすませたばかりの所で、一家がまだ新しい悲嘆に沈んで居た。すると此の朝になつて、突然「ナザレ人が來て、今ラザルスを蘇^{よみがへ}生らせに行く」といふ風説が傳はつた。シラヌスは丁度アビウスと一緒に話

して居た所であつたが、アビウスが行かうと言ふので、群衆の後について、山蔭の岩を掘つて造つたラザルスの墓まで行つて見た。二人は墓の背後へ廻つて、一叢の藪を小楯に石の上に立つてゐた。其の時ナザレ人は、ラザルスの二人の姉妹に案内されて、此の墓の前まで來ると、立留まつて目をしばだゝいた。群衆は遙かに離れて、半圓形を作つて、墓を取巻いて居る。ナザレ人が「石を退けよ」と言ふと、二人の男が出て、蓋になつた大石を跳ね退けた。ラザルスは死んでからも四日になる。ラザルスの死骸は、經帷子を着て、薄暗い墓穴の底に横はつて居た。顔は白布で被はれて居た。群衆は半圓形を作つたまゝ、首だけを前へ伸ばして、熱心に墓の方を見詰めて居る。ナザレ人はひとり墓の前に立つた。やがて手を舉げて、二言三言小聲で呟いた。そして死骸に向つて、力ある聲で言つた。

「ラザルスよ、出ておいで！」

衆人の視線は、悉く死骸の上を集まつた。暫くは群衆の上衣を吹く風の音を聞くばかりであつた。突如として驚くべき光景が現れた。死人は、命令通りに、そろ／＼と上半身を起した。そして足を縛つた白布を解いて、石像のやうに立上つた。そして殆んど動くか動

かないか分らぬ程の足取で、墓から歩き出して來た。群衆は其の方へ眼をつけたまゝで、だん／＼と後へ退つた。ナザレ人は姉妹の方を見て言つた。

「あれを解いて、歩けるやうにしておやり。」

二人の姉妹は、群を離れて死人の方へ進んだ。ナザレ人は、何も言はずに、シモンの家の方へ行つてしまふ。姉妹は、無言のまゝで、白布を取除け、經帷子を解き離して、死人を支へながら、家の方へ連れて行つた。取残された群衆は、たゞ其の後を見送るばかりで、一語を發する者もなかつた。數分の後、群衆は初めて我に復つた。そして一齊に歡喜の聲を擧げた。全市が此の奇蹟の噂で狂氣のやうに動搖してゐるといふのである。

此の物語の間、ヴェルスは始終冷笑を浮べて、反抗的の態度を示してゐたが、マリアは眼を輝かして聞いてゐた。そのうちに、マリアは何か聞きつけて、つと立上つた。遠くから群衆の泣く聲が、わや／＼と聞えて來る。アビウスは玄關口まで行つて外を眺めた。群衆は、埃を蹴立て、此の別莊を指して進んで來る。白い衣服を着た一人が、先頭に立つて、もう庭へ入つて來た。門番は居ても、止めようともしない。群衆は、其の一人の後について、

もう並木を過ぎて、玄關の近くまで進んで來た。白衣の人はラザルスであつた。

ラザルスはもう玄關の前まで來た。奴隸らは柱の前へ集まつて、路を塞いだ。併しラザルスは、右にも左にも、目を向けずに、眞直に進んで來る。奴隸らの居るのも知らないやうに、すん／＼と進んで來る。彼れが近づくと、奴隸らは次第に後へ下つて、路をあけた。ラザルスは、玄關を通つて、前庭の背まで入つて來て、三段程の階段になつた戸口で立止つた。ヴェルスは進み出て、刀の欄に手をかけて、誰何したが、ラザルスはそれには答へずに、まだ本當に人間の調子に歸らないやうな聲、でマリアに向つて言つた。

「おいで！ 主が呼んでゐる。」

マリアは寄り掛かつて居た柱から身を離して、夢の中を歩く人のやうに、力なく、ふらふらとラザルスの方へ歩き出した。ヴェルスは其の前に立塞がつて、やるまいとしたが、マリアは、ヴェルスの腕の中で、身を悶いて、行かうとする。

「どうしようと言ふの？」とヴェルスはマリアを抱き留めながら言つた。「ではお前は何か？ お前があんなに氣を揉んで待つて居たのは、私かと思つたら、然うではなかつたのだね？」

然うでなくて、ユダヤ中で一番美しくい、一番富んだ、氣位の高い此の婦人^{をんな}が、生れてたゞ一度見たぎりの人から送られた、此の奇怪な、忌はしい使の、たゞ一語に、たゞ一度の相圖に、屈從するといふことは信じられない！……もう分つた。知つて居る。行け、お前は彼れを愛して居るのだ！」

「否^{いゝえ}！」とマリアは打消した。「わたしは貴方を愛して居る、けれども彼れは……」

「けれども彼れは？」

マリアはヴェルスの足元へ泣伏しながら絶叫した「それは別なことです！」

「宜しい、お立ち」とヴェルスは嚴然と言放つた。「私はもう無理に止めない。だが私にはお前が斯うなつたといふことが、どうしても信じられない……私はお前のユダヤ風の艷にかゝつたのだ。マグダレン、私はお前に怨みは持たない。私の愛は一時で消えてはしまはない。私の愛は婦女^{をんな}のやうに短くはない。私はいつまでもお前の上に氣を配つて居る。私は今初めて、彼れを滅ぼさねば、彼れが滅ぼさうとするお前を救へないといふことを知つた。彼れは其の生命が私の力で支へられて居るといふことを思はない。今迄は哀憐^{あはれみ}と無關心と

から、彼れの頭の上に群がつて居る迫害を、私が引留めて居たのだが、斯うやつて向ふから私の幸福を邪魔して來るからには、私はもうそれ等の迫害の上に、馬鹿にされた愛の凡ての目方を加へなくてはならない……ではその墓から來た案内者と一緒にお出で……我々は近い中にまた逢へるだらう。」

此の言葉を聞いて、ラザルスは徐かに玄關から出かけて行く。マリアは口も開かず、身動きもせず、眼も動かさずに、ラザルスの後について、深い、靜かな群衆の沈黙の中に消えて行つた。

シラヌスとアピウスは只茫然と其の後を見送つてゐた。

(四)

イエルサレムなるアリマテアのヨセフの家には多數の人が集まつて居た。その人々の多くは廢疾、無宿、乞食の輩であつた。四月六日の夜は次第に更けて行く。彼等は此の廣間

を照すランプの光を見上げては、何れも不安な息を吐いて居る。

イエスが、ゲッセマネで捕縛された、といふ警報は、もう爰まで傳はつた。彼等は自分達の身の上がどうなることかと心配し出した。彼等は部室の隅の方へ固まつて、何かこそと囁き合つて居る。

イエスは、曩の日イエルサレムに入つて、凱旋將軍のやうに、衆人の歡呼に迎へられ、日々イエルサレムの殿堂に坐して、神の國の福音を傳へ、八方から集る多くの病者を癒やした。彼れは始めから祭司等の迫害を豫期して居た。愈々其の最後の日の近づいたことを覺つて、彼れは今宵、アリマテアのヨセフの家で、十二人の弟子と最後の晚餐を濟ませて、其の家を出た。そして幾くもなく捕縛の警報が傳へられたのである。

此の不安の空氣の中へ、ラザルスの妹のマルタが、足音をも立てないやうにして、こつそりと外から入つて来る。人々は其の周圍へ集つて行つて、口々に外の様子を尋ねるのであつた。

マルタの話によると、イエスは今アンナの屋敷から出て、祭司の長カヤバの屋敷へ連れられて行つた。彼女は只一目、彼れが群衆に圍まれて、玄關口の柱の間を通つて行くのを見ただけであつたが、彼れの手は縛られて居た。そしてローマの兵隊が早く歩めと言つて彼れを打つて居た。十二人の弟子の中で、ペテロは、彼れの後を追つて、祭司の長の屋敷で火の側に坐つて居た。ヨハネは、アンナの屋敷に居たと聞いたが、其の外者はみんな狼狽して逃げ隠れた。トマスとユダはガリラヤへ逃げた。マグダラのマリアは、殆んど狂亂の體で、アンナの屋敷で、泣き叫んでは、衣服を裂いたり、石の塀へ頭を打ちつけたりして居たが、奴隸に逐立てられて、何處へか行つてしまつた。其の後ローマ人の町をうろついて居たといふ噂も聞いたといふ。兎に角、彼れの側に居た者は、殘らず捕縛して、法律に従つて、石で撃ち殺すと言つて居るから、ガリラヤから來た者は助からないであらうといふ。

マルタの話は、爰に集まつた人々に、少からの恐怖を與へた。

其の時戶外に數人の足音が聞え出した。武器の音がする。人々はローマの兵士が捕縛に來たのではないかと、言合したやうに顔色を變へる。併し其の足音は、程なく此の家の前を通り過ぎて行つてしまふ。又反對の方から足音が近づいて、今度は戸口にとまる。そし

てコトコトと扉を叩いた。

入つて来たのはマグダラのマリア、アリマテアのヨセフなどであつた。

マリアはやゝ取亂した風で、髪は亂れ、上衣は裂け、眼の中は血走つて居る。

彼女は今迄護民官のヴェルスを尋ねて、ローマ街を廻つて居たが、とう／＼ヴェルスに逢へなかつた、併し其の友人のアピウスに行逢つて、よく／＼頼んで置いたから、ヴェルスに逢ひさへすれば、此處へよこして呉れるだらう。ヴェルスに逢へば、屹度彼れを救ふことが出来る。萬一ヴェルスが力を貸さなかつた時には、もう最後の手段に訴へるより外はない。彼れは今夜の二時前に、ピラテの所へ送られるので、是非此の家の前を通る筈になつて居る。其の時ならどうにでもなる。ヤメスとシモンとは、上衣の下へ刀を隠して居る。それでも人数は一人でも多い方がいゝ。ペテロは何處に居る、ヨハネは何處だ、とマリアはひとりで氣を揉んで居る。

ヨセフはマリアを和めて、「然うお前の考へるやうに、手輕には行かぬ。曩の日彼れの入城を歓迎した同じ人民は、今日は悉く彼れの敵になつた。彼等はカヤバの庭へ集つて、彼

れを石で撃つ用意をして居る。彼れは疾うに覺悟を決めて居る。そして隠さず凡てを告白した。彼れは神の子だといつた。ユダヤ人の王だといつた。勿論それは我々に取つては偽りではないが、今日それを宣言するといふことは得策ではなかつた。ローマ人と祭司の目から見ると、國の法律で罰すべき罪になるのだから。併し彼れは進んでそれを告白した。彼れは寧ろ死を願つて居るやうだ」と言ふ。

「併しそれは彼れが我々の信仰、我々の力、我々の愛を試るのではないか？ それは彼れが口先ばかりで彼れを愛するといふ人々の卑怯な心を知つて居るからだ！ 何といふ臍甲妻ない人達であらう。彼れに病を癒やされた人々は何處に居る。そして何をして居る。パルチメウスは其の眼が誰れのために開いたか忘れたのか。癩病のシモンは、彼れの來る前には、死人よりも忌はしい有様であつたのを忘れてしまつたのか。中風や寒者ひよきであつた人は、癒なほして呉れた人を見棄てよとて、其の足を與へられたのか。死から甦よみがらされた人さへも、恐れて色を失つて居るではないか。」

とマリアは、興奮しきつて、片端から一座の人々を罵倒してゐる所へ、コト／＼と外から

扉を叩いて、やがて入つて來たのは、ヴェルスであつた。

ヴェルスは他の人々を此の部屋から遠ざけて、徐かに部屋の中へ入つて來た。マリアはヴェルスを迎へて、イエスの事で、「善良な、寛大な」心を有つた彼の力を借りようと思つて、先刻から待ち焦れて居たことを話す。併しヴェルスの態度は極めて冷やかであつた。

「私は決してお前を見棄てはしない。」とヴェルスは語り出した。「萬事はお前の心一つだ。私はお前のいふやうに、善良で且つ寛大な心は持つて居るが、それは自分の流義に適つた方法で、善良でもあり、寛大でもあるのだ。我々はお互によく雙方の立場を了解して居なくてはならぬ。さて私は前にお前と約束したやうに、彼れを逮捕させた。併し今はもう逮捕とか、虐待とかいふ問題は通り越して、殺すか活かすかの問題になつて居る。私は太守のポンテウス・ピラテに逢つた。ピラテは本來優柔不斷な人で、萬事に事勿れ主義を取つて居る人だから、今度の事件に就いても、非常に頭を悩まして居る。彼れは祭司と其の一派の叛亂を選ぶか、面倒な、そして實際危険な煽動者を犠牲にするか、二つに一つを選ばねばならぬ場合に臨んで居る。勿論彼れの行動は、ローマの法律の眼から見ると、犯罪にな

る程のものではないが、若しそれを赦したら、國內の紛亂を來すに相違ない。彼れは無論、平和を害しないやうな方法を選ぶだらう。そして兎も角も私がローマの平和を保護する職務に當つて居るといふので、彼れの運命を私の手に任せた。私が若しお前の事を考へに入れなかつたとすれば、私の取るべき途は極めて簡單である。私は寧ろ社會の平和のため、此の憐むべき一人を犠牲にしたに違ひない。且つ又假に彼れを救つたとすると、それはやがてお前のためには底の知れぬ誘惑の道を作つてやるやうなものであり、私自身のためには自分の幸福を奪つて行つた者に、自分からお前を渡すことになるのだ。又此のまま棄て置いて彼れを殺したとしたら、或はまたお前が眼が覺めて再び私の手に戻つて來る機會があるかも知れない。併し若しどうしてもお前が彼れを助けたいといふなら、其の手段が無いことはない。それは私の身を滅して彼れを救ふのだ。お前は恐らく私がどんな危険を冒さねばならないかといふことを知らないだらう。今若し私が兵卒に命令して彼れを解放させたとする。此の國の祭司の長は、頗る執念深い奴だから必ず、アンチオケへ行つてシリアの總督に訴へる。それでもいかにぬ時には、カイザルにまで訴へて出るにきまつて

居る。若し私がカイザルの疑を受けたら、死刑でないまでも、流刑には必ず處せられる。我々ローマ人に取つて、死刑よりも恐ろしい、流刑を覺悟した上でなくては、彼れを逃がすわけには行かないのである。」かう言つて、ヴェルスはじつとマリアの顔をながめた。

「彼れを救ふことは、やがて私自身を滅ぼすことになるのだ。これが私の與へるものだ。私の賭け物だ。私はお前の賭け物を待つて居る。……併しもう時間が迫つて居る。宣告文は出來て居る。私はそれを見て來た。彼れは夜明と共に死刑を執行されるだらう。踏越節のためにもう數へ日になつて居るから。」

「わたしの賭け物を待つて居る？」とマリアは叫んだ。「わたしが何を出したらいいのです？ わたしはもう何もない。わたしはもう先の晩に、残らず貧民に施してしまつた。」

「私は貧民に施すやうなものを求めはしない。」とヴェルスは冷かに答へた。「私の求めるのはお前だ。お前だけだ。お前の全部だ。私は、此の年頃、お前を求めて居た。そして今やうやう其の時が來たのだ。お前がそれを知らない筈はないだらう？ いゝかね、我々は互に了解しなくてはならない！……お前が彼れを愛すれば愛するだけ、私はお前を愛するのだ

お前が彼れを助けたいと願へば願ふ程、私は彼れを滅したいと願ふのだ！ 我々は互に了解しなくてはならない！……お前は彼れの生命を求め。私は自分の生命を求め。そしてお前は彼れの生命を得るだらう、併し私は彼れが死刑を運れる前に、お前を得なくてはならない。……ねえ、解つたかね？……若し言へるなら、否と言つてごらん、さうすれば彼れの血は、お前の上にかゝるだらう、彼れを此のはめに陥れたお前の上に、彼れを二たび滅ぼしたお前の上！」

マリアは、此の時になつて、始めて自分の本當の立場が分つて來たやうな氣がした。彼女の心には最早凡ての人が信せられなくなつた。たゞひとりたよりに思つて居た此の人さへ、自分を了解しないといふことが分つた時に、彼女の眼の前には、凡ての人の靈魂が、泉に落ちた石のやうに、深く／＼暗黒の底に落ちて行くのが見えた。凡ての人は何の意味をも解せず生活して居る。凡ての人は最早自分の立つ處を知らない。彼れを愛した人々さへ、眞實に彼れを了解しないとすれば、ヴェルスに、自分の心が了解されないのは、寧ろ當然のことだと言はなければならぬ。

「して見ると、彼れの靈魂たましひの底まで見た者は、私ひとりであつたのか？」
彼女は自ら異んだ。それはそんなに困難ワザカしい事とも思はれない。自分は生れてから彼れの話を聞いたのは、たゞ三回であつたが、それでも自分には彼れの心がよく解る。自分は彼れの思ふことを残らず知つて居る。彼れの心の中に住つて居るやうに、彼れの心はよく解る。

彼女は血走つた眼を睜つて、恐ろしい不思議に驚くやうに、ヴェルスを視詰めて居た。

「わたしはやつと解りかけて來た。」とマリアは獨語ひとりごとのやうに言つた。「わたしの目にははつきりと地獄が見える。貴方の眼には見えないものが、私にはよく見える。彼れが此の地上に降つてから、其處に何が起つたかは、貴方には分らない！」

彼女に取つては、其の時から此の世界は同じ世界ではなくなつた。そして最早ヴェルスには従へない世界になつた。若しヴェルスの言ふ通りにして、彼れの生命を救つたとしたら、彼れの一切の願ひと、彼れの一切の愛とを殺さなくてはならないのだ。若し一時たりとも、戀の重みに引かれて、ヴェルスに屈服したら、彼れが語つた凡ての事、彼れが行つた凡ての事、

彼れが與へた凡ての物は、永久に闇の底に沈んで、此の世界は、彼れが生れなかつた以前よりも、一層荒れた淋しい所になつてしまふだらう。そして人類は永久に天に近づくことは無いであらう。ヴェルスは彼れがわたしに與へたすべての物を要求するのだ。彼れならば此の様な場合に躊躇はしまし。自分はなせ此の二つの犠牲の間に、目の見えぬ野獸のやうに迷ふのか？ それは自分の過去の耻かしい生活が、自分を押へつけて、彼れの居る水平まで昇らせないのでないか。彼女は血を吐くやうに絶叫した。

「わたしにはもう此の自分の靈魂のやり場が分らなくなつた！……若しそれを失つたら、私には何物も残らない。若しそれを救つたら、我々には何物も残らない！」

マリアは今此の最後の歧路に立つて、何れの途を取るべきかに感つた。このまゝ彼れを殺すことは如何にしても忍びない、と言つて、彼れによつて甦へつた自分の靈魂を、再び元の汚れにかへすのは、更に恐ろしい罪惡である。それは自分一人の滅びに留まらず、彼れによつて救はれたすべて靈魂の滅びである。彼れの肉體を殺して、靈魂を救ふべきか、靈魂を殺して、其の肉體を救ふべきか、の問題を決しかねて彼女の心は麻の如く亂れた。ふら

ふらと倒れかゝつて、思はずヴェルスの助けを呼んだが、ヴェルスの手が其の身に觸れようとする、愕然として跳び退いた。けれどもヴェルスが憤然としたやうに、

「もう澤山、もう何も要らないから、お前の決定通りにしよう。……彼れを苦しめるのは私のせいではないぞ！」

と言棄て、黙つて扉口へ行きかけた時には、さすがに追ひかけて、其の上衣へ縋りついた。

「ヴェルス！ ヴェルス！……どうぞ！……まだ言ふことがある！……然う決めてはいけな
い！……だがわたしに出来ない事を求めないで！……わたしは貴方の奴隷にでも何にでもなる。貴方の足許へ膝を突いて、一生貴方の御用をします。只彼れの生命だけをわたしに與へて下さい！」

「澤山！」とヴェルスは振切るやうにして言つた。「それにもう時がない！」

彼れは隔ての扉を開けて、遠ざけた人々を呼入れた。そして一同に向つて

「今お前らの主を救ふ相談をしたのだが、此の女は、殺してもいゝといふから、日の出前

に、彼れの刑を執行することに決めた。」

と言渡して、さつさと出て行きさうにする。アリマテアのヨセフが、あわてゝ引留めて、
「待つて下さい、もう一度、私から言つて見ますから。」

と言つて、マリアの側へ来て、色々と譯を尋ねるが、マリアは何も言はない。彼の女は、もう最後の決心を堅めたのである。女や男が、周圍へ集まつて、だましたり、賺したりしても、彼女は口を開かうともしない。病人や乞食の群が、口々に罵つて、手を振り、足を踏んで脅かしても、彼女は眼を据えて、遠くを見詰めたまゝ、身動きもしなかつた。折から往來の方で、多數の足音が聞え出した。人々の怒り叫ぶ聲、武器の響、馬の足音が、此方をさして近づいて来る。程なく「十字架に釘けよ！」「誘惑者よ！」「十字架に釘けよ！」と口々に叫ぶ群衆の聲が聞えて来る。一人二人、竊と立つて、窓の方へ行く。

「彼れだ！」といふ叫聲に引つけられて、他の者も、ばら／＼と窓の側へ行つて、往來を眺めた。其の時イエスは兵士に圍まれて、打たれながら、罵られながら、引摺られるやうに進んで来たが、窓の下まで来ると、何かに躓つて、ぱつたりと倒れた。

「あゝ、倒れた！」と窓の側で誰かと言ふ。「此方を見てゐる！」

此の時また扉の前に立つてゐたヴェルスは、じろりとマリアの方を見た。

「マダレン」と彼は勝誇つたやうに言つた。「私は今でも約束するよ。」

此の時まで、部屋の中央で、柱の前に立つて、じつと前を視つめて居たマリアは、神の光明と確信とに充ちた、平靜な聲で言つた。

「行け！」

其の聲が、靜かな部屋の中に響き渡つた時、窓際から、

「あゝ、立つた！ また引かれて行く！」

といふ聲が聞えた。

ヴェルスはマリアの方へ目を注ぎながら、じり／＼と、後退りに、扉口へ寄つて行つた。

けれどもマリアは、最早周囲の何物にも心を動かされないやうに、身動きもせず立つてゐた。

戀の女王

——エリザベスとメリー！スチュアート——

(一)

古來歴史上に艶名を歌はれた多くの女性のうちで、特に深く世人の記憶に刻まれたものは、大抵は女王とか、王女とかいふ高貴な階級に屬した人々であつた。それは其の運命が直ちに國家の運命に影響を及ぼして、或は領土離合の原因となり、或は慘憺たる大戦亂の動機となつた例が多いからである。これらの女性の生涯には、いつも政治上の廣大な背景が添はつて、或は華やかな、或は悲惨な、種々の挿話が織込まれてゐる。これらの女性の戀愛には、如何なる場合に於ても、政略的の意味の加はらないことはない、けれども結局は、政略のために、戀を犠牲にするか、或は政略を棄て、戀に生きるか、二つに一つを選ばねばならないのであつた。羅馬の英雄アントニーをして、世界の主權を、土塊のやうに放擲

させた、埃及の女王クレオパトラもさうであつた。其の全生涯を國家の犠牲として、熱い血の騒ぐのを冷やかに抑へ通した、英國の女王エリザベスもさうであつた。エリザベス女王の骨肉でもあり、競争^{スリットラン}でもあつた。蘇國の女王エメリー・スチュアートもさうであつた。佛蘭西革命の第一の犠牲となつた、王妃マリー・アントワネットもさうであつた。近代の英雄ナポレオンの權勢の前に、人身御供に擧げられた、奧地利の皇女マリア・ルイゼの生涯もさうであつた。戀愛と政略との葛藤は、これらの女性の生涯を通じて、それ^{ごと}くに複雑な運命を織出してゐる。

中にも同じ日の下に生を享けて、全く異つた運命を追つて行つたものは、英國の女王エリザベスと蘇國の女王メリー・スチュアートの生涯であつた。此の二人の情生涯は、戀愛と政略との間に選ばれた二つの異つた道を代表するものであつた。

メリー・スチュアートの運星は、其の最初の光を見た瞬間から、暗黒な雲に蔽はれてゐた。女王の父ジエームス五世は、ソルエー・モッスで、英軍のために、不名譽な敗北を取つて、王

宮に歸る間もなく、失望と慚愧のうちに此の世を去つた。女王の生れたのは、丁度王の死ぬ六日前であつた。幼い女王は、暫くして母の故郷なる佛蘭西へ送られて、佛蘭西の宮廷で教育された。

佛蘭西へ行つたメリーは、佛蘭西の皇后カテリナ・デ・メヂチの膝元で成長した。此の皇后は中々の策略家であつたが、當時の佛國宮廷は、皇后が其の故郷の伊太利から齎らした敗風の爲に、風紀が甚しく紊亂して居た。有名なロンサールを始めとして、多くの詩人騷客らは、典雅流麗な詩賦を綴つて、宮廷の生活を莊嚴にし、トルバヅールの群^{ぐん}が奏する美妙的な樂^{がく}の音は、晝夜となく、宮廷の空氣を搖^ゆがして居た。時には盛大な饗宴が催され、勇壯な眞劍勝負が行はれ、廷臣はみな長袖を翻して、堂上を往來して居たけれども、其の傍らには又言語を絶した墮落と罪惡とが漲つてゐた。皇后の目前で、罪もない者が殺戮されるやうなこともあつた。日常の話題に上る事柄といつては、陰謀や、姦通や、其の他有らゆる淫^{みだら}りがましい事、残忍な事ばかりであつた。皇后のカテリナ・デ・メヂチから、其の名ばかりの夫たる王を疎外し、佛蘭西の實權を握る爲には、我が子の大不品行をも默許して居たので

あつた。

メリー・スチュアートは、かういふ境遇の中で、十六歳まで育てられて、善惡兩個の智慧の木の實を味はつた。メリーは非常に叡悟な性質で、伊太利語も、佛蘭西語も、羅典語も速かに進歩し、まだ十代の頃から、詩も作れば、繪も描いた。馬に乗る事も巧みであつた。メリーはまた人の肚を見抜く鋭い眼力をも持つて居た。つまり其の境遇の上からして、メリーは自然に早熟な女に出来上つてしまつたのであつた。

メリー・スチュアートは、幼少の頃から、カテリナの第一の王子と婚約を結ばれて居た。此の二人の結婚は、やがて蘇格蘭の王國と佛蘭西の王國とを結合させると同時に、若し又英吉利の女王エリザベスが、未婚のまゝで亡くなるやうなことであれば、其の領土も、また必然に此の二人の手に落ちて來るといふことが、豫期されて居たのであつた。

かうしてメリーは、十六歳で佛蘭西の皇太子フランソワと結婚した。其の時フランソワは、メリーより一つ年下の十五歳であつた。併しフランソワは十五歳にもなつて居ながらまだめそめそと嘔り泣きをするやうな、みじめな、低能な、身體の曲りくねつた、醜い少年

であつた。メリーとしては、此のやうな少年を夫にするなど、は、實に思ひもよらぬことであつたらう。實際二人の結婚は、只名ばかりの結婚であつた。此の病身な少年は、耳の中の腫物に悩まされて、終夜聲を擧げて泣きわめいたのであつたが、大人にならぬうちに死んでしまつた。それより先き、此の結婚後まだ一年とも経たぬ頃に、佛蘭西王アンリ二世が死んで、フランソワが位を嗣いだので、メリーは蘇國の女王であると同時に、佛蘭西の王妃ともなつた。名ばかりの夫はあつても、マリーは勿論そんな廢人同様の少年を何とも思つては居なかつた。時にメリーは十七歳であつたが、既に中々の傑物たる氣象を現して、霸氣満々たる皇宮カテリナ・デ・メヂチとさへ對抗して、よく自己の勢力を支持して行つた。メリーは竊にカテリナに「藥種屋の娘」といふ渾名を付けて、輕侮の意を表して居た。僅かに一年の間ではあつたが、メリー・スチュアートは、事實に於て佛蘭西の主治者であつた。けれどもフランソワは、即位の翌年にメリーを残して死んでしまつたので、メリーは如何に内心に燃えるやうな野心を抱いて居たにもせよ、最早何等の實權をも握ることの出來ないやうな境遇となつた。

メリー・スチュアートは、其の頃既に一種異常な、有らゆる人々を引きつける、不思議な魔力を有つた女になつて居た。彼女は背のすらりとした、瘦せぎすな女で、其の雙肩に、脊に、房々した栗色の頭髮を垂れて居た。そして皮膚の色は透き徹るやうに白くて、葡萄酒を飲む時などは、其の赤色の液體が、一滴づゝ華車な咽を下つて行くのが、いつも外から透き通つて見えたといふ話が、誠しやかに傳へられて居る。

が、外見はそのやうに、弱々しく見えてゐたに係らず、メリーには、男子のやうな、頑丈な、逞しい所があつた。非常な疲労にさへも屈しないで、よく之に耐へるだけの氣力があつた。其の華車な身體の中には、鋼鐵のやうな力が籠つて居た。其の榛色の眸の底に、火のやうな活力が全身に漲つて居ることを思はせるやうな光があつた。メリーは、若いにも似ず、種の手管をも心得て居た。表面には従順を装ひながら、頑強に自分の目的を追求して行くことが出来た。又内には氷のやうな冷たい心を隠しながら、外には恍惚と遣る瀬なげな様子を見せることも出来た。又時には如何にも女王らしい鷹揚な態度を示すことも出来た。

メリーは十八歳の時には、もう異様な多情性を發露して居た。彼女は其の周圍にある誰れ彼れを、殆んど辯別なく愛撫したり、接吻したりした。彼女は其の觸覺から受ける心持を味はずには、殆んど生きて居られないといふ有様であつた。其の華車な、美しい手は、いつも誰れか傍に居る者の肉體に觸れずには居なかつた。

けれども深慮の有る彼女は、容易に戀の最後の階段に足を踏み掛けるやうな女ではなかつた。其の智力と感情とが、同時に敵の手に捕はれない限りは、容易に胃を脱いで降服するまでにはならなかつた。彼女は其の周圍にある幾多の男子の口から、媚かしい言葉を聞いて、溶けさうな秋波を送り、時には男の膝に身を凭せて、頭髮の相觸れるまでに顔を差し寄せ、白い手を伸して男の接吻に打ち委せて居た。けれども只それだけであつた。それ以上には進まうとはしなかつた。こんな事でも、一面から云ふと、メリーは只其の生ひ立つた宮中の風儀に従つて居たのだと言はれない事もなかつた。又斯ういふ點では、其の身内でもあり、不俱戴天の敵でもあつた、英吉利の女王エリザベスと善く似て居た。エリザベスもメリーと同じやうに、外見は如何にも多情らしかつたが、心は堅く引締めて居た。

實際メリー・スチュアートの情的生涯は、一片の哀史であつた。彼女の心は、絶えず情に燃

え、戀に憧れてゐながら、それで居て、身も魂も打ち込んで愛するやうな男には、容易に出會はなかつたのである。自分のやうに強い、大膽な、熱烈な、さうして心の底は、飽迄も剛健な、堅實な男——さういつた男でなくては、自分の戀人とするに足らないとメリーは思つて居た。假令其の敵が如何なる浮説を立て、如何なることを傳へようとも、又其の内部の情火が、如何に燃え盛つて、全身は情慾の焰で顛へて居ようとも、其の全身全靈を捧げて戀ふることの出来るやうな男に出會ふまでは、他の男には目も呉れなかつたのであつた。

メリーが初めて其の希望に副ふやうな男に出會つたのは、夫に別れて間もない頃であつた。併しメリーは、其の時にはまだ充分に、それが自分の戀であるといふ事を意識してゐなかつた。二人が實際に手を握つたのは、遙かに後の事であつたが、二人が相溺愛した時は、是れやがて二人の身の破滅するときであつた。

メリー・スチュアートがまだ佛蘭西に居た間に、其の臣下の一人で、ボスエル伯と云ふ貴紳が、宮中に伺候したことがあつた。ボスエル伯は、メリーよりも二三歳年上の男であつた。女王は初めてボスエルを見た瞬間に、何故とも知らず、深く心を動かされた。何とも名狀し

難い、永く忘れることの出来ない戦慄を身に覺えて、存在の底から揺り動かされるやうに感じた。メリーは初めて其の全身をも全靈をも許すべき人に出會つたのであつた。

(II)

千五百六十一年に、メリー・スチュアートは佛蘭西を去つて蘇國に歸つた。華やかに飾り立てた御座船が、リースの港へ入つた時、メリーの目に映じた故郷の光景は、佛蘭西宮廷の驕奢と華美とに親しんで居た目には、何といふ寂しい、無趣味な、淺ましいものであつたらう！ 南國の暖かな日光の代りに、爰には灰色の霧が立籠めて、冷たい雨がしとしと降りつゞく埠頭には、僅かに雨露を凌ぐばかりの哀れな小屋が建並んで居た。メリーは其處からエデンバラの都へと進行したが、餘り歓迎の聲は繁くなかつた。女王の馬が圓石を敷いた道を踏んで、ホーリルードの王宮に向ふと、其の途中、細い小路々々から吐き出されて来る群衆が、何れもむづかしい顔をして、じろくくと女王の一行を見送つて居た。

蘇國人は最も頑固な新教徒であつたので、舊教の中で育つた新來の女王には、決して心を許さなかつた。其の上メリーが贅澤な調度や、華美な色彩や、異國の文化で、其の身邊を飾つて居ることも、質素な蘇國人の氣には入らなかつた。國民はメリー・スチュアートが、蘇國議會で通過した法律を廢止して、舊教を復活させるやうなことはあるまいかといふ危懼を抱いて居た。

メリー・スチュアートは、其の臣民の冷かな待遇に逢つて、却つて其の本性中の高尚な性情が目醒した。で、一時は、眞に女王らしくなつて、政治に全心を集注した。メリーは人民の豫想に反して、新教を尊崇し、混沌たる蘇國の状態を改善して、秩序と幸福とを與へようといふ事に全力を注いだ。女王の熱心は次第に人民に認められて來た。女王が城門を出る度に、人民の歡呼の聲が、夥しく響き渡るやうになつた。メリーには人心を收攬する一種の魔力があつたのである。あの鐵の如き顔色をした説教家のジョン・ノックスさへ、一時は女王のために懐柔された。メリーは率直にノックスと會見し、少しも女王らしい威嚴を裝はず、尋常の婦人らしく、打解けて、懇ろに色々の事を語り合つた。これが爲に流石のノ

ックスも、一時は其の攻撃の舌鋒を收めたのであつた。メリーはまた煥地利や西班牙の諸親王から、結婚の申込を受けた。義弟に當る佛蘭西の王も、秋波を送つて來た。英吉利女王エリザベスの敵意などは、メリーは氣にも掛けなかつたのである。彼女は深く自ら其の力を信じて、これならば儘かに蘇國を支配し得られると確信するやうになつた。

併しメリー・スチュアートの成功は、永久のものではなかつた。恐らく何人といへども、蘇國のやうな國を、容易に統治し得るものはなかつたであらう。蘇國は最も黨派心の盛んな所で、豪族の間に殆んど私闘と紛擾の絶間（絶間）はなかつた。貴族といつても、まだ半野蠻で、女王の面前でさへも、どうかすると劔を抜いて斫り合ふやうなことが折々あつた。女王が是等の貴族等の中の何人を寵愛するとしても、必ず一團の貴族は、敵となつて反抗を試みるに相違ないのである。蘇國は、いはゞ、北方のコルシカ島であつたのである。しかも南方のコルシカ島よりも、一層野蠻な、一層御し難い國であつた。

メリー・スチュアートは、蘇國の事情が明になるにつれて、漸く當惑し始めた。最早自分の獨力だけでは心細くなつて、頼たよりになるやうな男子を王婿に擧げて、其の力を借りて國

を治めるより外には途がないと思ふやうになつた。メリーは遂に従弟に當るダインリー公爵に目をつけた。ダインリーは舊教徒であつて、英吉利人の間にも大なる勢力を有つて居た。程なくダインリーは、女王の招きに應じて、蘇國へ來た。

女王はボスエルの事は最早そろ／＼忘れかけて居た。彼女は又しても戀を戀して居たのであつた。ダインリーこそは、必ず自分の戀を満足させて呉れるらしく期待して居た。實際ダインリーは如何にも女王の戀人たるに相應しい外見を備へて居た。背の高い、容貌の端麗な、立派な男子で、馬に乗つた風姿などは、特に好かつた。其の上メリーを買ひ被らせるに足る種々の教養をも有して居た。

メリー・ステュアートは、實際のダインリーは見ずに、たゞ自分の想像で作り上げたダインリーの幻影を戀してゐたのであつた。婚約はあわたしく申し出された。女王自身が、誰れよりも先きに、此の結婚を急ぎ立てた。それゆゑ結婚は直ちに成立つて、蘇國には王へンリーと女王メリーとが相並んで君臨することになつた。で、メリーはボスエルに諭して、有名なゴルドン家の息女と結婚させることにした。彼女は實際ボスエルに對しては、最早

何の心残りもないやうに思つて居たのであつた。

メリーがダインリーの人格の上に築き上げて居た空中樓閣は、早くも結婚の當夜に於て破壊されてしまつた。ダインリーは、始末におへない暴飲者であつた。彼れは、メリーの目には、殆んど肉慾の化身のやうにのみ見えて來た。彼れには頭腦といふものは皆無であるが如く思はれた。彼れに有るものは、甚しい虚榮心と甚しい利己心とばかりであつた。彼れは、何人に對しても、愛情といふものを有たなかつた。就中メリーに對しては、初めから自分に對して全心を捧げて居るものと己惚れてかゝつて居た。

此の結婚の醸した第一の禍は、新教派の貴族の叛亂であつた。メリーは自ら女王の威風を示して、一隊の軍勢を率ゐて、叛徒の鎮定に従事した。女王は馬に跨つて軍隊の先頭に立ち、夜は兵士と共に地上に眠り、兵卒と同じ粗服を纏ひ、兵士と共に飲食して、備さに軍隊の辛苦を嘗めたが、其の機敏な、猛烈な元氣は、これがために少しも沮喪することはなかつた。で、將校兵士らは、此の女王の勇敢な精神に勵まされ、鼓舞されて、頗る勇敢に戦つたので、女王は忽ちの間に暴徒を鎮壓し、其の領袖共を八方に逐ひ散らして、やがて

都に凱旋した。

メリーは今こそ眞の女王として、蘇國人の尊崇を博し得るやうになつた。が、此の時になつて、女王の性格内に伏在してゐた他の動機が、次第に頭を擡げて來た。ダーンリーは此の時卑劣にも戦場の困難を他に^{よそ}見て、自分は獨り淫酒の樂に溺れて居た。メリーは其の夫の痴愚と醜態と墮落とを見るにつけて、絶えず心を苛^{いらだ}立たせて居た。彼女はほと／＼愛想を盡かして、こんな不人情な、愚劣な男に、情を立てゝゐるには及ばないと思ふやうになつて來た。自分は男子に譲らない勇氣を有つた一女傑ではないか？ 何故、愚劣な男性が恣^まにするやうな、尋常の快樂が、女傑の我が身には許されないものであらう？

ボスエルが久しぶりでもりルードの宮中へ伺候したのは此の時であつた。メリーは、此の時初めて、ボスエルが其の身に取つて全世界にも換へ難い貴重な人物であることを意識したのであつた。ボスエルは極めて快活な、血色の美はしい、肩幅の濶い、四角な顎をした、いつも高らかに快活に笑ふ男であつた。彼れはいつも立派な服装をして、逞しい馬に跨り、血氣壯んな、勇敢な壯漢らと交遊することを好んだ。其の鮮かな血色は、如何に

も身心の強健なことを表して居た。其の小さな目は、絶えず樂しげに瞬いて、其の奥の充血した眼光の凄みや、豚のそののやうな、悪狡^{わるさず}さうな、貪婪^{あきら}さうな所などは、決して人に見せなかつた。尖つた顎^{あご}は朽葉色の鬚で蔽はれ、殘忍な相を帯んだ口元の曲線も、無邪氣らしい笑顔^{えがほ}で隠蔽されて居た。就中率直な、磊落な、動作進退は、彼れが人を魅する何よりの特質であつた。

ボスエルはよく手軽に戀愛關係をも結んだし、又人と争つては、白刃を振廻すことも珍らしくなかつた。けれどもボスエルは、只の亂暴者ではなかつた。思慮もあり、分別もあり、又相當な修養もある男であつた。當時の蘇國の情態から推して考へれば、ボスエルは立派な貴公子であつたといつてよい。彼れは伊太利語も話せば、佛蘭西語にも通じ、羅典文をも自由に書き綴つた。又其の時代には珍らしい讀書家で、種々の書籍を蒐集するのを道樂にして居た。當時蘇國で藏書札を作つたのは、恐らくボスエルが嚆矢であつたらう。ボスエルには、かういふ、逆も普通の放蕩漢の及びもつかないやうな美所があつた。彼れは確かに多方面の趣味を有し、複雑な性格を備へてゐた男であつた。

ボスエルが佛蘭西へ来て女王の傍らに居たのは、ほんの暫時の間であつたが、女王の心は此の間に深くも彼れの爲に動かされた。で、其の後は、彼女が眞面目に男の事を考へる時といへば、必ず毎にボエルの事を考へて居たのであつた。それで居ながら、メリーは相變らず、其の左右に居る侍童を抱擁して愛撫したり、紅の唇で頻りに侍女らに接吻したり、若い詩人や樂人の膝に凭れて、彼等をして心を溶かすやうな戀の歌を歌はせたりして居た。

女王は蘇國に歸つて、政治に熱中して以來、暫く忘れ果てゝゐた佛蘭西宮廷生活の古い夢を、又改めて見はじめた。彼女は又もや官能の快樂に耽るやうになつた。彼女はもう他人の思惑や世間の習慣なぞには、全く頓着しなくなつた。公然男子の服装をして見たり、嬖臣らを相手にして、巫山戯たり、じやついたりして、質樸な蘇國の民衆を驚かした。佛蘭西から来てゐた詩人のシャトラールなどは、女王のかうした氣紛れを、眞實自分に心あつての振舞と思ひ込んでしまつて、或る時宮中の大騒宴がやつと夜更けて終つた際、シャトラールは醉に紛らして、竊かに女王の許に忍んで、寢臺の下に隠れて居たが、やがて見咎め

られて、引き出されて、大騒ぎになつた。が、飽迄己惚の強い彼れは、それにも懲りず、尙ほも女王に付き纏つて、其の次には女王の寢臺に這ひ上つて、夜被の中に忍んで居た。此の時には手ひどく引摺り下されて、引立てられ、獄に繋がれ、程なく死刑を宣告された。シャトラールは一言も辨疏をしないで、宣告に服したけれども、愈々刑臺に上つた時、怨めしげに王宮の方を見やつて、佛蘭西語で斯う叫んだ――

「あゝ、残酷な女王よ！ 私は貴女の爲に死ぬのだ！」

もう一人、ダギデ・リッチオといふ伊太利人があつたが、これも矢張シャトラールと同じやうに、女王に戀歌を作つて送り、女王もそれに應酬して居た。けれどもメリーは、只リッチオの才を愛してゐたばかりで、それ以上の注意をも同情をも寄せてはゐなかつた。女王は此のリッチオを秘書官に擧げて、外交上の事務に與らせたが、前任の秘書官はそれを根に持つて、百方ダンリーの嫉妬心を煽り立てた。一夜メリーがリッチオと一室に同席して、食事を共にして居ると、ダンリーが數人の従者を引連れて、突然室内へ闖入した。ダンリーがメリーの腰を抑へて居る間に、リッチオは女王の目前で刺殺されてしまつた。此の

時メリーは妊娠中で、最早臨月に間もない身體であつた。

此の時からメリーはダーンリーを毒蛇のやうに忌み憎んだ。メリーは最早生れるばかりになつて居る嬰兒に、悪名を附けたくないばかりに、じつと忍んで居た。生れた王子は、後に蘇國のジュームス六世、即ち英吉利のジュームス一世として、兩國の王位に登つたが、此の王は、其の一生涯を通じて、どうしても白刃を見る勇氣がなかつたと言ひ傳へられて居る。

(III)

此の事あつて後、メリーは、再三再四、ポスエルを宮中に呼び迎へた。自分の力と頼むのは、此の男のみだといふ事が、今はもう火を見るよりも明かに彼女の心に映じて來た。彼れの卒直な所、皮肉な所、呑氣な所、彼れの嘲嘘、彼れの勇氣、彼れの元氣などが、びつたりと女王の氣分とも要求とも調和した。彼女は最早全く體裁を繕ふ事をやめてしまつた。自分で勤めて、ポスエルを他人と結婚させた事をも忘れてしまつた。自分が女王である

といふ事すらも忘れてしまつた。彼女は再び彼れを自分の有にしたいなくなつた。どんな高價を拂つても、此の男を我が有としなくてはならぬと思つた。

「假令蘇國を失つても、英國を失つても、ポスエルを自分のものにしなければならぬい！」

と彼女は思ひ餘つて叫んだ。

ポスエルとても同じ心で、メリーと相樂むことが出来るなら、如何なる犠牲をも敢て厭はないといふ下心であつた。二人は、恰も二個の燐の團塊が、兩方から跳り寄るやうに、ぶつかつて、一團となつて、燃え上つた。

後になつて、一つの小函の中から見出されて、女王の審問の際に、其の罪惡の證據に提出された幾通の手紙——あの有名な艶書をメリーが書いたのは、此の際であつた。是等の手紙は「小函の手紙」と呼ばれて、今では其の原本は失はれたけれども、これまで人間の手になつた書信の中で、最も異常なものゝ一つに數へられて居る。一切の羞恥、一切の躊躇、一切の無邪氣は、是等の手紙の中では悉く擲ち去られた。一句一行が、恰も闇に叫ぶ色餓

鬼の叫聲の如く、其の筆端からは烈々たる煩惱の火花が迸つて居る。メリーは、堪へ難い情慾の猛火に身を焦しつゝある女性の物狂ほしさを、そのままに紙上に示して居るのである。

事件は急速に進行した。天然痘に罹つて、漸く回復しかけて居たダーンリーは、思ひがけない火薬の爆發の爲に、床上に臥したまふで、不思議な死を遂げた。同時にボスエルは、或る奇異な理由で、其の妻を離縁してしまつた。メリーは、ダーンリーの死後三ヶ月目に、新教徒のボスエルと結婚した。

幾年か以前に、佛蘭西で發端した二人の戀は、幾たびかの曲折の後に、爰に初めて成就された。二人が初めて逢つた瞬間から、二人の間には、目に見えぬ縁の絲が結ばれて居た。海も此の二人を割くことは出来なかつた。あらゆる戀や浮氣は、此の悪因縁の前には、殆んど影のやうなものであつた。正式結婚の太い羈絆も、二人の火の如き熱烈な魂の喘ぎの前には、紙片のやうにめら／＼と焼け失せてしまつた。

若し此の戀が、二人の初めて逢つた當時に成就されて居たら、二人に取つても、周圍に

取つても、遙かに幸福な結果を齎らしたであらう。然るに運命の惡戯は、飽迄も此の二人を翻弄せずには置かなかつた。二人が結び着いた時は、取りも直さず又忽ち別れねばならない時であつた。永久に別れねばならぬ運命に迫られて居る時であつた。

蘇スコットランド國の國民は、女王の傍若無人の振舞を憤つて、一齊に背叛した。メリーがエヂンバラの町中まちなかを通ると、町の女等は口々に女王を惡口した。殺されたダーンリーの姿を描いた大きな旗が、辻々に立てられ、女王に對する呪咀の聲は到る處で聞かれた。

女王は一隊の兵を率ゐて叛徒の鎮定に向ひ、ボスエルと馬を並べて、貴族等の陣營まで進んだ。やがて兩軍がカールベリ・ヒルに會して戦を開いた時、メリーの率ゐた烏合の勢は敵の一撃に脆くも潰亂して、女王は運拙く敵の虜となり、ロックリーヴン城へ送られた。メリーは此の時ボスエルの胤を宿して居たが、——此の事は從來の歴史家が餘り書いて居ない事である——此の幽閉の中に、月満ちて男子の雙生兒ふたごを擧げた。此の時から、メリーは最早自身の成行には殆んど心を用ゐなくなつた。そして強ひられるまゝに、禪位の詔書に署名して、位を幼王子ジョージムスに譲つてしまつた。

けれどもメリー・ステュアートは、かういふ境遇に沈みながらも、尙ほ男性を魅する力を失はなかつた。警護の武士の中に、ジョージ・ダグラス、ウィリヤム・ダグラスといふ二人の男があつたが、此の二人が深く女王に思ひを寄せて、竊かにメリーを城外へ落さうとした。其の企は一たびは失敗に終つた。女王は洗濯女に姿を變して城を出たが、途中で見咎められ、手の華車きやしゃな所から、遂に露顯みあらはされてしまつた。けれども二度目には成功した。女王は城の裏門を抜けて、湖水の畔ほとりに出ると、ジョージ・ダグラスは小船を雇して、其處そこに待受けて居た。湖水を横ぎつて對岸に着くと、クロード・ハミルトン公爵が、五十騎の手勢を率ゐて女王を迎へ、遂に恙なく安全の地へ護送した。

メリー・ステュアートは、一たびかうして敵の手から脱したのであつたが、ボスエルの國に居ないのを知つて、急に蘇スコットランド國を厭はしく感じた。メリーは、此の數年の間に、人生の有らゆる辛酸を嘗め盡し、又此の數ヶ月の間に、人生の有らゆる快樂をも味つた。けれども今はもう亂暴な、野蠻な、此の國には用はないと思ひ出した。

メリー・ステュアートは、飄然スウェーデンとして蘇スコットランド國を去り、ソルエーの入江を横斷よこぎつて英國の地に入はいつた。英國の地に入ると、メリーは忽ち英軍の手に捕はれて、初めはカーライル城に幽閉されたが、其の後諸方に轉送されて、最後にフォサリングゲージ城に移された。

メリー・ステュアートは、十八年の間、英吉利國內に捕はれて居た。此の間、彼女は終始エリザベス女王の政敵として、舊教徒の陰謀の中心と目指めざされて居たが、最後に英吉利女王を暗殺して、メリーを英國の王位に登さうと企てた、アントニー・バビングトンといふ者の陰謀が露顯すると共に、メリーは其の連類として審問を受け、千五百八十六年十月二十五日を以て死刑の宣告を受けた。メリーは最後までバビングトンの陰謀には關係がないと主張して居たが、千五百八十七年二月八日、遂にフォサリングゲージ城中で痛ましい最後を遂げた。

メリー・ステュアートは、もう其の生前には、再びボスエルと相見ることとは出来なかつた。カーライルベリ・ヒルの敗戦後、ボスエルは蘇スコットランド國の北方へ逃げのびて、若干の船を集め、海賊のやうな眞似まねをして、英國の商船を脅かして居た。けれども間もなく、女王が敵の手に捕はれたといふ報しらせを聞いて、失望の餘り、直ちに那威ノルウェーへ向けて船を進めたが、途中丁抹王デンマルクフレ

デリックのために虜にされた。併し丁抹王はボスエルの自由を束縛するやうなことはせず、マルモ城や、ドラグスホルムの近傍で、自由に狩などをすることを許した。ボスエルは恐らく此の城中で死んだらしい。千八百五十八年に、古來伯爵の柩ひつぎだと言ひ傳へられた一つの石棺が開かれて、丁抹の畫家が其の内に納めてあつた遺骸の頭部を寫生したことがあるが、それを見ると、如何にもよくボスエルの肖像と符合する所があるといふことである。

メリー・スチュアートの悲惨な生涯は、多くの詩人の空想を唆る種子となつて、古來の歴史的な女性中、クレオパトラと相並んで、後の世の語り草となつた。實際此の二人の生涯には多くの類似點がある。どちらも一國の女王であつて、どちらも其の理想の戀を追求して、ともかくも其の望を達したのであつた。どちらも無分別に、殆んど狂的に己れの戀を遂げた。どちらも其の目的に達すると同時に、其の權力をも、富をも失つてしまつた。どちらも天命を全うしなかつた。一方は其の戀人をして、大帝國の主權を一擲させたが、一方は戀の望を遂げようがために、己おのが頭上の王冠を失つてしまつた。

尙ほ其の他にも二三類似點があつた。二人ながら非常な美人だと評判されてゐたが、其の實は、雙方とも評判程の美人ではなかつた。二人が、詩歌や小説の主人公として、永く世人の記憶に残つたのは、共に外面の美よりも遙かに有力な或る別種の特質を備へて居た爲であつた。即ち二人とも一種不思議な、何人も説明し得ない——併しながら殆んど何人も抵抗し得ない——やうな一種不思議な魔力を有して居た。其の當代の人心に深い印象を留めた許りでなく、尙ほ今日に至るまでも、人々の想像を刺戟し、同情を唆そとるものは、一にこれあるが爲であつた。

(四)

メリー・スチュアートから女王エリザベスに眼を轉じると、其處には著しい對照が見出される。エリザベス女王の永い一生を辿つて見ると、何事につけても國家本位で、「英國のため」といふことを、一刻も忘れなかつた女王の姿が、歴々と目に映つて來るであらう。英國

のためには、チュードア王統の血を受けた、熱し易い、激し易い稟質をも、じつと抑制して、其の全生涯を、戀としては殆んど意味のない、戀の掛引に費してしまつた。

エリザベスは終生嫁せずして果てた處女々王であつたに係らず、其の登極の初め以來、屢々外國の君主から結婚を申し込まれたり何かして、幾たびも艶つぽさうな戀愛沙汰が生じたのであつたが、併し彼女の戀愛は、確かに一の掛引であつて、いつも國家的外交政略の一部になつて居たのである。たま／＼さうでなかつた場合には、それは單に彼女の虛榮心の附屬物たるに過ぎなかつた。蓋し女王は常に其の身が英國國民中の精粹であり、冠冕であることを見せびらかさうと力めたのである。そこで主として自分を、莊嚴に、華麗に見せる手段として、常に己が身邊へは、最も高貴な、最も勇敢な、最も容姿の端麗な廷臣ばかりを集めてゐた。

要するにエリザベスは、一面は、古今の經世家が慣用する、有らゆる策略を心得てゐた女王であり、己れの一身を囿とどにして、巧みに列國の君主等を操縦した一個の女傑であり、又一面は、壓おさくことなき虛榮心に捕はれて、時に兒戲に等しい振舞をもする虛榮家であり、

更に又他の一面では、女の有らゆる熱情を胸に包み、父ヘンリー八世と母アン・ブリーリンの放縱な血を脈管に漲らせた一個の淫婦であつたともいへる。今此の三重の性格を明かにする順序として、先づ此の婦人の有りのまゝの姿を描き出して見よう。

エリザベスが英國の王位に登つたのは、其の二十五歳の頃であつた。不思議な事には、此の女王の生年月が精確には傳へられて居ない。それはともあれ、其の弟のエドワード六世王が逝なり、其の姉のメリー女王が亡なつて、圖らずも自分が英國の王位を繼承するやうになつた時には、エリザベスは、其の智慧も、身體も、既に充分に發育して、相應に世間にも通じて、押しも押されもせぬ立派な成女になつてゐた。

マーチン・ヒュームは女王の晩年を評して、「粉飾せる妖婆」と喝破して居る。成程、七十歳近くにもなつて、其の周圍に群がる多くの若い廷臣らが、英國の元祿時代ともいふべきチュードア王朝末の華奢風流を競うて、一齊に媚を湛へ、誠しやかに其の美を讚稱し、甘言の限りを呈する時、是等伊達男だてをこらを流石ながしめに見て、骸骨の破顔の如く微笑する老女王の顔色

を見た時分には、何人でも然う喝破せずにはゐられなかつたらう。

けれども其の登極の初めの頃、まだ年も若く、體も强健で、性急氣鋭であつた時代の女王は、決してそんなものではなかつた。今日ハンプトン宮中に掲げてあるツッケローの手に成つた肖像を見ると、中年を越えた頃の女王を描いたものに相違ないが、それでも尙ほ其の顔は確かに美しいと言はれる顔である。其の美は異様な、殆んど人工的な美ではあるけれども、確かに男の心を否應なしに惹きつけるやうな、一種の魅力を有つてゐる。

嘗て一人の獨逸人が、獨帝の命を帯びて、エリザベス女王の宮廷を訪れたことがあつたが、此の使者は、深く女王の美に魅せられたものと見えて、歸國後、此の女王の面影を、見たまゝに傳へて居る。今此の獨逸人の言葉と上述の肖像と較べて見ると、女王の若い頃の風貌が、ほゞ目前に現れて来る。

其の頃は恰も女王の若盛りで、其の美も其の權勢も殆んど絶頂に達した時であつた。女王は、白面金髪の美人に特有な、透き徹るばかりの皮膚の色を見せ、其の姿は楚々として得も言はれぬ優美な趣があつた。又其の應答の機才に至つては、如何なる階級、如何なる

時代の女としても、これだけの如才なさがあつたらば、きつと人を驚かすに足るであらうと思はれる程に秀でゝゐた。獨逸の使節は斯う言つて居る。「女王は殆んど想像の及ばない程の莊嚴な、豪奢な生活を送つて居る。其の生活の大部分を占めてゐるものは、舞踏會、饗宴、狩獵、其の他それに類似の行樂である。女王は是等の行樂に、能ふ限りの豪華を衍ふのであるが、それでも尙ほ、人民に對しては、曾て女王メリーが求めたよりも、より以上の敬意を表せしめようと苛求して居る。女王は議會を召集して諮詢するが、併し如何なる場合にも、彼等をして自己の命令を遵奉せしめざれば止まないぞといふ事を知らせてゐる。」と。

ツッケローの描いた女王の像を見る者は、誰でも先づ其の手に最も重きが置かれてある事に氣が着くに相違ない。これは丁度、彼の所謂「ハプスブルグ家の唇」の奧地利王家に於けると同じ譯で、チュードア王家に取つては、此の一種の手が、貴重な一家の特徴となつて居たのである。女王の手は手套の中に包まれずに、其の長い、白魚のやうな指が露出になつて居る。女王は自ら此の手を眺めたり、弄んだりして居た。又其の周圍の者は、口を極めて此の手を嘆美したが、實際嘆美せらるべき價值があつたのである。

エリザベス女王の外貌の特徴は、略々これだけでも窺はれるが、尙ほ其の幼い頃の性行に就いては、女王に接近して居た輩の書遺して置いた物に據つて察する事が出来る。是等の記録の中には、單にエリザベスの爲人ひととなりを瞥見させるばかりでなく、時としては短い文句の中に、此の女王の性情を活躍させてゐるやうなものもある。今女王としてのエリザベスを見る前に、先づ一應只の女としてのエリザベスを調べて見る必要がある。

エリザベスは、父ヘンリー八世の遺傳を受けて、勇猛な精神を有し、果斷な資質を持つてゐたが、狐のやうに狡猾な所までも、八世酷似モウクであつたと言はれて居る。父八世は女の關係では歴史上極めて有名な王で、或る一部の歴史家には、色情狂でももあるやうにいはれてゐたものである。兎に角其の一代は種々の戀物語で充ちて居た。併し其の平生の行動は、頗る賢明で、理性的で、決して情の爲に國家の大事を誤るやうな人物でなかつたことは確かである。彼れは決して放埒な人ではなかつた。

エリザベス女王も、父のヘンリー八世と同じやうに、異性に對する關係では、随分種々の惡評を受けて居る。例へば、女王がまだ少女時代に、いつも其の側役そばやくのトマス・シーモア卿



エリザベス女王

を相手にして戯けて居たといふ奇な話が傳へられて居る。エリザベスが此のシーモアを相手にして、其の化粧部屋で演出した種々の戯れが、後には公の沙汰になつて、嚴重な調査の材料にまでなつたのであつた。けれども此の時、エリザベスはまだ十六歳にも満たなかつた少女であり、シーモアは遙かにエリザベスよりも年長であつた上に、王女の室へ入る場合には、いつも妻と一緒にあつたといふ事が明かになつた。が、更に立入つて穿鑿して見ぬうちは、どうとも決せられかねた。

間もなくエリザベスの弟エドワード王が崩じて、後に「殘忍なメリー」と言はれた姉のメリーが王位に即いた。エリザベスはメリーが位に在る間は、其の大膽な氣象を少しも顯はさず、表面は何處までも内氣な、無邪氣い處女のやうな風を装つて居た。其の身邊には種々な敵人が、彼女を係蹄に掛けよう／＼として、手ぐすねを引いて居たのだが、彼女は容易に其の手に乗るやうな女ではなかつた。内心に大望は有りながらも、彼女は決して黨與を結ばうとするやうな影さへも見せず、いかにも柔和に、いかにも謙遜にもてなしてゐる。其の態度は、實に類の無い程のものであつた。姉メリー女王の噂をする場合などは、最も

鄭重に有らゆる敬語を用ひて語るのが常であつた。かうしてエリザベスは巧みに其の性格を韜晦して、チュードア家の血統に具はつてゐた有爲果敢の氣は、露ばかりも見せなかつたのである。

が、愈々姉のメリーに代つて王位を繼承する段になつて、エリザベスは忽然として豹變し、全く別人のやうになつた。謙遜も、卑下も、謹慎も、何處へか影を潛め、一旦激したりといふと、殆んど節制といふ事を知らない人間のやうに、怒りに任せて、罵倒もすれば、打擲もする短慮性急の人となつた。けれども國民は概して餘り深く女王の行動を咎めなかつた、といふのは、此等の女王の振舞は、豪放なヘンリー八世の既に屢々行つたところで、つまりは其の遺傳なのだから、止むを得ない弱點であると思つたのである。で、たまたま女王を非難する者があつたとしても、それは要するに一部の非難たるに過ぎなかつた。殘忍なメリー女王に比べれば、エリザベスの方が遙かに善良な女王であると大多數の國民は思つてゐたのである。

(五)

エリザベスの一生の行動は、不思議に誤解されて來た。今若し其の真相を見ようとすれば、我々は先づ此の女王の活動の範圍が、頗る廣大であつた事、其の治世の年月の永かつた事、又其の時代は、決して平穩無事なものではなく、無数の事件が重疊して群り起つて、何れも派手な、鮮かな色彩を呈して居た、といふ事に心を留めなくてはならぬ。エリザベスの生涯は殆んど一世紀の四分の三にも互つて居たのだから、其の間に、女王の左右に出没した多くの男女の中には、女王が寵用したものもあれば、擯斥したものもある。女王の特別な恩寵を蒙つた者は、女王のために喜んで命をも棄てた。長い年月の間には、女王自身には變化はなくとも、其の周圍には絶えず變化があつた。七十年の間には、戦争もあれば、平和もあつた。朝廷の花といはれてゐた若い武人は、一たび戦地へ行つて、再び歸らない人となつた。老大臣等が獻する忠言も、採用されたのもあれば、全然棄て、顧みられなかつた

のもあつた。といふやうな風で、女王が一代の間には、様々な男女が其の身邊に出没して居たのだが、またそれらに對して、彼女が多少の特寵を與へたり、又は與へようとしたことは事實であるが、併しそれは同時の事でもなければ、短日月の間の事でもない。だから俗説にいふやうな浮氣者と女王を見るのは間違ひである。

要するに、エリザベス女王の性格は、無遠慮や痴情や賢明や放佚や取締りのない空想や浮いた巫山戯た心の錯綜した、不思議な、複雑な性格であつたのである。政治上でも、エリザベスは屢々國民を欺いたこともあり、又否應なしに苛税を課したやうな事もあつたが、それは寧ろ只時々起る發作のやうなもので、全體からいふと、彼女が國家を愛するの念は、終始一貫して溢らなかつたのである。人民もまた之を認めてゐた。で、女王が折々に演じ出す種々の痴態や惡政は、幸ひにして一時の出來心と軽く見られて、一般の人氣には障らなかつた。國民の多數は、始終賢明な女王として、彼女に悦服してゐた。假令女王が寢衣のまゝで踊りを踊つたといふ風説が立つても、都に遠い田舎の農民や郷士に取つては、それは何の關係もないことであつた。

蓋し地方の農民らは、宮廷の生活といへば、恰も繪で見るとやうな理想的のものと思つて居た。直接に彼等の身上に降りかゝつて來る問題といつては、只もう國家の平和と繁榮とのみであつた。法律が公平に行はれて、正義が一般に認められて、英吉利の國土が、西班牙や佛蘭西などの侵略を蒙る事なしに、無事に、永遠に、泰平を樂しんで行く事が出來さへすれば、假令女王の日常生活が理想的でなかつたらうと、彼等は必しも之を問題にしようとはしなかつたであらう。

けれども、永い間には、エリザベスの性格も徐々に變化して行つたと共に、英國の事情も時と共に推移つて行つた。其の治世の初年には、國內の民心もまだ統一せられず、其の一部には、隨分女王に對して敵意を挾む者も多かつた。此の間に、内には野心を抱く多くの男が、巧みに女王の弱點に覬^{ねが}ひ寄つて、女王を危険な淵へ誘^{おび}き導かうと試みた。又外には、大陸の列強が争つて英國と同盟を結ぼうといひ、或は其の甘心を求め、或は紛争の渦中に引入れて、一舉に粉碎しようとするさへも脅かした。斯ういふ誘惑や襲撃の中に立つて、此の一介の處女王が、さながら無數の水雷の間を航走する商船のやうに、數知れぬ危険を

無事に潛り抜けて、何十年といふ間、立派に其の地位を保持して行つたのは、眞に一奇蹟とも言ふべき事實であつた。

が、彼女は如何して此の危険を切抜けたか？ それは、彼女の大膽な精神、着々として計畫を實行して行く態度、それから又其の身が女であるといふ事情等が、専ら女王の成功を助けたのであつた。中にも女王が最も巧みに用ひたのは、最後の武器であつた。其の身は女である、一人では立てない女の身である、是非とも夫を持つて、王子を擧げなくてはならない身の上であるといふ事情を利用して、或は結婚の約束をして見たり、或は結婚の申込を拒絶して見たり、時には約束もせず、拒絶もせずに、たゞ便々と釣つて置いたり、擒縦自在の手練手管を用ひて、巧みに其の周圍に集まつて来る男子共を籠絡し、最早危険の懼れない所へ行くと、不意に引外しては逃げてしまふ、といふのが、其の奥の手であつた。

さうかうして居る中に、一千五百八十三年となつた。エリザベスも既に五十歳の阪を越えた、流石に最早戀沙汰もなくなり、掛引も手管も要らない時になつて來た。女王は從來丁抹に對しては瑞典を操縦し、西班牙に對しては佛蘭西を利用し、尙ほ其の他の諸國に對

しては塊地利の太公を使嗾したり、又國內に對しては貴族等をして互に相制せしめたりして來た。けれども今や暫く身心を休めて、經上つて來た國際上の高い地位からして、靜かに國家の安泰な有様を見下す事が出来るやうな境涯になつたのである。

此の間、女王が幾分でも心を留めたと思はれる男は、可也澤山あつた。例へば女王はサー・ウォルター・ローリーを亞米利加の殖民地へやりともながつた。亞米利加へ行つて來る間、此の男を自分の傍から離すに忍びなかつたのである。女王は又エッセクス伯に對しても、熱中してゐたことがあつた。併し女王が最後にエッセクスの死刑宣告書に署名したのは、エッセクスが其の頃おひく女王を凌ぎかねないやうな權力を揮ふやうになつたからで、こゝにも政治的利害が關聯してゐる。

サー・ウォルター・スコットの名作「ケニルワース」を讀んだ讀者は、レスター伯ロバート・ダッドリーに對するエリザベス女王の戀が、此の作者の靈筆によつて、如何にも活々と描き出されて居るのを記憶するであらう。此の一篇の中で、スコットは殆ど他の諸篇に見られない程の心理的描寫を施して居る。其の中にはエリザベス女王が、二人の情人に對して、

同様な愛情を注がうとして、苦心して居る有様が、如何にもよく寫されて居る。けれども其の一人なるエッセクス伯は、結局女王の寵を維つたぐ事が出来なかつた。といふのは、他の一方のレスター伯の如くに、此の氣むづかしい女王を、最後まで飽かせない、纖こまかな情味を缺いて居たからであつた。

エリザベス女王が其の身邊に近づけた多くの嬖臣の中でも、取別けて深い寵愛を蒙つたのは、レスター伯であつた。エリザベスが眞にレスター伯を愛して居たといふ事を證據立てるに足る一の興味ある事實が傳へられて居る。エリザベス女王の父ヘンリー八世は、前にもいつた通り、多妻主義實行者であつたのだが、女王は此の點に於ても、敢て父に譲らなかつた。エリザベスは、平生、多くの男を左右に置かなくては居られない婦人であつた。そして始終其等の男の愛嬌あいきやう髪を弄んだり、其の厭いとげる媚こびを受けたりして、纔かに飽くことなき慾望を充たして居た。で、外から見た所では、其の多くの寵臣の中で、果して誰れが女王の愛を擅たまにして居るのか、一寸判別みけられなかつた。が、たゞ當代の一史家は、敏捷すばやくも巧うまい所へ目を着けて、かう言つて居る。「女王は、誰れにでも、折々は多少の權力を附與し

なければ、たゞレスターばかりは例外であつた」。

如何にも、セシルやウォルシンガムには、折々政府の樞要な地位を與へ、エッセクスやローリーには、又屢々戰場に於ける統帥の權を委ねたが、レスターに對しては、未だ曾て將軍の印綬を授けた事もなければ、國政の樞機に携はらせた事もなかつた。といふのは、女王は他の何人よりも深くレスターを愛して居たからである。女王は自らレスターに對する自己の愛情の深い事を知つて居た所から、若し自分がレスターに充分の愛を注いだ上に、更に主權の一部をも與へるやうであつたら、自分は早晚、絶對の權力を握つて居る事が出来なくなつて、終には彼れと結婚するか、結婚しないまでも、男の思ふがまゝに支配されて行くやうな事になるだらうと思つたからである。こゝにも政治的利害の關聯してゐるのが見える。

かうして政略のために、一切の情を犠牲にした、此の女王の胸の中にも、時には女らしい感情の滲にみ出したこともあつたであらう。曾て何かの機會はつみに、其の政敵メリー・スチュアートの事に話が進んだ時、女王は

「蘇國の女王には可愛らしい子があるけれど、わたしには實は結ばない！」
と言つたと傳へられてゐる。

晩年の女王が、其の七十年の、多事な、華やかな生涯を振り返つた時、これが恐らく其の心の奥底から溢れ出した真情の聲であつたらう。

青春の戀と惑溺の戀

—ジュリエットとクレオパトラ—

(一)

我が心中文學を説く者が、先づ指を近松に屈するやうに、英文學に於ける戀愛悲劇の代表作はといつたら、誰しも大沙翁だいシャウキョウの二大悲劇を真先に數へずには居まい。英のエリザベス時代は、我が邦でいへば元祿時代である。此の二つの時代の比較、此の兩時代を代表する二人の劇詩人——近松ちかまと沙翁シャウキョウ——の不思議な類似などに就いては、他日機を見て別にお話することにした。只一言すれば、此の二つは、それ／＼に、其の國民の文化生活の高潮に達した時期である。そして全く相異つた二つの文化の契合點を示すものが、此の二人の劇詩人である。

さて沙翁シャウキョウの二つの戀愛悲劇——「ロミオとジュリエット」と「アントニーとクレオパト

ラ——に就いて、特に面白いと思ふのは、此の二作が、互に異つた時期を劃して、戀愛悲劇の二つの形式を見せて居ることである。丁度あの「ミッドサマー・ナイト・ドリーム眞夏の夜の夢」と「テムペスト」が、同じく夢幻劇の二つの種類を示して居るやうに「ロミオとジュリエット」と「アントニーとクレオパトラ」との間には、其の創作年代の上からいつても、大約十五六年の間隔を置いて、一つは若い天才の頭に映じた夢のやうな戀の悲哀を描き、一つは老熟期の詩人に深い興味を覚えしめた複雑な戀の享樂を描いて居る。詩人コールリッジが評したやうに、一つは情愛と本能から發した戀、一つは色情と肉慾に原づいた戀である。古來幾多の青年男女が、ロミオとジュリエットの青春の戀に、胸の鼓動を合せたであらうか？ 然かもアントニーとクレオパトラの強烈な耽溺の戀に、共鳴を感じた者は、更にそれよりも少くはなかつたらう。

(II)

ロミオとジュリエットの戀は、最初から呪はれた戀であつた。

二人の男女は、同じヴェロナに住みながら、家と家との確執なかつたがひのために、互に顔を見合ふ折もなかつた。ロミオは此の市の名家モンタギュー家の嫡子、ジュリエットはキャピレット家の一人娘であつた。兩家の確執は多年に亘つて、其の一族郎黨が、街上に血を流すことも珍らしくはなかつた。

劇の初めに、ロミオは失戀の悶えを胸に抱いて、鬱々として日を送つて居る。それは「言寄る語ことばに圍まれても、戀する眼に襲はれても、いつかな心を動かさぬ女」、ダイヤナ(月の女神)のやうに美しく、且つ冷かな女であつた。若い戀人の心は、一圖に無情い人を思ひ詰めて、まるで魂の抜けたやうに、終日居間に籠り、うつらうつらと物思ひに耽つて居る。従弟いとこのベンザリオが、伯父おぢのモンタギューの頼みを受けて、ロミオの煩悶の原因を尋ね、「其の女を忘れなさい！」と忠告する。

「どうしたら忘れられる？」

「目に新しい毒を染ませて、舊い毒を殺したがい。ちと餘所の美人でも見るさ！」

「目がつれぶれても、昔見た目の實は忘れない。どんな拔群な美人を見せられても、それは只其の拔群な美をも抜く拔群な美人を思ひ出させるに過ぎない」とロミオを容易に心を動かさなかつた。

併しロミオの目は直きに新しい毒に染みてしまつた。「右の目にも、左の目にも、只一人の女を懸較べて居た時には、美しくうも見えた」ロザリン（女の名）が、「ジュリエットの側へ立つと、もう「白鳩に交る鴉」のやうにしか見えなかつた。

それはキャピュレット家の夜會の折であつた。此の時ジュリエットは、やう／＼十四の春を迎へて、其の艶麗な容姿は、輝く燭火に光を添へるばかりであつた。ヴェロナの領主の親族に當るパリスといふ貴公子が、早くもジュリエットの姿に心を引かれて、婚を求める。今宵の會は一つにはジュリエットとパリスとの見合ひの會でもあつた。

キャピュレット家の大廣間では、晝を欺く燭火の光の下で、無數の男女が入交つて、假裝舞踏が始まつて居る。ロザリンを始め、ヴェロナ中の美人は、一堂の中に集つてそれ／＼に假面を被つた假裝の青年と、蜜のやうな囁きを交はして居る。ベンチリオに唆かれられて

巡禮の假裝に、鉛のやうな心を包んで、此の夜會へ引張つて來られたロミオは、片隅に立つて、踊り狂ふ男女の群に目をやつて居たが、ふと、其の時、一人の武官ナイトと手を取つて、踊り始めた少女の姿が目に入るや否や、彼れの心は、不意に大きな手で掴まれたやうな氣がした。

「あゝ、おれは今までに戀をしたか？ おゝ、眼よ、せなんだと誓言せい？ 今夜といふ今夜までは、眞の美人を見なかつた。」と彼れは思はず獨語した。

此の時、扉口ドアーに立つてゐた、キャピュレット夫人の甥に當る、チャバルトといふ血氣の若武者が、ふとロミオの不用意の獨語を耳に挿はさんだ。

「あの聲音は、モンタギュー家の奴やつに相違ない。道化面だうけめんで面かほを隠して、よくも此の祝典を荒らしに來た！な」

といふや否や、家來を呼んで、自分の劔を持つて來させた。側にゐたキャピュレットは、血相變けつさうかへて舞踏室へ跳込んで行かうとする甥の様子を見て、驚いて引留めた。

「はて、甥よ、何をしたんだ？」とキャピュレットは小聲で尋ねた「何でそのやうに息巻いきまきくの

だ？」

「叔父さん、あれは敵のモンギューです。」とチャバルトは答へた。「彼奴は今宵の祝典を辱めるつもりで來たに相違ありません。」

「若いロミオではないか？」

「然うです、ロミオの奴です。」

「まあ、我慢して、見のがして置きなさい。」とキャビュレットは穏やかに言つた。「立派な紳士らしい態度を取つてをるし、それに實を言へば、ヴェロナが徳もあり、品行もよい若者と誇つてゐるロミオだ。全市の富に易へても、此の家の中で危害を加へたくない。だからじつと辛抱して、知らぬ振をしてゐなさい——予の頼みだ、予にめんじて、顔色を直して呉れ、そんなむづかしい顔をやめて貰はう。」

「でも叔父さん、此の耻辱を我慢してゐられますか？」とチャバルトは身を顛はせて言つた。

「これさ——」とキャビュレットはやゝ聲を荒らげて甥を制した。「この主人は乃公ではな

いか？ 乃公の命令を聽かないのか？ 向不見にも程がある！ さゝ靜かにせい、是非靜かにして貰はう。」

叔父の制止に遇つて、猪武者のチャバルトも、不承不承に引退つた。けれども生來の疴癩でぶる／＼と身を顛はせながら、ロミオの方をじつと睨めつけて、

「此のお禮は屹度するから、覚えてゐろ！」

と泣きながら、忌々しさうに室外へ出て行つた。

こんな危険が自分の身邊に迫つてゐようとは、夢にも知らずに、ロミオは舞踏の濟むのを待つて、巡禮姿のまゝで、少女に近づいて行つた。そして其の前に跪いて、恭々しく少女の手を取つた。

「此の賤しい手で尊い御堂を汚したのが、罪ならば、此唇の接觸で、滑かに淨めませう。」

「聖者がたにも御手はある、其の御手に觸れるのが、巡禮の接吻禮とやら。」

「でも聖者にも唇があり、巡禮にも唇がございます。」

「だが、それはお祈願に用ゐるもの。」

「おゝ、それでは我が聖者よ、手のすることを唇にもさせて下さい。唇が祈ります。」
斯うした問答の間に、二人はだん／＼と群衆から離れて行つたが、此の時ロミオはつと寄つて、少女に接吻した。相手も否まずにそれを受ける。

二人の接近は、乳母の探しに來たゝめに妨げられた。ロミオは乳母の口から始めて此の少女の素性を聞いて、はつと思つた。

「キャピュレットの女か？」と彼れは思はず叫んだ。「おゝ怖ろしい番狂はせだ！ おれの命は、こりやもう敵からの借物だ。」

此の時客はもう思ひ／＼に歸りかけた。ロミオもベンチリオに促されて、ふら／＼と廣間を出た。

ジュリエットは乳母と一しよに後に残つて、出て行く客人を見送りながら、最初はわざと他の人の事などを問うてゐたが、終ひにあの巡禮姿の若者は、モンタギュー家のロミオだと分つた時には、絶望の色は包むことも出來なかつた。

「あさましい因果な戀だ！」とジュリエットは胸の中で呟いた。「憎い／＼敵を可愛いと思は

ねばならぬとは！」

(III)

舞踏會が濟んで、ぞろ／＼とキャピュレット家の門を出て來る人々に交つて、ロミオもふらふらと門外へ出たことは出たが、魂はまだジュリエットの側を離れなかつた。彼れは一緒に來た友達を振棄て、キャピュレット家の庭園に沿つた小逕を駆け抜けると、猿のやうに、高い石垣を乗越えて、再び庭内へ入つて行つた。

其の時二階の窓が、ぱつと明いて、思ひがけないジュリエットの姿が、バルコニーへ現れた。折しも照り渡る夏の夜の月の光を全身に浴びて、ジュリエットは純白な繻子の夜會服のまま、少時は空を仰いで、掌を頬へあて、物思はしげに立つて居たが、庭の木立の茂みに聞く人のあらうとは思はないので、我れ知らず胸の思ひを洩らす聲が、靜かな夜の空氣を渡つて、戀人の鋭い耳へ、はつきりと聞き取れる。

「お、ロミオ、ロミオ！ 何でお前はロミオなの？ 敵といふのは、お前の名前ばかりだ。モンタギューが何か？ 手でも、足でも、腕でも、面でもない、人の身に附いた物ではない。其の名前をかへたがい、名が何か？ 薔薇といふ花は、他の名でも、佳い香がする。ロミオとても其の通り、ロミオと呼ばなくも、名は棄てても、本來の貴い徳は残るだらう。……ロミオさま、自分の有でもない名を棄て、其の代りに此のわたしを取つて下さい。」

「お、取りませう」と言つてロミオは思はず身を進めた。「只一言戀人だと言つて下さい。直にも新規な洗禮を受けませう。今日からはもうロミオでない！」

ジュリエットは驚いて身を退いたが、直ぐに其の聲でロミオだと知つた。同時に戀人の心には、先づ戀人の安危が氣遣はれた。

「お前の身分を思へば、若し家の者に見つかれば、立地に命がないのに。」

「幸ひと夜の衣を被てゐるゆる、見附けらるゝことではない。とはいへ其方に愛せられぬ程ならば、立地に見附けられ、憎まれて殺されたい。」

「誰れの案内で此處へはござつた？」

「戀が案内だ、尋ねて見いと眞先に勧めたのも戀なれば、知慧を借したのも戀、目を借したのも戀、私は舵取ではないけれども、此の様な財貨を得るためなら、千里萬里の荒海の其の先の濱へでも冒険します。」

「夜といふ假面を附けたればこそ、さもなければ、恥かしくて、此の頬が紅のやうに赧くならう、今宵わたしの言つたことをつひお前に聴かれたので。……お、ロミオさま、本當にわたしを愛して下さるなら、只ありのまゝに言つて下さい。」

胸の祕密を聞かれなかつたら、まだ少しは餘所々々しい素振を見せることも出来たらう。併し聞かれた上は、もうどうも仕様はない。

「斯う早く靡いたのを浮氣ゆると思つて下さるな。……夜の闇に油断して、つひ下心を知られたのだ。……戀しいお人、さらば！ 此の戀の杏は皐月の風に育てられて、又逢ふまでに花と咲かう、さようなら〜！」

ジュリエットは乳母に呼び立てられて、一寸奥へ入つたが、直きに又姿を現した。

「ロミオさま、もう三言だけ、それで今宵は別れませう。これ、お前の心に虚偽がないな

ら、明日都合して使者を上げますから、何時何處で式を擧げるといふ返辭をして下さい。すればわたしの一生の運命をお前の足下に投出して、世界の果てまでも良人のお前について行かう。」

又呼ばれてジュリエットは奥へ入つたが、三度目にバルコニーへ現れて、行きかけたロミオの後から、竊と口笛を鳴らして、

「ロミオ！」と呼ぶ。

戀人の鋭い感覺には、どんな囁をも聞落すことはない。

「や、おれの名を呼ぶのは戀人だ。あゝ、戀人の夜の聲音は、白銀の鈴のやうにやさしくて聞けば聞くほどなつかしい！」

「ロミオ！」

「戀人か？」

「明日何時頃に使をあげよう？」

「九時に。」

「あゝそれまでが二十年だ。ま、忘れた、何でお前を呼返したやら。」

「思ひ出すまで、斯うして此處に立つてゐよう。」

「さうしてゐて欲しいから、わたしは尙と忘れよう、一しよにゐたさばかり忘れないで。」

「そして私はいつまでも斯うして此處に立つてゐよう、お前にも忘れさせ、自分でも此家の外を皆忘れて。」

「もう夜が明ける。もうこれでおさらばだ。さようなら！ あゝ別れといふものは悲し懐しいものだ。夜が明けるまで、斯うしてさよならを言つてゐたい。」

二人は斯うしてバルコニーの上と下に立ち盡して、互に別れを惜んだが、東の空の白んで行くのに急ぎ立てられて、とう／＼内と外とへ立別れた。

(四)

ロミオはキャピュレットの邸を出ると、直ぐ其の足で、豫てから兩家に縁故のあるフランシ

ス派の老僧ローレンス法師の庵室を訪れて、ジュリエットとの婚禮の助力を頼んだ。

自然界の有らゆる秘密に通じたといはれる此の老僧も、失戀の底から忽ち有頂天な戀の歡喜に移つた、若いロミオの心の變化を、驚かすにはゐられなかつた。

「あれ程に戀ひ焦れてゐたロザリンを、最早棄て、しまひなすつたか？」とローレンスはロミオの顔を眺めて言つた。「若い手合の戀は、其心には宿らずに、眼の中に宿ると見える。」

「あなたはロザリンに戀するなと、幾たびも叱つたではないか？」とロミオが言返した。

「戀すなではない、溺るなと言つたのだ。」

「そして戀を葬れと被言つた。」

「前のを墓に葬つて、別のを掘出せとは言はなかつた。」

「もう叱らないで下さい」とロミオは憐みを乞ふやうに言つた。「今度の女は、此方で思へば、彼方でも思ひ、此方で慕へば、彼方でも慕ふ。以前のは然うでなかつた。」

老僧は此の青年の火のやうな熱情が、どうかすると、自分から其の身を焦がす焰となることを見抜いてゐた。彼れは悲愁の底から歡喜の絶頂に躍り上つたロミオの心の變化を驚

くよりも、其の熱情がやがて身を滅ぼすやうになりはしまいかと心配した。

「過激な歡樂は、兎角過激な終りを遂げる。」と老僧は青年の極端から極端に奔る性質を誡めた。「火と煙硝とが抱合へば、忽ち爆發するやうに、勝誇つた最中に滅びてしまふ。上なく甘い蜂蜜は旨過ぎて厭らしく、食うて見よう氣も鈍る。戀も程よく、程よい戀は長く續く、速きに過ぐるは、猶遅きに過ぐるが如しだ。」

聖者の誠めも、熱狂した戀人の耳には入らない。併し前々から兩家の不和に心を惱ましてゐたローレンスの胸には、此の時ふと一道の光が射した。此の縁組が原で、兩家の和睦が成立つまいものでもない！

法師は此の婚禮に力を借さうと承引した。そして其の日の午後、乳母の計らひで、ジュリエットとロミオは、ローレンスの庵室で出會つて、秘密に結婚の式を済ました。

其の日は若い血を騒がせるやうな暑い日であつた。ペンテリオは、ロミオの親友でマアキュシオといふ領主の親族の貴公子と、昨夜の夜會の事を話しながら、ヴェロナの街上を歩いてゐた。ロミオが昨夜はとうとう家へ歸らなかつたこと、チャパルトが今朝ロミオの父

へ書面を送つて、ロミオに決闘を申込んだこと、なぞを話合つて、頻りに親友の身の上を氣遣つてゐる。

「あの様子では、狂人にもなりかねまい」と一人が言ふと、

「然うだ、あの抜殻のやうなロミオの有様では、チツバルトと立合つたら、一突で參つてしまふであらう」と一人が言ふ。「あのチツバルトは昔話の猫王とは違つて、武士道の式作法に精通した決闘師の嫡々だ。」

こんな噂をして歩いてゐるうちに、正午が過ぎて、日はいよ／＼暑くなつた。

「マアキニシオ、もう歸らぬ」とベンチリオが言出した。「暑くはあり、キャピレット家の奴等が出歩いてゐる。出會したが最後、喧嘩をせねばなるまい。かういふ暑い日には、えて氣ちがひめいた血が騒ぐものだ。」

マアキニシオは此の老人めいた注意を聞いて、げら／＼と笑ひ出した。

「君は伊太利中で誰れにも負を取らない怒り蟲だ」とマアキニシオは冷笑すやうに言つた。

「いや、君のやうなのが二人とゐたら、直に殺し合つてしまふから、二人ともゐなくなる

だらうよ。君なぞは髭の毛一筋の多い少いが原でも叩き合ふ、街中で咳をして、君の飼犬の日向ぼつこを驚かしたといつては、喧嘩をする、復活祭前に新調の胴衣を着たといつては、裁縫師と掴み合ふ、新しい靴に古い紐を附けたといつては、睚み合ふやうな男だ。それでゐておれに喧嘩をするなどといつて意見するとは何だ！」

「おれが君ほど喧嘩早けりやア」とベンチリオがやり返す。「無條件で此の命を一時間位賣つてやる。」

こんな風いつもの駄洒落を聞はしながらも、何となく苛々した氣分で歩いゐると、折悪しく今も噂の出たチツバルトを先に、キャピレット黨の連中がやつて來た。

チツバルトは昨夜の事で氣が立つてゐるので、ロミオの友達と見れば、黙つては通さな

い。「やア、兩君、御機嫌よう」とチツバルトは進み寄つて挑みかゝる。「一言いふ事がある。」マアキニシオも賣られた喧嘩を買はないやうな男ではない。

「一言でいゝのか？」と冷笑しにかゝつた。「おい、何か添へるものはないのか、一言と一

「撃」とか何とか？」

「いつでも相手にならう」とチツバルトはマアキュシオの顔を睨めつけながら言った。「機会さへ作れば。」

「こつちから作らなければ、機会が見つからないのか？」とマアキュシオは冷かした。

「マアキュシオ、君はロミオと調子を合せて——」と言ひかけて、一寸つかへる。

「調子を合せる！」とマアキュシオが引取つて言った。「おれを樂人扱ひにするのか？ よし我々を樂人扱ひにするなら、貴様の耳の中を顛倒させるやうな音楽を聞かせてやらう」といひながらも劔へ手を掛けて、「おれの胡弓はこれだ、貴様を踊らせて見せるぞ。」

傍ではらくしてゐたベンチリオは、二人の間へ割つて入つて、

「まア〜此處は往來だから」

と言つて引分けようとしたが、中々納まらない。

其處へロミオが、丁度ジュリエットとの結婚式をすませて、いそ〜と庵室から歸つて來た。チツバルトはロミオの姿を見かけると、急にマアキュシオを振棄て、

「君とは和睦だ、あそこへ奴が來た。」

と言ひながら、ロミオの方へ向つて行つた。

「ロミオ」とチツバルトは火のやうになつて呼びかけた「貴様は惡黨だ！」

「チツバルト」とロミオが受け流して、穩かに答へた。「君を愛する仔細があつて、怒らねばならぬその挨拶をも悪くは取らない。おれは何も悪いことはしない。だからこれでお別れた。君はおれを知らないから、そんなことをいふのだ。」

かう言つてロミオは何氣なく行きかけた。ロミオの胸は新しい戀の喜びに充ちてゐた。それにチツバルトはジュリエットの近親として、愛しこそすれ、こちらから憎むべき理由は少しもなかつたので、力めて争ひを避けようとしたのである。けれども相手はそんなことは夢にも知る筈がないので、

「小僧め！」とあわてゝ呼留めた。「それが無禮の言譯にはならないぞ。さア、戻つて、拔け！」

「おれは君に無禮をした覚えはない」とロミオは飽くまでも相手にならない。「それどころ

か、おれは君の思ひがけない位に君を愛してゐる理由があるのだ。だから、キャピュレット
まア〜堪忍して貰はう。」

此の問答を聞きながら、ロミオの柔弱い返答に切齒をしてゐたマアキュシオは、とう〜
辛抱がしきれなくなつて、いきなり劔を抜いて、チャバルトに挑みかゝつた。チャバルトも
かうなつては抜き合さない譯にはゆかなかつた。二人の切合ふのを見て、ロミオはベンチ
リオを振返つて言つた。

「抜け、ベンチリオ、二人の武器を叩き落して呉れ」と叫びながら、自分でも劔を抜いて、
二人の間へ分け入つた。「これ〜お互の恥になる。亂暴をしてはいけない！ チャバルト、
マアキュシオ、領主の嚴命ではないか、ヴェロナの街で闘つてはならぬ筈だ。これさ、チャバ
ルト！ マアキュシオ！」
と言ひながら、雙方の武器を叩き伏せようとした。

其の隙を覘つて、ロミオの腕の下から、電光のやうに突出したチャバルトの劔で、マアキ
ュシオは深傷を負つて、ベンチリオの腕へ倒れかゝつた。それを見て、チャバルトは仲間と一
しよに其の場を去つた。

マアキュシオは、ベンチリオに介抱されて、近所の人家へ入つたが、安心すると其のまゝ
落命した。

其處へヴェロナの市民に追はれながら、取つて返して來たチャバルトの姿を見ると、親友
を殺された忿怒に燃え立つたロミオは、もう禮儀も、寛容の心も投げ棄て、電光の如く
切りかゝつて、一刀の下にマアキュシオの讎を復した。

此の時分にはもう市民が騒ぎ立て、八方から現場をさして駆けつけて來た。此の様子
を見たベンチリオは、ロミオを急ぎ立て、其の場を外させてしまつた。其の後へ群衆に
交つて、ヴェロナの領主とキャピュレット、モンタギュー兩夫婦も駆けつけて來た。

ベンチリオの陳述を聞取つて、ヴェロナの領主は、ロミオに對して即刻追放の宣告を與
へた。

(五)

ロミオと秘密の結婚を済まして、庵室から歸つたジュリエットは、そわ／＼と庭を歩きながら、ひとりで夢のやうな歡びに耽つてゐた。其の夜ロミオは繩梯子をたよりに、ジュリエットの室へ忍ぶ約束になつてゐた。ジュリエットは其の刹那の歡喜を胸に描いて、時の進みももどかしかつた。

「夜よ、來れ、速く來よ、ロミオ」とジュリエットは胸の中で叫んだ。「あゝ、夜の晝とはお前の事だ。夜の翼に降りたお前は、鴉の背に今降りかゝる其の雪よりも白からう。速く來よ、やさしい、懐しい、夜の闇、さ、わたしのロミオをお呉れ。ロミオが死んだら、死骸はお前にやらうから、細截いで星におし、すれば大空が見かへるほどに美しくならう。世界中の者が夜に惚れて、あの爛々した太陽を最早誰れも拜むまい。戀の屋敷は買うたが、自身に住居にはまだならぬ。身は人に賣つたけれど、まだ賞翫はしてもらはぬ。えゝ待つ間が

もどかしい、祭日の前の晩に製へて貰つた晴衣はあつても、着ることがならぬので氣をいらつ子供のやうに。」

其の時あわたしく駈寄つて來た乳母のけだゝましい聲で、ジュリエットは忽ち空想の夢から覺めた。

「チツバルトは死んだ、ロミオは追放！」と叫び立てる乳母の言葉を聞いた時のジュリエットの驚きと悲みとはどんなだつたらう。

「あゝ、わたしは思ひを遂げないで、處女のまゝで世を去るのだ」と彼女は叫んだ「さ、乳母、これから婚禮の床へ往かう。ロミオではない、死神よ、お前に此の身を任せよう。」

「速く居間へ行つていらつしやい」と乳母は慰め顔に言つた。「ロミオを捜して來て喜ばせてあげませう！ 居處はわたしが知つてゐる。」

「おゝ、速く捜して、訣別れに來るやうにと傳へておくれ」と言ひながら、ジュリエットは指輪を抜いて乳母の手に渡して、ロミオへの使に出してやつた。

其の夜乳母の計らひで、闇にまぎれて、ジュリエットの室へ忍んだロミオは、曉を告げる雲雀の聲に驚いて立上つた。夜が明けて、人の目に附いたら、命はない。只一夜を隔てただけで、此の二度目の別離は、前夜の別離とは、まるで様子が變つてゐた。戀人の別離の辛さは、前も今も變りはないが、それでも前の時には、まだ明日の出會の希望が、目の前に輝いてゐたが、今は其の果敢ない希望さへ絶え果てゝ居た。二人の心の底には、これが最後の別離ではないかといふ豫感があつた。

夜の明け離れないうちに、ロミオはヴェロナを立去らなければならなかつた。「ヴェロナの市を離れて世界はない、此處から逐はれるのは、世界から逐はれるのも同じだ」とロミオは思つた。

併しもう夜は明ける。曉を告げる雲雀の聲は、空高く聞えてゐる。二人は今バルコニーに立つて、露に潤つたキャピュレット家の庭園を見下してゐる。東雲の空には、曙の色がもう紅の横縞を染め出した。

「逝うとや？ 夜はまだ明けぬのに」とジュリエットは放しともないやうに言つた。「びくび

くしてゐるお前の耳に聞えたのは、雲雀ではなくて、ナイチンゲールであつたものを。夜毎に彼處の柘榴へ来て、あのやうに囀つてゐる。今のは屹度ナイチンゲールに相違ない。」

「いや〜」とロミオは首を振つた。「旦を知らず雲雀だ、ナイチンゲールの聲ではない。

あれ、ごらん、意地の悪い横縞が、東の空の雲の裂目に、あのやうな縁を附けてゐるではないか？」

「あの光明は朝ぢやない」とジュリエットは何處までも打消さうとする。「ありや、太陽がお前のために、今宵マンチュアへの道案内に、炬火持の役をさしよとて急に呼出した光り物だから、大丈夫だから、逝かないでね！」

「捕はれうと、死罪にならうと恨はない」とロミオは思ひ定めたやうに言つた。「お前の望なら。あの灰色は朝の眼ではないと言はう、ありや嫦娥の額から照返す白光だ。また頭の上で、大空高う鳴響くあの調べも、雲雀の聲ではないと言はう。逝きたいよりも、此處に居たいのが幾層倍だ。さ、死よ、來れ、喜んで迎へよう！ ジュリエットの所望だ。さ、話さう、朝ではないから。」

「いや朝だ、朝だ。」とジュリエットは急に調子を變へた。「速く逝つて下さい、速く〜！聞きづらい、げだ〜ましい高調子で、調子外れに啼立てるのは、ありや雲雀だ。雲雀の聲は懐しいといふのは嘘、なつかしい人を引分けるのだもの。あゝ、あの聲があればこそ、抱きあつた腕と腕を引離し、朝彦覺す歌聲で、可愛らしいお前を追立てる。おゝ、速く逝つて下さい、だん〜明るくなつて来る。」

戀人の心は二つに分れた。一つはいつまでも、いつまでも放しとれないといふ心、一つは追立て、速く此の地を去らせたいといふ心。ジュリエットはかういふ心の分裂に苦しんだ。二人の目の前には、暗澹たる運命の蔭が擴がつてゐた。明るくなればなるほど、二人の思ひは暗くなつた。

乳母に急ぎ立てられて、二人は終に上と下とへ立別れた。

「あゝ、戀人よ、わが夫よ、戀人よ！」とジュリエットは上から呼んだ。「きつと毎日消息を聞かして下さい。一時も百日なれば、一分も百日だ。おゝ、そのやうに勘定したら、また逢ふまでに、わたしはどんなに齡を取るだらう！」

「さらばだ！」とロミオは下から答へた。「何で消息を怠らう、假にも機會さへあれば？」ジュリエットの心には、ふと不安の蔭がさした。

「おゝ、本當に逢はれるか知ら？」と彼女は思はず絶叫した。

「大丈夫！」とロミオは強ひて言つた。「今の苦勞は、將來の楽しい昔語だ。」

「おゝ、如何しよう！」と言つたジュリエットの聲は顫へてゐた。「目のせいかわからないが、お前の顔が蒼く見える。」

「本當に、予の目にも、お前の顔がさう見える」とロミオも言つた。「悲愁が互ひの血を涸らしたのだ。では、さらばだ！」

全く悲しい別離であつた。二人の戀は只一夜の契りに、其の生命の全部を集注して、これから後は、生きて再び逢ふ機會が來なかつた。

(六)

ロミオとの別離の涙のまだ乾かない間に、ジュリエットは両親からパリスとの結婚を強ひられて、強制的に結婚の日取を一日置いた木曜日と定められてしまった。ジュリエットは思案に盡きて、懺悔のためといひ繕つて、ローレンスの庵室へ相談に行く。ローレンスはロミオのために操を立て、自殺しようといふジュリエットの堅い決心を聞いて、一つの非常手段を授けた。それは水曜日之夜に、人知れず或る強烈な睡眠剤を服用して、死を装へといふのである。此の睡眠剤を用ゐれば、心地よい眠が忽ち全身に擴がつて、脈搏も止まり、呼吸も止み、體温も失せ、顔色も變つて、四十二時の間に醒めることがない。結婚の朝、乳母が起こしに来る頃は、丁度死んだやうになつて居るから、両親も死んだものと思つて、此國の風習に従ひ、晴衣を着せ、柩車に載せて、祖先代々の廟へ送ることになるだらう。其の間にマンチュアへ使をやつて、ロミオを呼び寄せ、其の夜のうちに救ひ出して、マンチュアへ連れて行くことにしようといふのであつた。かう言つて、ローレンスは一つの小さな藥瓶をジュリエットの手に渡した。

計略はうまく運んで、乳母が起しに来た時には、ジュリエットは息が絶えて床の上に冷たく横はつて居た。婚儀のために準備した一切が、役目を變へて葬儀の用になつた。祝ひの樂は、哀しい鐘の音と變り、めでたい盛宴は、法事の饗應、楽しい頌歌は哀れな挽歌、新床に撒く花は、葬る死骸の用に立つ。

かうしてジュリエットはキャピュレット家の廟へ運ばれて行つた。

ローレンスの筋書は、半分程はすら〜と運んだが、後半になつて、思はぬ行違のため狂つてしまつた。それはロミオを迎へるために、密書を授けてマンチュアへ遣した一僧が、同行の僧を求めようと或る家へ立寄つたところが、折から時疫の流行中で、検査がやかましかつたので、二人共傳染病のある家に居たといふ嫌疑を受けて、一時抑留された。それがため大切な用事も果さずして、空しく庵室へ引返した時には、ジュリエットの眠から醒める時刻が、もう三時間のうちに迫つて居た。

ローレンスは大に當惑したが、かう行違つた上は取敢へず姫を廟所から運び出して、庵室へかくまつて置かう、そしてその間にマンチュアへ人をやつて、ロミオを招くことにしようと思つた。

かうした行違ひから、ローレンスの出した書面は、ロミオの手許へ届かなかつたが、ロミオは他の方面から戀人の死んだといふ報告を受取つた。ロミオはヴェロナを立つ時に、バルセーザーといふ一人の僕に、絶えずヴェロナの消息を通じるやうにと命じて置いた。で、バルセーザーはキャピュレット家の悲報を聞くや否や、勿論ジュリエットの死に何の企があらうとも知る筈はないので、直に此の報告を持つてマンチュアへ出立した。

其の日ロミオはいつになく氣が浮き立つて、中々家の中にじつとしてはゐられなかつた。何か故郷からの吉報でも待たれるやうな感がして、街を歩きながら、昨夜の夢の事を考へてゐた。それは自分が死んでゐる所へジュリエットが來て、自分の唇へ接吻して、命の息を吹込んだと思ふと、俄に蘇生つて、帝王になつたといふのであつた。

「夢の告が實ならば、屹度嬉しい消息があるだらう。」とロミオは思つた。そして空想から空想を追つて市の中を彷徨つてゐた。「戀の影法師でさへ此の位嬉しいとすると、戀そのものゝ楽しさは、まアどのやうであらう！」と彼れは頻りに胸を躍らした。

其の時彼方から來かゝつた一人の旅人があつた。ロミオは空想の眼をあげて、ふと見ると、それは今も考へてゐた僕のバルセーザーであつた。

「ヴェロナからの音信だ！」とロミオは胸を躍らして進み寄つた。

「バルセーザー！」と彼れは呼掛けた。「ローレンスさまからの消息はなかつたか？ 姫はどうか？ 父上は御無事か？ ジュリエットはどうしてゐます？ 何よりもそれを聞かう。

姫さへ無事でゐれば、別に心配なことはないから。」

バルセーザーは、近寄つて叮嚀に頭をさげた。

「それならば御心配なことはございませぬ」といふ聲が顫ひを帯びてゐた。「姫さまは御無事であらせられます、お身體はキャピュレット家代々のお廟所に眠つてゐらつしやいます、併し靈魂は天使がたのお側に。わたくしは姫さまが御一族のお廟所へ入られたのを見て、直に驛馬でお知らせに参りました。」

此の思ひがけない凶報に、ロミオは開いた口も閉がらなかつた。破られた心には、最早其の運命を呪ふだけの力も残らなかつた。

「そりや本當か？ 怨めしい運の星よ！」
突詰めたロミオの心では、かう叫ぶだけがやうくであつた。騒々しく瀬音を立てる心の哀愁は、まだ淺い。ロミオの異様な静けさは、一切の望みを失つた淵のやうな心の淀みであつた。

「お前は予の宿を知つてゐるな！」と言つてバルセーザーを見たロミオの顔は蒼かつた。「筆と紙を取つて來い、そして驛馬を備つて貰はう。今宵此處を立つから。」

「どうぞお氣をお静めなすつて下さい！」とバルセーザーが心配さうに言つた。「お顔の色も悪いし、大分氣が立つてゐらつしやる。間違でもあつては取返しがつきません。」

「何の、そんなことがあるものか。」とロミオは軽く打消した。「予にはかまはないで、言付けることをなさい。」

心配さうに別れて行く僕の後を見送つた時、ロミオの決心は定まつてゐた。ジュリエットが死んだ上は、自分も死ぬばかりだ。戀人を先立たせて、一人生きてはゐられない。併しどうして死なう？ 其の時彼れは、ふと、其の邊に一軒の藥種屋のあることを思ひ出した。

そして金に替へて一瓶の劇藥を手に入れて、夜にまぎれてマンチエアを立つた。

ロミオは馬を飛ばしてヴェロナへ歸ると、直にキャピレット家の廟所へ來た。そしてバルセーザーの手から炬火と廟を發く道具を受取ると、父に宛てた一通の遺書を渡して、其の場を遠ざけて置いて、たゞ一人廟の前へ進み寄つた。

其の時、何者とも知れず、闇の中から立現れて、ロミオを取押へようとしたものがあつた。ロミオは抜合はせて、闘つた末、相手を切倒して、炬火の光で顔を檢べると、それは思ひがけないパリスであつた。パリスは戀人を慕ふ心から、今宵も手向けの花を撒きに來たのであつた。

ロミオは「情があるなら、廟をあけて、ジュリエットと一しよに埋めてくれ！」と言つた。パリスの最期の言葉を思ひ出して、其の死骸を抱き上げて、廟の中へ運び込んだ。

其處には忘れる隙のない戀人が、雪のやうな花嫁姿に飾られたまゝ、闇に浮んだ白百合の花のやうに、顔の被ひもなく、棺臺の上に横はつてゐた。ロミオは炬火をかゝげて、戀人の生きたやうな姿にじつと見入つた。

「おゝ戀人よ！ 我が妻よ！ お前の息の蜜を吸ひ盡した死神も、お前の美には勝てなかつたと見えて、見るから鮮かな此の唇、此の兩頬……あゝ、戀しい、懐しいジュリエット、どうして今でもこんなに美しいのか？ 予はもう決して此の闇の館を離れまい。お前の侍女の蛆共と一しよに、いつまでも此處にゐよう。おゝ今此處を永劫安住の地と定めて、憂世に壓き果てた、此の肉體から、薄命の軛を振り落さう！ 眼よ、見よ、これが最後だ！ 腕よ抱け、これが最後だ！」

言ひつゝ、ロミオは戀人の死骸を搔抱きながら、毒藥の瓶を傾けて、臥し重なつたまゝ絶息した。

ローレンスが廟を開かうとして來かゝつたのは、此の時であつた。法師はロミオの從僕からロミオの事を聞いて、胸を躍らして廟内へ進んだが、其の時にはロミオはもうジュリエットの側で縛れて居たので、少時茫然として立つて居ると、ジュリエットは丁度長い昏睡から覺めて、重たげな眼を開き、ローレンスを認めて、嬉しさうに戀人の所在を尋ねるのであつた。此の折しも外の方で多勢の人聲がして、どや〜と此方へ近づいて來る様子なので、法師

は簡単に計畫の破れたこと、ロミオの自殺したことなどを告げて、ジュリエットを廟所から連れ出さうとしたが、ジュリエットは戀人の側を離れようともせず、法師の出て行くのを見送りながら、ロミオの短劍を胸へ突き立て、戀人の上に身を投げ掛けて絶命する。

ヴェロナの領主を始め、不運な戀人らの親達が、急報を聞いて駆けつけて來た時には、陰鬱な夜は白々と明け離れて、物悲げな朝の色が、どんよりと墓地を包んでゐた。

廟の中ではもう何もかも後の祭りであつた。老僧の自白と、從僕の差出したロミオの遺書で、總ての事情が明白になつた。キャピュレット、モンタギュー兩家の確執が産んだ憐れな犠牲のために、兩家の間に久しく蟠まつた憎悪と怨恨とは、一朝に消えて、ヴェロナの市に新しい平和が來た。

(七)

「ロミオとジュリエット」の純潔な戀物語から、「アントニーとクレオパトラ」の感溺の戀

に移ると、銀色に牙え渡つた、夢みるやうな月光の世界から、金色の鶴に罩められた、目の眩めくやうな白日の世界に出たやうな氣がする。「沙翁シエークスピアの史劇中最も驚異すべき作」と讀へられ、「近世文學中の最も豊艶な肉慾描寫の劇詩」と評された此の作こそは、前後十年に亙る「世界的悲劇」を背景とした雄大無比な戀愛悲劇である。そして此の作の驚異は、謂ふまでもなく、英雄アントニーを魅惑し、翻弄した、變幻極りなき妖女王クレオパトラの性格の上に集められて居る。彼等の境遇には、戀の音楽に缺くべからざる有らゆる要素が具はつて居た。男は世界の三分の一を支配する羅馬の主治者であり、女は東方の寶庫と唱へられた埃及エジプトの女王であつた。彼等の境界は殆んど世上の道德を超越した神の境地であつた。自分を絶對の權力者だと信じた彼等は、自分以上に何等の權力をも認めなかつた。其の好惡かうおは至上の道德で、其の意志は絶對の法律であつた。彼等の愛の享樂が、さながら古代神話の神々のやうに、放縱を極めて、何等の束縛をも感じなかつたのも當然である。

アントニーが、オクテヴィヤス・シーザーと、羅馬領を二分して、東部の支配權を掌中に收め、兵を亞細亞アジヤに進めた時、埃及エジプトの女王クレオパトラに使を送つて、シリシヤの地で會見

するやうにといつてやつた。此の時アントニーはもう四十の坂を越えて、生來の放蕩見はもう道樂の限りを盡し、亞細亞に入つてからも、更に酒池肉林の豪興を恣あまにした。

此の時クレオパトラは二十七歳の女盛り、是より十年前に、もう大シーザーを虜こにして、埃及エジプトの王位を全うした程の不思議な魅力を有つた女性であつた。シーザーは初めどうしてもクラオパトラに面會を許さなかつたが、或る日シーザーがアレキサンドリヤの王宮に居ると、數人の奴隸が、何か貴重な寶物でも運んで来るやうな風にして、恭しく一つの細長い包を擔つて、シーザーの前へやつて來た。奴隸どもは「閣下への贈物で御座います」と言つて、其の包をシーザーの前へ置いた。シーザーは敷物か何かの積りで、奴隸に命じて其の包を解せると、豈圖らんや、中から現れたのは、光り輝くばかりに着飾つた花の如き女王クレオパトラであつた。其の夜クレオパトラはシーザーの居室に泊つた。彼女は此の犠牲的行動によつて、自己の國家を全うすると共に、初めて女としての偉大な力を意識したのである。これ以來クレオパトラの評判は、羅馬の全都に知れ渡つた。

アントニーからの召喚を受けた時、クレオパトラは勿論征服の自信を抱いて埃及を出發

した。莊麗を極めた御座船は、徐々とシドナス河を溯つて來た。船は磨き上げた金の椅子のやうに、波の上に輝き渡つた。船尾の高甲板は黄金の延板で掩はれ、帆はどれも悉皆紫緞で、香が薫きしめてあつた。數十本の撓が悉く銀、それが横笛の調べにつれて、ぐいぐいとやるので、浪もつい惚々となるらしく、大急ぎで浪の後を追ふ。其の時クレオパトラは、戀の女神ヴィナスに擬装して、金絲織込の薄絹の天蓋の下で、臥榻に靠れかゝつて居たが、空想の力造化を壓する畫中のヴィナスよりも數層倍の美しさ。其の左右には、黥を見せて笑つて居るキュービッドのやうな可憐な美少年が、五色の扇子でもつて頻りに煽ぎ立てる。一旦熱を冷された豊頬が、更に又上氣して、一種の美しい光澤を生じた。水の女神のやうな侍女連は、人魚の假裝をして侍つてゐて、女王の目色を窺つて、頻りに品やかに會釋をするのが、それがまた一つの飾りとも見えた。それから又舳先には、さながらの人魚がゐて、撓を操る。絹絲の綱具類は、花はづかしい柔かい手で、盛んに、活潑に引張られるのを、誇るかの如くに跳り撥ねる。船からの不思議な目に見えない香りが、近くの岸にゐる者の鼻を撲つ。蒲市の者が悉皆駆け出した。で、アントニーは、たつた一人つきり、市場に残されて空気を敵手に口笛を吹いてゐた。

此の風聞は忽ち全市に擴まつた。

「亞細亞の幸福を圖るために、戀の神ヴィナスが、酒神バッカスと饗宴を開き來た」と宣傳された。女王が上陸すると、アントニーは使を遣つて、女王を晚餐に招いたところが、女王は是非こちらへお出でを願ふと言つて來た。で、女に對して決して否といつたことのない、禮儀の正しいアントニーは、十回以上も顔を刺らせて、饗宴になり往つた。徒來は只粗っぽい武人生活を送り、とかく蠻的な羅馬の饗宴にのみ馴れてゐたアントニーは、埃及女王の風流と華美とを盡した饗應に、殆んど魂を奪はれてしまつた。

クレオパトラは、此の時までは、未だ曾て戀愛の經驗を有つて居なかつた。かの大シーザーに身を委せたのは、決して戀愛の爲ではなかつた。然るに今や初めて、烈火のやうな熱情と、男性的の美と力とを具へた、英雄的快樂兒アントニーに會つたのである。クレオパトラは、初對面の瞬間から、アントニーの氣質を吞込んでしまひ、どんな微細な氣分の變化にでも應じる事が出來た。クレオパトラはかうして徹頭徹尾男に満足を與へた。

クレオパトラは、シーザーのやうな世界的偉人と接觸して以來、其の本性の底に眠つた鋭敏な知力は、非常な勢で發達した。彼女は次第に男性の弱點を洞看し、其の感情を自由に操縦する術を會得した。かうして古今に類例のない、不思議な魅力を具へた一個の女性が鍛へ上げられたのであつた。

アントニーは、又これまでに關係した女は多いが、生れてから此の方、まだこんな女に邂逅つた事はなかつたので、殆んど身も魂も打込んでしまつた。どんな色好みでも、他の女には食飽きをするが、クレオパトラだけは、あゝ旨かつたと思ふ口の下から、食慾を起させる。どんな下卑たことでも、クレオパトラがすると善く見える。彼女の不品行だけは、聖い坊さん達が祝福する位であつた。

クレオパトラは、陣營の中でも、宴樂の間でも、肉の享樂、靈の戀愛、如何なる場合にも、アントニーの同伴となる事の出来る女であつた。アントニーは有らゆる満足を此の女から受ける代りに、自分の一切を投出して、此の女に與へた。

かうして二人は互に複雑な、濃厚な戀に落ちた。程なくクレオパトラは戀の捕虜を曳きつゝ、揚々としてアレキサンドリヤへ凱旋した。

(八)

クレオパトラの美に魅せられて、埃及へ足を入れたアントニーは、歡樂の森に踏込んだタンホイゼルであつた。彼れの性來の熱性は、さながら燎原の猛火のやうに燃え立つて、驕樂と逍遙と沈溺と惑溺と流連と荒亡の中に萬事を忘れて居た。彼れはもう四十を越えて、頭髮には白髪が殖えて行くのを氣にかけずにはゐられなかつた。クレオパトラとても同じことで、無盡藏の手管はあつても、争はれないのは齡の威力で、皮膚の色は次第に黒み、紅の唇の色が褪せ、目尻にもだん／＼鳥脚の出來て行くのを見ない譯には行かなかつた。「さア／＼愛の享樂の貴重なことをお思ひなさい。つまらぬ争論をして、時を徒費するのは止めませう。生活の一分時たりとも、今はお互に、不愉快に浪費すべき時ではない……ねえ今夜は何をして遊ぼう？」彼れはかう言つて、心の底の淋しさをまぎらはしてゐた。

王國と言つたつて、たかゞ土塊ではないか？ 人生の貴さは、ひとへに愛の享樂にある。相愛する兩性が、相抱き、相愛する境界こそ、眞に無比無類だ！ アントニーはクレオパトラのためには、世界を一擲しても悔まなかつた。

併し又時には別の世界からの報知のやうに、本國の消息を聞いて、不圖夢が覺めることがある。

「此の岩疊な埃及の桎梏を叩き摧かないと、予は感溺のために一身を誤つてしまふ。……是非ともあの妖婦と手を断らねばならん。此のだらしない生活の中から、曾て經驗しない無類の弊害が生れて来る。……あんな女に逢はなければよかつた！」と心の聲は囁いた。

けれどもクレオパトラの顔を見ると、直に元のアントニーになるのが例であつた。

こんな風にして、アントニーは、クレオパトラと共に、濃厚な戀の十年を送つた。アントニーは全く埃及人と化し、局外者から観れば、兒戯に均しい逸樂に晝夜を過して、奢侈と耽溺とに、歲月の流るゝのを忘れてゐた。アントニーは、折々興に乗じて、アレキサンドリヤの夜の街を逍遙し、市民の扉口や窓口を覗き込んで、戲談をする事があつた。然う

いふ折には、クレオパトラは、いつも婢女のやうな扮装をしてついでに行つた。

ある日、アントニーは、クレオパトラと河へ行つて釣をしたが、獲物がなかつたので、女王の前を兼ねて、一人の従者に意を含めて、竊かに水中に潜らせて、魚を釣針に着けさせた。翌日クレオパトラは、人々を招いて、釣魚の催しをし、潜水夫の一人に命を含めて置いて、アントニーの針に鹽魚を着けさせた。とは知らぬアントニーは、大きな奴が掛かつたと思つて、得意で綵を揚げると、あがつて來たのは大きな鹽物であつたので、一同は堪まらず抱腹絶倒した。其の時、クレオパトラは、餘りに笑つたので、とう／＼アントニーに腹を立たせたが、其の晩やつと機嫌を直さして、翌朝は、九時にならないうちに、醉させて寝せつけてしまつた。

こんなたわいもない事が、いよ／＼アントニーの感溺を加へる種子となつた。クレオパトラには、永久に男を飽かせないだけの伎倆があつた。アントニーの快活な時でも、沈鬱な時でも、クレオパトラは、いつでも其の心を慰める術を知つて居た。或る時は故意に絶食して憔悴し、今にも焦れ死をしさうな狀を装つて、アントニーに氣を揉ませ、而もアン

トニーが室に入るのを見るや否や、さも嬉しげに迎へて、惚々と目も離さず睨めて、離れともなげに物語り、アントニーが室を出て行くと、又急に消え入るばかりに悲んで、病人のやうになつた。今は潜然と涙を流してゐるかと思ふと、多感なアントニーに其の涙を見せまいとするやうに、忽ち淋しく笑を含んで、戯談をいふこともあつた。かと思ふと、わざとすねて見せることもあり、わざと逆つて焦らすこともあり、怒ることもあり、甘へることもあり、變幻出沒、眞に端倪することが出来なかつた。さうして其の間には、いつも腹心の者に言付けて、アントニーに自分の戀情の切なことを仄示かさせるのであつた。

(九)

かうして居る間に、アントニーとオクテギヤスとの最後の争闘が起つた。二人は最初から並び立つことの出来ない運命を擔つて居た。一人は磊落な、武人肌の、情の英雄であつたが、一人は隱忍な、冷靜な、飽までも政治家肌の策略家であつた。此の十年の間に、兩

雄の間には、幾度か危機が迫つたが、其の度毎に、二人の友人が斡旋して、破綻を繕つて來た。

オクテギヤスの姉に、美貌と淑徳の聞え高いオクテギヤといふ寡婦があつたが、友人らは此の兩雄の結合を鞏固にするために、アントニーの妻が死んで、アントニーが一時埃及から歸つたのを機會に、オクテギヤとの結婚を成就させた。これで羅馬の政局は、一時小康を得たらしく見えたが、併し兩雄の心の底は、まだ決して融和しなかつた。

オクテギヤスは、年は若い、アントニーに取つては苦手であつた。勝負事をして、不思議にアントニーが負ける。伎倆では勝つてゐて、運で負ける。籤を引いても骰子を投げて、オクテギヤスの勝目が出る。埃及から連れて來た豫言者は、アントニーに勸めて早く埃及へ歸れといふ。

「アントニーどの、あの仁の傍にゐなされるのはよろしくない。閣下の守護神は、シーザーさへ居なければ、堂々たる、勇敢な、立派な、無類な精靈なのだ、あの仁が傍へ來ると壓倒されて、おびえてしまふ。あの仁が傍で光ると、閣下の光は昏くなる。閣下の精靈は

あの仁ひとの傍では、まるで怖がつてよう護らん。だからあの仁とは遠く離れておいでなさい。」

これを聞いて、アントニーはますます不安を感せずには居られなかつた。

「平和のためにオクテギヤと結婚はしたもので、予おれの楽しみは東に在る！」

アントニーは歸心矢の如く、オクテギヤを羅馬へ殘して、再び埃及へ歸つた。

アントニーの放縱な行動は、終に冷靜なオクテギヤに宣戰の口實を能へた。彼れはアントニーが貞淑な妻オクテギヤに對する侮辱と、埃及から傳はつて來るアントニーの暴狀を摘發して、羅馬市民の憤懣を刺戟し、巧みに羅馬の人心を收攬した。

アントニーとオクテギヤとの天下分け目の大戦争は、先づアクシヤム岬の沖合の海戦で開かれた。此の戦に先つて、アントニーの部下の諸將は、先づクレオパトラがアントニーと共に軍中に在ることを憂慮きやうつて、女王の歸國を主張したが、用ひられなかつた。次にはアントニーが敵の挑戰に應じて、海上で雌雄を決しようといふのを危ぶんで、口々に其の不得策なことを説いた。「身方の船の軍裝は十分ではありません。身方の水夫は、驢馬曳や

草薙男らを大急ぎで徵集して、間に合はせたのですから、逆も屢々ボンベイなど、戦つて、場數を経て居るシーザーの艦隊とは比べものになりません。敵の船は堅牢で、且つ快速を主に作られて居ますが、身方の船は大きいばかりで、極めて操縦に不便です。本來身方の強味は専ら陸軍にあるのです。老功の歩兵から出來てゐる優勢な軍隊を棄て、不利な海戦をなさるのは、安全な、確實な手段を避けて、勝負を曖昧な運に任せるのです。十分陸戦の準備が出來てるんですから、何も海戦を拒んだからとて耻辱にはなりません」と陸戦の利を主張した諸將の忠言も、顧みられなかつた。

海戦の結果は、諸將の先見に違はなかつた。戦ひの真最中、まだ勝敗も見えないうちに、後陣に配置された埃及王の旗艦アントニー號を始めとして六十艘の船艦は、何を思つたか、急に帆を揚げて退却を始めた。と見るうちに、アントニーの船も俄に帆を擴げて、大事の戦争を見棄てたまゝ、「惚けた鴨が雌めづの後を追掛けるやうに」退却するクレオパトラの後を追つた。

アントニーの艦隊は悉く潰敗した。流石に陸上の兵は、七日の間は、頑強に抵抗したが、

これも終に敵に降服してしまつた。かうして「世界の三分の二が空になつてしまつた。何十といふ王國を、女の唇を嘗めてるうちに取られてしまつた」のであつた。

(十)

アレキサンドリヤに逃げ歸つたアントニーは、深い悔恨と慚愧に心を嚙まれて、快々として物思ひに耽つて居た。

「あゝ予は此の世で宿を取り後れて、永久に迷兒になつたのだ。予は顔を見合すことも耻ぢるやうな者の後を追掛けたのだ。予の頭髮すら互ひに唾み合つてゐる。白い奴は鳶色を粗暴だと罵ると、鳶色は白い奴を臆病だ、惚てゐると悪口する。名譽をそこなつてしまつた。此の上もない耻づべき失策をしてしまつた。」彼れはひとりでかう嘆息した。

アントニーは努めてクレオボトラと顔を合せまいとしたが、涙を流して罪を謝する戀人の顔を見ると、今迄の憤怨も一時に解けて、抱擁し、接吻せざるを得なかつた。

「埃及よ、予の心はお前の舵へ心の紐で結び附けられてゐるのだから、引摺られて行くといふことは、お前は善く知つてゐた筈だ。予の魂は悉くお前に支配されてゐるのだが、お前が招けば、予は神の命に背いても出掛けて行くといふことは知つてゐた筈だ。」彼れはかう繰返した。

此の時アントニーは既に一切の希望と共に、一切の憂をも抛擲したので、身も心も輕きを覺えた。アレキサンドリヤは再び酒池肉林の天地と化し、二人は連日の歡樂に一切を忘却して居た。

そのうちに、オクテギヤスの大軍は、海陸からアレキサンドリヤに迫つて來た。アントニーは最後の一戦を試みたが、翌日の戦で、埃及の艦隊は忽ち敵の艦隊に降伏したので、陸上の埃及兵も之に倣つて、敵軍に降伏した。アントニーは此の埃及軍の降伏をクレオボトラの差金と信じて、クレオボトラの二心を罵り、怒り狂ふ勢ひに、クレオボトラは、アントニーが絶望の餘り、己れに害を加へることもあらうかと恐れて、竊かに歴代の廟へ逃げ込み、宦官をアントニーの許に遣はし、伴つて「女王に自害なれました」と告げさせた。